

長野県松本市

松本城三の丸跡

DOIJIRI

土居尻

—第5次発掘調査報告書—

2022.3

松本市教育委員会

例言

1 本書は、平成26年4月23日～11月20日に実施した、長野県松本市大手二丁目8-18に所在する松本城三の丸跡土居尻の第5次発掘調査報告書である。

2 本調査は、松本市による松本城南・西外堀整備事業および内環状北線整備事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査、整理・報告書作成を実施した。

3 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章・第2章第1節を栗津原準也、第2章第2節を山本紀之、第3章第3節1を大西理美、第3章第3節2を伊藤蔵之介、第3章第3節3・4を壬生量子、第3章第3節6を関沢聡、第3章第4節をハリノ・サーヴェイ卿、その他を原田健司が行った。

4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記・保存処理・接合復元 佐々木正子・富岡享子・古幡大治朗・洞澤文江・丸山恵
遺物実測・トレース(焼物) 大西理美・柏原佳子・竹内直美・竹平悦子・前沢里江・宮本章江・山本紀之
(木製品) 富岡享子・中澤温子・丸山恵・壬生量子 (石製品) 直井知導
(金属製品) 古幡大治朗・洞澤文江・直井知導

遺物実測図版組 直井知導・前沢里江 遺構図整理・トレース・版組・一覧表作成 荒井留美子
写真撮影(遺構) 竹内靖長・鈴木仁美 (遺物) 宮嶋洋一

DTP・編集 原田健司

5 本書で用いた略記は次のとおりである。

第〇検出面→〇検、第〇号建物址→建物〇、第〇号水道遺構→水道〇、第〇号溝状遺構→溝〇、
第〇号土坑→土〇、第〇号ピット→P〇、焼土範囲→焼土〇

6 図中で使用した方位は真北を示す。なお、図表中には調査時に設定した任意の座標系の数字を用いた箇所がある。国家座標との対応関係は第3章第1節を参照されたい。

7 本書では以下のものを遺構図にスクリーントーンで表した。

 焼土  礎  攪乱  推定ライン

8 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』に準拠している。

9 土器・陶磁器実測図の断面の塗り分けは、白：土師質土器・瓦、黒：陶磁器である。

10 発掘調査実施と報告書作成にあたり次の方々からご指導、ご助言をいただいた。記して感謝申しあげる。
金子健一、後藤芳孝、佐野元、菅沼加那、高野夏姫、中嵩茂、星野安治

11 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に収蔵・保管されている。

目次

例言・目次	3	3 木製品	42
第1章 調査の経過	4	4 箸状木製品	48
第2章 遺跡の位置と歴史		5 石製品	52
第1節 地理的環境	5	6 金属製品	54
第2節 歴史的環境	6	7 自然遺物	56
第3章 調査の方法と成果		第4節 化学分析	
第1節 調査の方法	7	1 放射性炭素年代測定	57
第2節 遺構	8	2 樹種同定	59
第3節 遺物		第4章 調査のまとめ	61
1 土器・陶磁器	23	写真図版	
2 瓦	26	報告書抄録	

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査の経緯

松本市による松本城南・西外堀整備事業および内環状北線整備事業が計画され、当該地区地権者の移転代替予定地に、周知の埋蔵文化財包蔵地である松本城三の丸跡が選定された。そのため、松本市教育委員会（以下「市教委」という。）では、開発担当部局と遺跡保護協議のうえ、破壊が避けられない範囲について発掘調査を実施し、記録による遺跡の保存を図ることとした。本調査地は平成 25 年に松本市土地開発公社による土地買収が完了したため、平成 26 年 4 月 10 日付で、土地所有者の承諾書が市教委へ提出され、代替予定地における最初の発掘調査を市教委が実施した。

現地での発掘調査は平成 26 年 4 月 23 日から 11 月 20 日の期間において実施した。調査終了後、平成 26 年 11 月 26 日付で長野県教育委員会（以下「県教委」という。）に発掘調査終了報告書を提出した。また、平成 26 年 11 月 20 日付で埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成 26 年 12 月 19 日付で県教委より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け平成 28 年 10 月 31 日付で出土文化財譲与申請書を県教委に提出し、平成 28 年 11 月 2 日付で出土文化財の譲与についての通知を受けた。

〈平成 26 年度〉

4 月 10 日 「土地所有者の承諾書」を松本市土地開発公社が市教委に提出

4 月 23 日～ 11 月 20 日 市教委が発掘調査実施

11 月 20 日 「埋蔵物発見届」「埋蔵文化財保管証」を市教委が松本警察署、県教委に提出

11 月 26 日 「発掘調査終了報告書」を市教委が県教委に提出

12 月 19 日 「文化財の認定及び帰属について」県教委から市教委に通知

〈平成 28 年度〉

10 月 31 日 「出土文化財譲与申請書」を市教委が県教委に通知

11 月 2 日 「出土文化財の譲与について」県教委から市教委に通知

第 2 節 調査体制

【平成 26 年度 発掘調査】

調査団長 吉江厚（松本市教育長）

調査担当 竹内靖長（埋蔵文化財担当係長）、鈴木仁美（嘱託）

調査員 笹本正治、宮嶋洋一

発掘協力者 井口方宏、大滝清次、折井完次、加藤朝夫、金井秀雄、神谷まゆ、坂口ふみ代、清水陽子、関谷昌也、茅野信彦、西牧まり子、松澤健太、宮澤文雄

事務局 松本市教育委員会文化財課

内城秀典（課長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、竹原学（同）、三村竜一（同）、櫻井了（主査）、石井佑樹（主事）、吉見寿美恵（嘱託）

【令和 3 年度 整理作業・報告書刊行】

報告書担当 原田健司（主任）、粟津原準也（主事）、山本紀之（会計年度任用職員 1 類）、関沢聡（同）、大西理美（同）、壬生量子（同）、伊藤蔵之介（同）、

調査員 宮嶋洋一

整理協力者 荒井留美子、柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、竹平悦子、富岡享子、直井知導、中澤温子、古幡大治郎、洞澤文江、前沢里江、丸山恵、宮本章江、

事務局 松本市教育委員会文化財課

竹原学（課長）、竹内靖長（城郭整備担当課長）、百瀬耕司（埋蔵文化財担当係長）、吉見寿美恵（会計年度任用職員 1 類）

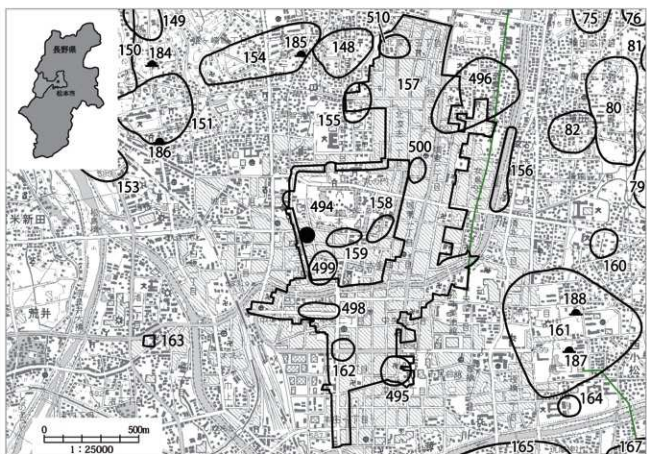
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史

第1節 地理的環境

松本盆地は、3,000m級の高山が連なる西の飛騨山脈と、美ヶ原高原や高ボッチ高原を有し、1,000～2,000m級の山々が連なる東の筑摩山地によって挟まれた南北に長い盆地であり、松本の中心市街地は、東側の筑摩山地から流れてきた薄川と女鳥羽川によって形成された複合扇状地の末端に位置している。

松本城は松本市中心市街地から北西寄りに位置し、南南西に緩く傾斜した地形上に築城された平城で、本丸・二の丸・三の丸とそれぞれを囲む3重の堀（内堀・外堀・総堀）で構成されている城郭部分と、その外側に位置する城下町で成り立っている。三の丸には、家老をはじめとする上級家臣の屋敷があり、東・西・北には馬出・門が設けられ、南には大手門櫓形が設けられていたほか、葵馬場や作事所といった藩の施設が設けられていた。また、松本城周辺は伏流水の集水地域で、非常に湧水が豊富な地域である。

今回の調査地は、三の丸西側中央に位置し、江戸時代の絵図から武家屋敷・総堀・土塁にあたる。標高は586mを測り、北東から南西に向かって緩く傾斜する地形を呈している。



●：今回の調査地点、数字は松本市遺跡台帳記載の遺跡番号

75 大幡原遺跡	151 城山腰遺跡	161 県町遺跡	187 県塚1号古墳
76 大村立石遺跡	153 宮淵本村遺跡	162 本町南遺跡	188 県塚2号古墳
79 宮北遺跡	154 蟻ヶ崎遺跡	163 清城址	494 松本城跡
80 横田遺跡	155 田町遺跡	164 埋植遺跡	495 天神西遺跡
81 大村塚田遺跡	156 女鳥羽川遺跡	165 筑摩遺跡	496 岡の宮遺跡
82 横田古原敷遺跡	157 松本城下町跡	167 筑摩北川原遺跡	498 伊勢町遺跡
148 沢村遺跡	158 丸の内遺跡	184 開き松古墳	499 土居尻遺跡
149 放光寺遺跡	159 大名町遺跡	185 饅頭塚古墳	500 片端遺跡
150 犬甘城址	160 四ツ谷遺跡	186 勢多賀神社裏古墳	510 堂町遺跡

図1 調査地の位置と周辺遺跡 (S=1/25,000)

第2節 歴史的環境

近世城郭である松本城跡 (No.494) および松本城下町跡 (No.157) が立地する緩傾斜地は、松本城の前身である深志城築城前から現在にかけてのたび重なる造成工事等が原因で原地形がすでに失われてしまっている。複合扇状地の末端部分にあたることから、もともとは湧水を伴う低温地部分と河川氾濫等により形成された自然堤防による微高地部分が複雑に絡みあっていた地形と考えられている。現在も沈降が続く低温地部分にあたる松本市街地中心部には、従来から考古学的な遺跡は存在していないと思われていたが、戦後昭和期の開発工事あるいは近年の市街地再開発を起因とする発掘調査等の結果から、近世松本城三の丸内および城下町範囲内の微高地上に縄文時代から中世にかけての遺跡の存在が知られることとなった。

1 周辺遺跡の概要

丸の内遺跡 (No.158) では日本銀行松本支店建設時に縄文時代中期から後期の土器片が出土している。土居尻遺跡 (No.499) では平成12年度の発掘調査で古墳時代の集落とみられる遺構を検出している。大名町遺跡 (No.159) では縄文時代土器片・中世遺物、片端遺跡 (No.500) では弥生時代土器片、伊勢町遺跡 (No.498) では中世遺物、本町南遺跡 (No.162) では古墳時代土器片・中世遺物、天神西遺跡 (No.495) では古墳時代土器片、岡の宮遺跡 (No.496) では古墳時代土器片・平安時代土器片、田町遺跡 (No.155) では縄文時代土器片・古墳時代土器片、堂町遺跡 (No.510) では古墳時代土器片等が現在まで確認されている。

2 深志城期

江戸時代、水野氏が松本城藩主時代に編纂した「信府統記」によると、時代は中世、当初は坂西氏がこの地に居館を構え、その居館跡を永正元年(1504)に小笠原氏の一族である島立右近貞永が、小笠原氏の拠点「井川の館」の北の守りとして整備し、「深志城」を築いたとされている。

その後、天文20年(1551)、武田晴信が松本平に侵攻して以後、「深志城」を拡張整備し約32年間にわたり信濃侵攻の拠点としたことは歴史上の事実である。しかしながら「深志城」自体の実態が判然としていないため、武田氏が城時代の城郭の位置・規模・縄張り等の詳細はあきらかにはなっていない。

三の丸跡土居尻第2次調査と三の丸跡大名町第1次調査において「深志城」期に存在していたと推定される堀跡が発見されるなど、近年の発掘調査で「深志城」期とみられる整地層や遺構あるいは遺物が確認され始めており、今後の調査であきらかになることが期待される。

天正10年(1582)、武田氏の滅亡と本能寺の変を契機として、小笠原長時の三男貞慶が旧領を回復して「深志城」への帰還を遂げ、城名を「松本城」と改め、大規模な城郭整備にとりかかったと「信府統記」は記している。この時の整備で現在の松本城郭内ならびに城下町の原形が形成されたものと思われるが、実際はどの程度の整備状況であったのか不明である。

3 松本城期

徳川家康の関東移封に伴い小笠原氏も関東へ移ることになり、代わりに豊田秀吉方の石川数正が松本城に入封した。数正は城の普請を早速開始し御殿の造営等を行い、数正の意思を継いだ子康長は天守を建て、さらに郭内外の侍屋敷の整備等を行った。総堀を深くし、土塁を築き、現在も見られる三の丸侍屋敷地の区画割がこの時完成した。ここに近世城郭としての松本城の歴史が始まったとされているが、石川氏はその後改易となったことから公的文書類が散逸され残っておらず、詳細は確認されていない。

以後、江戸時代を通じ藩主がたびたび変わった際にも松本城総堀より内側の郭内縄張りに大きな改変は行われず、調査地の土井尻地籍も石川氏時代の縄張りが概ね踏襲され続け、現在の状況となっている。

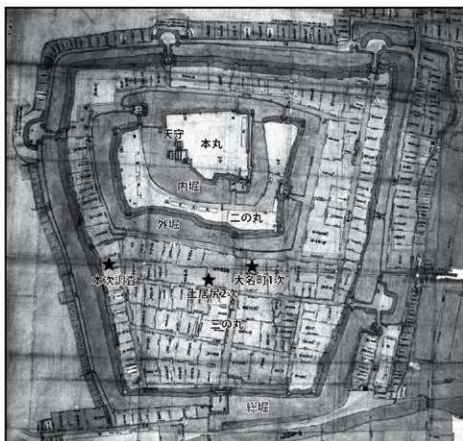


図2 『享保十三年秋松本城下絵図』（一部、加筆）

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 調査区の設定

今回の事業予定地 866mのうち、431mを調査区として設定した。調査は、西区と東区に分けて実施した。西区から調査を開始し、その後反転し東区の調査に移行した。

2 発掘手順

パワーショベルを使用して、表土や攪乱土を除去し、最上面で検出された生活面を第Ⅰ検出面とした。その後、人力による検出を行い、検出が完了した遺構から遺構番号を命名し、人力による掘り下げを開始した。なお、遺構番号は検出面ごとに1号から順に命名した。掘り下げの終了した遺構は写真と測量図を作成し、記録を行った。すべての遺構の掘り下げと記録が終了した後、重機を使用して第Ⅱ検出面までの掘り下げを行った。その後、第Ⅴ検出面まで同様の手順を繰り返した。最後に発生土による埋め戻しを行い、発掘調査の現場における工程を終了した。

3 測量・写真記録

遺構測量に係る基準は国家座標（世界測地系・第8系・東北太平洋沖地震前の値）を用いた。調査地周辺にある街区多角点を基に調査地内に基準点を設置し、これを基に3mグリッドを設定した。測量基準点はX=26416.469、Y=-47797.992をNS0、EW0とした。平面図は簡易遣り方測量により作成し、部分的に光波測距儀を併用した。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則とし、詳細図が必要なものは1/10で作成した。写真は発掘調査の各調査段階と遺構等の遺物出土状況および完掘状況を35mm一眼レフカメラ（リバーサル、白黒フィルム）とデジタルカメラで撮影した。

第2節 遺構

今回の調査では計5面の遺構検出面において、合計270の遺構が検出された。溝状遺構以外は、検出段階で長軸50cm以上の穴を土坑、それ未満のものをピットとした。遺構検出時に上下の整地層の一部や上層の遺構を重複してとらえたものもあり、遺構であると疑わしきものは欠番とした。

以下各区・検出面について主な遺構を遺構中心に詳細を述べていく。

1 西区

(1) 土塁

ア 基盤の状況

基底部の土層から推定される土塁盛土の最大幅員は約19.5m、Ⅲ検段階の土塁盛土の幅員は約17.3mである。土塁東半の基底部直下にはⅣ検の整地層が堆積していることから、土塁の形成時期は、戦国時代末以降であると推定できる。

イ 盛土の状況

土塁の盛土部分は近代以降に削平されているため、築造当初の形状は不明である。基底部付近で厚さ20～140cmの版築土が確認できた。版築土は、砂質シルトから荒砂までの異なる土質が細かく層状に堆積している。西総堀土塁跡第1・2次調査での土塁とほぼ同様の堆積状況であった。

(2) 杭列および総堀

土塁法尻と総堀法面との境界に設けられた狭いテラス部分が確認できた。このテラスは、平成16・17年度の東総堀跡と西総堀土塁跡第1・2次調査でも杭列を伴って確認されている。

総堀の埋土内に、大量の瓦と礫が投げ込まれており、それらを除去すると複数の杭列が検出された。近代に、土塁を削平する際に、その上にあった瓦塼を解体して総堀の中に廃棄したものと推測される。なお、出土した瓦の中に被熱痕のあるものが多数含まれていたほかに、焼土や炭化物もみつかったことから、火災を機に瓦塼を解体した可能性がうかがえる。

今回の調査で出土した木杭は297本を数える。木杭の形状・形態から複数の割り方パターンが認められ、みかん割り材、方形割り材、芯持ち丸太材、丸太半裁材、建築部材の転用材と命名し、分類した。それぞれの分布状況を図8に示した。

丸太材 芯持ちの太い材を使用（木皮が付いているもの多数）、土中部分が最も深い。土塁側に列状に位置する。

丸太半裁材 細い丸太材を使用し、半裁したもの。土中部分は浅い。総堀の内側に列状に位置する。

みかん割り材 太い材を使用、土中部分が深いものが多い。上記2つの間に列状に位置する。

方形割り材 みかん割りを更に割ったもの。太い材を使用し、土中部分が深いものが多い。みかん割り材と同様の分布状況を持つ。

転用材 柱材を転用したもので、数は少ない。柱を調整した手斧の痕跡が確認できる。みかん割り材と同様の分布状況を持つ。

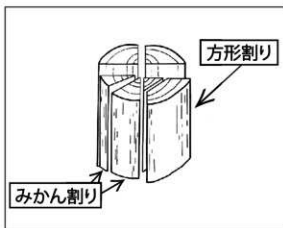


図3 杭の割り方模式図

木杭の割り方パターンと打ち込まれてる位置に規則性を認めることができた。丸太半裁の杭は総堀の一番内側に、丸太材は一番外側（土塁側）に列を成して打ち込まれており、その間にみかん割り材や方形割り材が打ち込まれている。分布状況以外にも特筆される点として、丸太材は地中に1m以上も深く打ち込まれている傾向がある一方、丸太半裁は比較的浅く打ち込まれているということが挙げられる。

この様な分布状況や打ち込まれ方から、太く長い材（丸太材など）で深く打ち込まれている杭列は土塁の土留め的な機能が、細く短い材（丸太半裁など）は防御的な機能をそれぞれ有していたのではないかと想定される。

杭列を伴う堀の事例として、米沢城の内堀の調査で発見された木杭があり、松本城の発見例と同様に、土塁裾部に位置している。また、慶長19年（1614）の大坂の陣の戦いの様子を描いた「大坂冬の陣図屏風」をみると、土塁堀側裾部に杭や柵が設けられている様子がわかる。

(3) その他遺構

土坑2基とピット4基が土塁を切るように検出された。

土1・2 総堀の埋土と同時期の遺物が出土していることから、土塁削平後の近代以降に掘られた遺構であろうか。

2 東区第Ⅰ検出面

建物跡2軒、土坑52基、ピット36基、焼土範囲3箇所を検出した。焼土範囲の他に、被熱した遺物が比較的多く散見される。出土遺物から、当該面は19世紀前半～近代の生活面と考えられる。

建1 建物の布基礎と考えられる。

土37・40・44・46～50・礎石 検出された礎石と複数の土坑が同軸上に約1間幅に配置されており、合わせて6間×6間の建物が想定される。建1に切られる。

土38・39・45・55・焼土範囲・礎石 一列に1間間隔で並ぶ。建1を切る。

3 東区第Ⅱ検出面

水道遺構2条、溝状遺構1条、土坑42基、ピット35基を検出した。出土遺物から、当該面は17世紀後半～18世紀前半の生活面と考えられる。

水道1・土54・55 水道1の竹管が土54・55の桶状集水桝に直結しており、合わせて水道遺構と捉えることができる。出土遺物から水道1の掘方は18～19世紀に、土54・55の集水桝の埋土は幕末に帰属する。このことから、本遺構はⅡ検段階に構築され、Ⅰ検段階に廃絶されたと推定される。

水道2 調査区西側に位置しており、検出した範囲より本来さらに南北に延びていたものと考えられる。北端で木製のジョイントが認められ、その穴の形状から竹管で導水していたものとわかる。さらに、水漏れ防止用に粘土で被覆されていることも確認した。なお、中央部と南部でジョイントは残存していなかったが、粘土塊が検出された。

土1・2 それぞれに木桶が設置され、並ぶように検出された。覆土に多量に焼土塊や炭化物が含まれ、桶上部が炭化していたことから、火災後に廃絶されたものと推測される。

土20 礎石を有するが、当該遺構と並ぶ土坑がないため、建物跡等の構造物とは想定できない。

土30 平面形は瓢箪形を呈し、拳大以上の礫が大量に投げ込まれていた。覆土からは瓦片や総堀部の碗の欠片が出土した。

P35 中国銭8点が重なって出土したほか、17世紀後半の肥前産の陶器製鉢等も認められた。

4 東区第Ⅲ検出面

溝状遺構 3 条、土坑 24 基、ピット 20 基を検出した。出土遺物から、17 世紀前半～18 世紀前半の生活面と考えられる。

土 2・3・32 礎石が据えられ、一列に並ぶ。

NSO～S5・E28～E36 グリッド 中央部北側の胴木と溝 2 は同軸に位置していることから、建物の基礎を構成する同一遺構と推定される。土 18 内で出土した木材も、その位置関係から建物基礎の胴木の続きである可能性がある。

5 東区第Ⅳ検出面

土塁基底部より下層に広がる整地面であることから、土塁構築以前の生活面である。溝状遺構 2 条、土坑 12 基、ピット 26 基を検出した。上層のⅠ～Ⅲ検と比べて、出土土器・陶磁器の量は圧倒的に少ないが、それらから深志城期である 16 世紀の生活面と考えられる。東西に延びる溝 1 やその先にある土 2、その他土坑から祭祀的な木製品が多数出土している状況から、一帯は祭祀に関連する空間である可能性がある。溝 1 東端の南側に同軸の礎石列やピット列が並ぶ様相から、建物などの構造物が想定できる。また、本調査地の近接地である土居尻第 11 次調査地では 15 世紀後半～16 世紀初頭の溝状遺構から柿経や笹塔婆が出土、また、土居尻第 9 次と大名町第 2 次調査地では築城前の整地土から笹塔婆の出土が確認されている。今後の課題として、より広い範囲で築城以前の祭祀の実態を考えていく必要がある。主な遺構の詳細は以下のとおり。

土 2 東端に位置する規模の大きい土坑で、遺物の出土状況や堆積状況から、ゴミ穴と推測される。出土遺物の中で特筆すべきは、青花皿の欠片 1 点と齋申状木製品などの複数の祭祀具である。また、北半では、馬糞が層状に敷き詰められた堆積を確認した。

土 7 寛永通宝 3 点が出土していることから、上層の検出面で捉えきれなかった遺構と考えられる。また、箸状木製品や形代の出土は見られず、唯一仏教具である笹塔婆が出土しているため、同検出面の他遺構とは異なった様相を呈している。

建物跡 調査区東側において「コ」の字状に並ぶ土坑とピット、礎石を検出、構造物の基礎と考えられる。すぐに南側には祭祀具を伴う溝状遺構がある。

溝 1 南北に延び、北側は土 2 に切られている。人形 1 点を含む木製品が複数出土している。

6 東区第Ⅴ検出面

溝状遺構 2 基、土坑 5、ピット 3 基を検出した。出土遺物から、当該面は 9 世紀後半の生活面と考えられる。これまでの調査でも三の丸跡内から古代の遺物は散見されたが、本調査で初めて平安時代の遺構が確認された。現在、本調査地を含む範囲は同時代の周知の埋蔵文化財包蔵地には指定されていないが、周辺で行われている発掘調査の成果と併せ、状況が把握できれば、包蔵地範囲見直しの検討を行う必要がある。また、近接する土居尻遺跡から古墳時代の遺構・遺物が出土しており、大名町遺跡では縄文時代の土器片が出土していることから、新規の遺跡になる可能性が高い。

土 1 柱材が残る柱穴痕を検出した。柱穴痕の上部から礎盤に使用した可能性のある厚い板状の木材が認められた。また、地固めのためであろうか、遺構内外に杭が打ち込まれていた。

溝 1・2 両溝は調査段階に分けて調査したためにそれぞれに遺構番号を付したが、T 字状に合わせる 1 つの遺構と認められる。溝 1 では、護岸と考えられるような杭が設置されている。9 世紀中～後半の須恵器杯や黒色土器杯 A 等が出土している。

表1 土坑一覽表

土坑 編號	地区 別	平面形	短冊 (cm)			新旧関係		備考
			長径	短径	深さ	本坑より旧	本坑より新	
1	西 1						堀 1 号	
2	西 1							
3	東 1	円形?	45	(1)8	5			調査区
4	東 1	楕円形	49	(2)9	8			堀瓦
5	東 1	円形	144	(1)8	7			
6	東 1	円形	46	(4)3	6		± 7	
7	東 1	楕円形	79	(6) 8		P10・± 6		
8	東 1	円形	45	41	7	P10		
9	東 1	楕円形	50	34	10			
10	東 1	楕円形	(5)2	33	12		± 11	
11	東 1	円形	62	31	6	± 10・15		
12	東 1	円形	43	39	3	± 13・15		
13	東 1	楕円形	92	64	5	P13・± 14	± 12	
14	東 1	楕円形	(4)6	41	5	P13	P15・± 12・13	
15	東 1	円形	67	55	18	± 17	P12・± 11・12・18	
16	東 1					± 21・17		
17	東 1					± 21	± 16・19・15・18	
18	東 1	楕円形	50	30	15	± 15・17・19		
19	東 1	楕円形	88	57	8	P18・± 17	± 18・20	
20	東 1					P18・± 19・21		
21	東 1					P18	± 22・16・17・20	
22	東 1	円形?	51	44	9	± 21		
23	東 1	楕円形	46	38	20			
24	東 1	楕円形	64	47	8			
25	東 1	円形?	56	(2) 10				堀瓦
26	東 1	円形	44	38	12			
27	東 1	円形	44	40	6			
28	東 1	楕円形	50	25	6			
29	東 1	楕円形	57	(4) 4		P23	P22・± 31	
30	東 1	楕円形	50	(3) 8	9		P24・± 31	
31	東 1	楕円形	88	42	7	± 20・30・32		
32	東 1	楕円形	97	53	10		± 31	
33	東 1	円形	36	34	7	± 34		
34	東 1	楕円形	45	35	26		± 33	
35	東 1	円形	48	42	6			
36	東 1	楕円形	73	58	14			
37	東 1	円形	74	67	15			
38	東 1	円形	(1)5	94				
39	東 1	円形?	52	(3) 13				礎石
40	東 1	円形	75	71	13			礎石
41	東 1	楕円形	98	70	14		建物 1	
42	東 1	楕円形?	(2) 7	37	5			べらト木版
43	東 1	楕円形	115	33	8		建物 1	
44	東 1	円形	80	79	4		建物 1	礎石
45	東 1					± 47		
46	東 1	楕円形	79	50	14		建物 1	礎石
47	東 1					± 45		礎石
48	東 1	円形	77	75	27			
49	東 1	円形	86	75	21			
50	東 1	円形	59	53	16			礎石
51	東 1	楕円形	61	36	4			
52	東 1	楕円形	88	54	8			
53	東 1							礎石
54	東 1							堀
55	東 1							堀
1	東 Ⅱ							堀
2	東 Ⅱ							堀
3	東 Ⅱ	円形	40	36	26			堀瓦
4	東 Ⅱ							
5	東 Ⅱ	楕円形						
6	東 Ⅱ	楕円形						礎石
7	東 Ⅱ							礎石
8	東 Ⅱ							
9	東 Ⅱ	楕円形						
10	東 Ⅱ	楕円形						
11	東 Ⅱ	円形						溝 1
12	東 Ⅱ	円形						
13	東 Ⅱ	円形						
14	東 Ⅱ	円形						
15	東 Ⅱ	楕円形						
16	東 Ⅱ	楕円形						溝
17	東 Ⅱ						± 18	
18	東 Ⅱ							± 17
19	東 Ⅱ							欠番
20	東 Ⅱ	楕円形						
21	東 Ⅱ	円形					± 22	
22	東 Ⅱ	円形					± 17	
1	東 Ⅲ	楕円形	130	81	42	± 2		堀
2	東 Ⅲ						± 1	溝
3	東 Ⅲ	楕円形	67	29	40			
4	東 Ⅲ							?
5	東 Ⅲ							欠番

土坑 編號	地区 別	平面形	短冊 (cm)			新旧関係		備考
			長径	短径	深さ	本坑より旧	本坑より新	
23	東 Ⅲ							
26	東 Ⅲ					26		
27	東 Ⅲ	半楕形	80	42	12			
28	東 Ⅲ	円形						礎石
29	東 Ⅲ	楕円形	62	31	22			調査区
30	東 Ⅲ							
31	東 Ⅲ							
32	東 Ⅲ						± 31	
33	東 Ⅲ							
34	東 Ⅲ	円形?	124	(6)3	15	± 40		調査区
35	東 Ⅲ	楕円形	88	(5)6	5			べらト木版
36	東 Ⅲ	円形	33	27	9			
37	東 Ⅲ	楕円形?	(14)6	(9)6	4	± 17		
38	東 Ⅲ	円形	62	58				礎石
39	東 Ⅲ					水 2 号		
40	東 Ⅲ						± 34・32	
41	東 Ⅲ	楕円形	(5)2	30	12		溝	
42	東 Ⅲ	楕円形	(6)6	(5)2	7			べらト木版
43	東 Ⅲ	円形	58	49	6	P35		
44	東 Ⅲ	楕円形	82	(3) 9			水道 2	
45	東 Ⅲ	楕円形	96	40	25			
46	東 Ⅲ							堀瓦
1	東 Ⅳ	楕円形	101	66	7			瓦葺中
2	東 Ⅳ	楕円形	45	63				礎石
3	東 Ⅳ							礎石
4	東 Ⅳ							± 5・8・12
5	東 Ⅳ	円形	75	143	20	± 4・8		調査区
6	東 Ⅳ	円形	36	32	23	± 8	± 5	
7	東 Ⅳ							欠番
8	東 Ⅳ					± 4・13	± 5・6・10・P1	
9	東 Ⅳ							欠番
10	東 Ⅳ	楕円形	125	52	13	± 8・13・11	P2	
11	東 Ⅳ						P2・± 30	
12	東 Ⅳ					± 4	± 14・礎石	
13	東 Ⅳ						± 10・11・8	
14	東 Ⅳ	楕円形	57	38	8	± 12		
15	東 Ⅳ							
16	東 Ⅳ	円形	72	62	21			
17	東 Ⅳ	円形	47	45	6			
18	東 Ⅳ	楕円形	(6)6	44	6		P16	
19	東 Ⅳ	楕円形	(1)20	95	15	± 20	P18	調査区
20	東 Ⅳ							± 21・19
21	東 Ⅳ					± 20		1層± 55 層に切られる
22	東 Ⅳ	円形	71	67	16	± 30・21		
23	東 Ⅳ							± 24
24	東 Ⅳ					± 23		1層± 54 層に切られる
25	東 Ⅳ							欠番
26	東 Ⅳ	円形?	86	(5)6	13	± 27		
27	東 Ⅳ						± 26・28	
28	東 Ⅳ	円形	120	103	20		± 27・溝状遺構 1・礎石	
29	東 Ⅳ	楕円形?	108	143				調査区
30	東 Ⅳ							
31	東 Ⅳ							
1	東 Ⅴ		(1)66	63	41			調査区
2	東 Ⅴ					溝 1	P1	
3	東 Ⅴ							欠番
4	東 Ⅴ							欠番
5	東 Ⅴ	楕円形	84	73	6			P3・2
6	東 Ⅴ	楕円形	60	44	7			
7	東 Ⅴ	円形	71	66	16	P6		
8	東 Ⅴ							欠番
9	東 Ⅴ	楕円形	51	31	15			
10	東 Ⅴ	楕円形	130	40	9			
11	東 Ⅴ	円形	77	31	5		溝 1	
12	東 Ⅴ	円形	86	86	8			
13	東 Ⅴ	楕円形	83	62	9			
14	東 Ⅴ	円形	87	80	8			
15	東 Ⅴ	楕円形	73	46	16			
16	東 Ⅴ	楕円形	48	31	11			溝
17	東 Ⅴ					± 18		
18	東 Ⅴ						± 17	
19	東 Ⅴ							欠番
20	東 Ⅴ	楕円形	127	72	6			
21	東 Ⅴ	円形	54	48	15	± 22		
22	東 Ⅴ	円形	48	(3) 7			± 21	
1	東 Ⅵ	楕円形	130	81	42	± 2		堀
2	東 Ⅵ						± 1	溝
3	東 Ⅵ	楕円形	67	29	40			
4	東 Ⅵ							?
5	東 Ⅵ							欠番

※ () 内数字は径を指す。

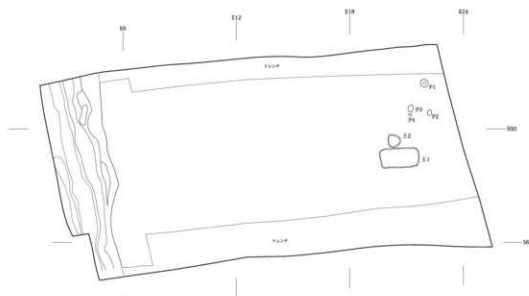
表2 ビット一覧表

BIT No.	種 別	平面図	短縮 (cm)		軌道間隔		備考
			長径	短径	厚さ	本軌より計	
1	Ⅰ						
2	Ⅰ						
3	Ⅰ						
4	Ⅰ						
5	Ⅰ	欄内形	17	13	5		
6	Ⅰ	欄内形	30	23	9		
7	Ⅰ	円形	22	22	6		
8	Ⅰ	欄内形	33	27	8		
9	Ⅰ	円形	26	23	5		
10	Ⅰ	円形?	36	(24)	9	P11・17・8	
11	Ⅰ	円形	26	25	12	P10	
12	Ⅰ	欄内形	32	22	4	±15	
13	Ⅰ	円形?	(23)	10	13	±13・14	
14	Ⅰ	円形	20	16	29		
15	Ⅰ	円形	26	22	5	±14	
16	Ⅰ	円形	28	27	3		
17	Ⅰ	欄内形	20	13	6		
18	Ⅰ		(16)	(16)	5	±19・20・21	
19	Ⅰ	欄内形	38	19	14		
20	Ⅰ	欄内形	31	23	6		
21	Ⅰ	欄内形	27	19	7		
22	Ⅰ	欄内形	37	29	7	±29	
23	Ⅰ	円形	32	(28)	11	±29	
24	Ⅰ	欄内形	39	29	9	±30	
25	Ⅰ	欄内形	31	24	7		
26	Ⅰ						欠番
27	Ⅰ						欠番
28	Ⅰ	円形	34	29	11		
29	Ⅰ	円形	34	33	6		
30	Ⅰ	円形	28	28	7		
31	Ⅰ						欠番
32	Ⅰ						欠番
33	Ⅰ	円形	17	17	7		
34	Ⅰ	円形	28	20	4		
35	Ⅰ	円形	28	27	14		
36	Ⅰ	欄内形	32	14	7		
37	Ⅰ						
38	Ⅰ	円形	30	29	5		
39	Ⅰ	円形	46	39	6		
40	Ⅰ	円形?	45	(39)			調査区
1	Ⅱ	円形	25	22	27		
2	Ⅱ	円形	21	18	9		
3	Ⅱ	欄内形	36	18	14		
4	Ⅱ	円形	30	28	10		
5	Ⅱ	円形	30	24	20		
6	Ⅱ	円形	27	24	5		
7	Ⅱ	円形	26	24	0		
8	Ⅱ	円形	24	21	10		
9	Ⅱ	円形	25	25	5	P55	
10	Ⅱ	欄内形	30	14	7		
11	Ⅱ						欠番
12	Ⅱ	円形	32	38	20		
13	Ⅱ	円形	30	25	0	±17	
14	Ⅱ	円形	16	15		P15	
15	Ⅱ	円形	19	17	0	P14	
16	Ⅱ						欠番
17	Ⅱ						欠番
18	Ⅱ						欠番
19	Ⅱ	欄内形	16	6	8		
20	Ⅱ						欠番
21	Ⅱ						欠番
22	Ⅱ	円形	20	18	9		
23	Ⅱ	円形	34	30	3		
24	Ⅱ	円形	45	42	4		
25	Ⅱ	円形	42	35	5		
26	Ⅱ						欠番
27	Ⅱ						欠番
28	Ⅱ						欠番
29	Ⅱ	欄内形	34	16	7		
30	Ⅱ	円形	25	21	13		
31	Ⅱ						
32	Ⅱ						欠番
33	Ⅱ	欄内形	29	18	8		
34	Ⅱ						欠番
35	Ⅱ	欄内形	(33)	29	6	±43	
36	Ⅱ	円形	13	11	10	P37	

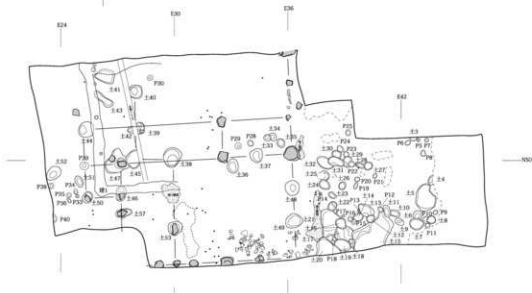
BIT No.	種 別	平面図	短縮 (cm)		軌道間隔		備考
			長径	短径	厚さ	本軌より計	
37	Ⅱ	円形	25	22	9	P36	
38	Ⅱ						欠番
39	Ⅱ						欠番
40	Ⅱ						欠番
41	Ⅱ	欄内形	42	31	24	P9	
42	Ⅱ						欠番
43	Ⅱ						欠番
44	Ⅱ						欠番
45	Ⅱ	欄内形	16	8	3		
46	Ⅱ	円形	15	13	14		
47	Ⅱ						
48	Ⅱ	欄内形	(41)	(20)	16		水道通機? ヘルド未取
49	Ⅱ						欠番
50	Ⅱ						欠番
51	Ⅱ						欠番
52	Ⅱ	欄内形	53	16	6		
53	Ⅱ	欄内形	<50>	32	15		
54	Ⅱ	欄内形	38	10	5		±12
55	Ⅱ	円形	20	18	5	P9	
1	Ⅲ	円形	22	21	10	±8	
2	Ⅲ	円形	18	17	8	±10・11	
3	Ⅲ	欄内形	27	17	6		
4	Ⅲ	円形	17	15	5		
5	Ⅲ	欄内形	41	28	6		
6	Ⅲ	円形	15	14	5		
7	Ⅲ	円形	27	26	6		
8	Ⅲ	円形	25	22	12	P9	
9	Ⅲ						P9
10	Ⅲ	円形	(15)	14	6		P11
11	Ⅲ	円形	20	18	5	P10	
12	Ⅲ	欄内形	25	19	4		
13	Ⅲ	欄内形	36	21	10		P14
14	Ⅲ	欄内形?	50	35	14	P13	
15	Ⅲ	欄内形?	(23)	36	7		調査区
16	Ⅲ	欄内形	52	32	9	±18	
17	Ⅲ	円形	25	22	4		
18	Ⅲ	円形	56	35	5	±19	
19	Ⅲ						欠番
20	Ⅲ						欠番
21	Ⅲ	円形	30	28	15		
22	Ⅲ	円形	32	29	13	±27	
1	Ⅳ	円形	34	50	12	±2	
2	Ⅳ	円形	35	34	5	±5	
3	Ⅳ	円形	40	38	21	±5	
4	Ⅳ	円形	35	31	46		
5	Ⅳ	欄内形	43	22	12		
6	Ⅳ	円形?	30	(26)	9	±7	
7	Ⅳ						欠番
8	Ⅳ	円形	35	28	3		
9	Ⅳ	円形	30	20	3		
10	Ⅳ	円形	27	21	10		
11	Ⅳ	円形	28	26	11		
12	Ⅳ	円形	37	36	15		
13	Ⅳ	円形	24	20	26		
14	Ⅳ	欄内形	31	23			
15	Ⅳ	円形	30	28	11		
16	Ⅳ						欠番
17	Ⅳ						欠番
18	Ⅳ	円形	30	29	13		
19	Ⅳ	円形	18	17	11		
20	Ⅳ	円形	52	27	10		
21	Ⅳ	欄内形	32	20	10		
22	Ⅳ	円形	24	19			
23	Ⅳ	円形	44	37	16		
24	Ⅳ	円形	33	26	12	P25	
25	Ⅳ	円形	32	30	10		P24
26	Ⅳ	円形	24	24	10		
27	Ⅳ	欄内形	26	20	14		
28	Ⅳ	欄内形	47	35	6		
29	Ⅳ	円形	21	17	6		欠番
30	Ⅳ	円形	19	17	11		
1	Ⅴ	欄内形	(44)	27	8		
2	Ⅴ	円形	25	24	20		
3	Ⅴ						
4	Ⅴ	円形	30	28	9	溝2	

※ () 内数字は短縮率を表す。

西区



東区Ⅰ棟



東区Ⅱ棟

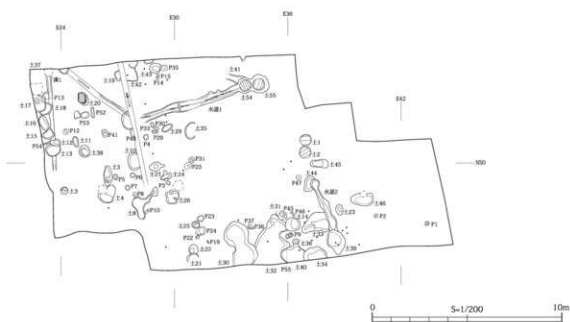
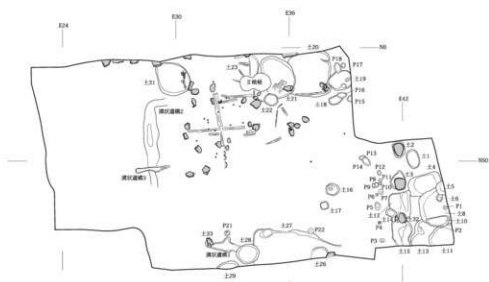
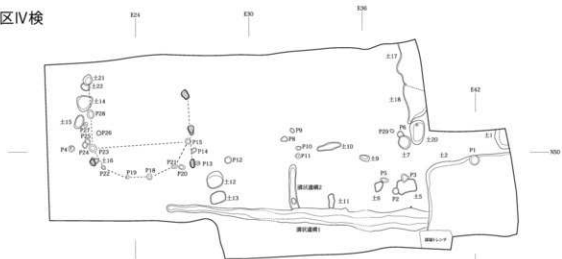


図5 西区・東区Ⅰ～Ⅱ棟 全体図

東区Ⅲ校



東区Ⅳ校



東区Ⅴ校

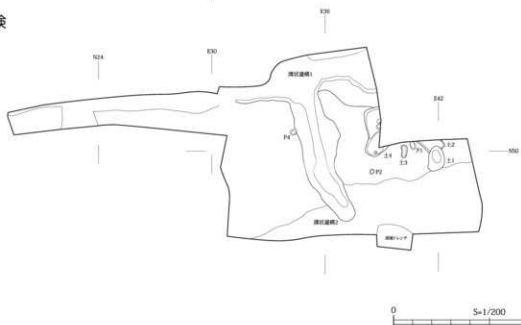
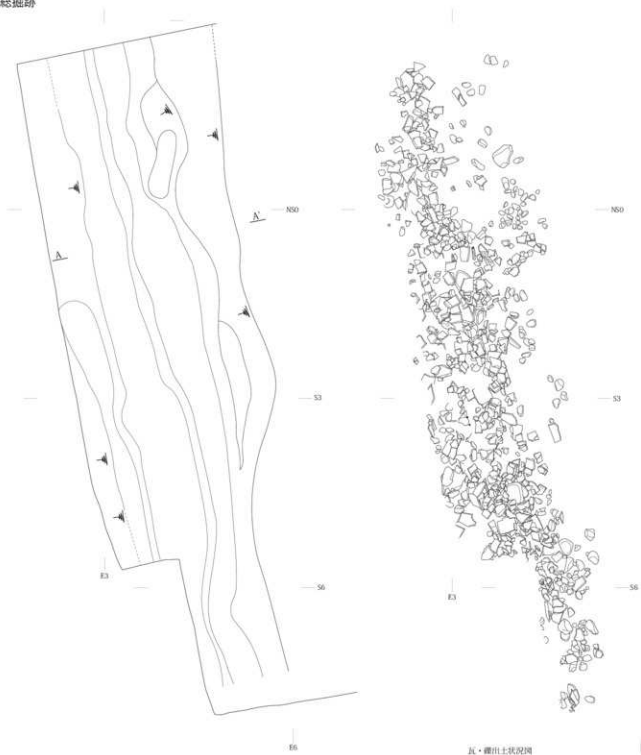
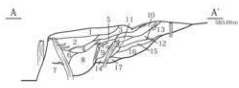


図6 東区Ⅲ～Ⅴ校 全体図



瓦・礫出土状況図



- 1: 5Y3.5/1 オリーブ黒シルト質 (粘土粒・炭粒少)
- 2: 5Y2/1 オリーブ黒シルト質 (細砂含粘土粒・炭粒少、炭土粒含)
- 3: 2.5Y4.5/1 黄灰シルト質 (細砂含粘土粒中、炭粒少、炭土粒含)
- 4: 2.5Y4/1 黄灰シルト質 (炭粒多粘土粒、炭・炭土粒含)
- 5: 5Y4/1 灰シルト質 (粘土粒少、炭粒・炭土粒含)
- 6: 粘質砂礫土
- 7: 7.5Y3/1 オリーブ黒粘土 (瓦片・礫物含)
- 8: 5Y4/1 灰シルト質 (炭粒多、炭・炭土粒少、炭粒含)
- 9: 5Y4.5/1 灰シルト質 (粘土粒多、炭粒少)
- 10: 2.5Y3.5/1 黒周シルト質 (炭粒・炭土粒含、炭粒含)
- 11: 5Y3.5/1 オリーブ黒シルト質 (黄灰土層中、炭粒少、炭粒含)
- 12: 5Y3/1 オリーブ黒シルト質 (炭土粒少、炭粒含)
- 13: N4.5/0 灰シルト質 (炭土粒中、炭分微)
- 14: 粘質砂礫土
- 15: N4/0 灰礫砂 (炭土粒少、炭粒土層・炭粒含)
- 16: N5/0 灰シルト質 (炭土層中)
- 17: 粘質砂礫土

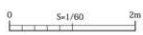
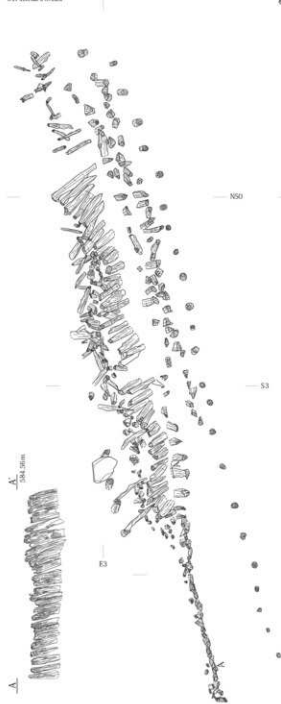


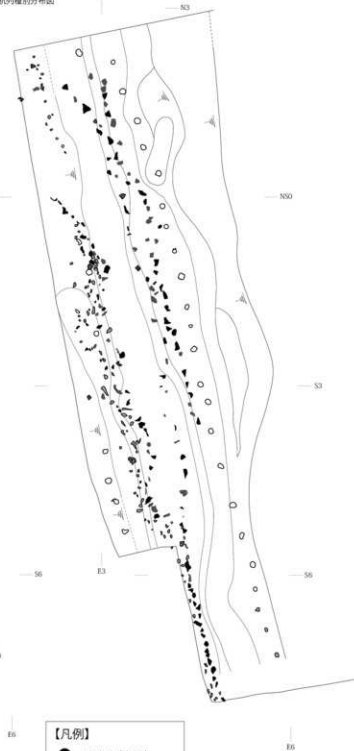
図7 西区 遺構図1

総掘跡

杭列出土状況図



杭列種別分布図



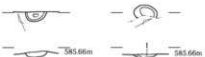
【凡例】

- : みかん割り材
- : 方形割り材
- ⊖ : 丸太半截材
- : 丸太材
- ⊗ : その他(転用材など)

0 5-1/60 2m

図8 西区 遺構図2

I 検 土 3



- 1: 10YR4/2 灰黒腐砂 (明黄・黄・黄褐色土 少、砂雜)
- 2: 2.5Y4/4 オリーブ黒砂質シルト (明黄褐色土 少)
- 3: 10YR3/1 黒腐砂 (明黄褐色土 少)

土 4



- 1: 2.5Y4/4 オリーブ黒砂質シルト (明黄褐色土 少)
- 2: 10YR3/1 黒腐砂 (明黄褐色土 少)
- 3: 10YR3/2 黒腐砂 (明黄褐色土 少)

土 5



- 1: 7.5Y3/1 黒腐砂質シルト (黄褐色土 中)
- 2: 2.5Y4/1 灰黒腐砂 (黄褐色土 少)
- 3: 2.5Y4/1 灰黒腐砂 (黄褐色土 少、粘土)

土 6



- 1: 土 7 の覆土
- 2: 2.5Y3/1 オリーブ黒腐砂 (黄褐色土 中、明黄褐色土、黄)
- 3: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 中、明黄褐色土 少、粘土)

土 7・8・P10



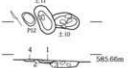
- 1: 7.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、赤褐色土 少)
- 2: 2.5Y3/1 オリーブ黒腐砂 (黄褐色土 中、明黄褐色土 少、粘土)
- 3: 2.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、黄)

土 9



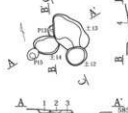
- 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂質 (黄褐色土 中、黄・粘土)

P12・土 11・10



- 1: 2.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中)
- 2: 10YR3/1 黒腐砂 (明黄褐色土 少)
- 3: 7.5Y3/2 暗シルト質 (灰、明黄褐色土 少)
- 4: 2.5Y3/1 黒腐砂 (明黄褐色土 少、黄)

土 12・13・14・P13・15



- 1: 10YR3/2 黒腐砂 (黄褐色土 少、灰・0.1cm 礫)
- 2: 5Y4/2 灰オリーブ腐砂 (灰、黄褐色土 中)
- 3: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 少、灰)
- 4: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 少、明黄褐色土、灰)
- 5: 2.5Y3/2 黒腐砂 (明黄褐色土 中)
- 6: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 少)
- 7: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 中)
- 8: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 中)
- 9: 10Y2/1 黄泥層 (灰質土 中)
- 10: 10Y2/1 黄泥層

土 17・18・19・20・21・P18



- 1: 2.5Y3/2 黒腐砂 (灰、0.2cm 礫)
- 2: 2.5Y3/2 黒腐砂 (明黄褐色土、灰、少、礫)
- 3: 2.5Y3/1 黒腐砂 (灰、黄褐色土、礫)
- 4: 10YR3/2 黒腐砂 (黄褐色土 中)
- 5: 10YR3/1 黒腐砂 (灰、少、黄褐色土、0.1cm 礫)
- 6: 10YR2/2 黒腐砂質 (黄褐色土 少、灰)
- 7: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 中、黄)
- 8: 2.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰、0.1cm 礫)
- 9: 土 19 覆土
- 10: 10YR2/2 黒腐砂 (明黄褐色土、黄褐色土、灰、少)
- 11: 10YR2/2 黒腐砂 (灰、明黄褐色土)

土 15



- 1: 10YR4/2 灰黒腐砂
- 2: 10YR3/2 黒腐砂 (灰、黄褐色土 少、0.5cm 礫)
- 3: 10YR3/1 黒腐砂 (灰、中、黄・明黄褐色土 少、0.5cm 礫)
- 4: 10YR3/1 黒腐砂 (灰、多、黄褐色土 中、0.3cm 礫)
- 5: 5Y3/1 オリーブ黒腐砂 (黄褐色土 少)
- 6: 7.5Y2/1 黒腐砂シルト (灰、黄褐色土、明黄褐色土 中)
- 7: 10Y2/1 黒腐砂 (灰、黄褐色土 中)
- 8: 5Y4/1 灰黒腐砂 (灰、黄土、黄褐色土 少)
- 9: 2.5Y3/1 黒腐砂質シルト (明黄褐色土 中、灰)

土 22



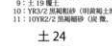
- 10YR4/2 灰黒腐砂 (明黄・黄褐色土 少、砂雜)

土 23



- 1: 2.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 少、灰)
- 2: 5Y3/1 オリーブ黒腐砂 (黄褐色土 中、明黄褐色土 少)
- 3: 2.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 少、灰)

土 24



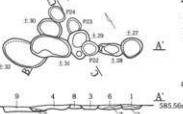
- 1: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (灰、0.2cm 礫・粘土)
- 2: 2.5Y3/2 黒腐砂 (明黄褐色土、灰、少、礫)
- 3: 2.5Y3/1 黒腐砂 (灰、黄褐色土、礫)
- 4: 10YR3/2 黒腐砂 (黄褐色土 中)
- 5: 10YR3/1 黒腐砂 (灰、少、黄褐色土、0.1cm 礫)
- 6: 10YR2/2 黒腐砂質 (黄褐色土 少、灰)
- 7: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 中、黄)
- 8: 2.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰、0.1cm 礫)
- 9: 土 19 覆土
- 10: 10YR2/2 黒腐砂 (明黄褐色土、黄褐色土、灰、少)
- 11: 10YR2/2 黒腐砂 (灰、明黄褐色土)

土 25



- 1: 10YR3/2 暗腐砂 (黄褐色土 中、灰、0.6cm 礫)
- 2: 10YR3/1 暗腐砂 (灰、0.2cm 礫)

土 27・28・29・30・31・32・P22・23・24



- 1: 7.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 少、灰・0.5cm 礫)
- 2: 10YR3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰・0.5cm 礫)
- 3: 2.5Y3/3 暗オリーブ腐砂 (黄褐色土 中、灰)
- 4: 7.5Y2/1 黒腐砂 (0.4cm 礫、灰)
- 5: 7.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、黄褐色土 少)
- 6: 10YR3/2 黒腐砂質 (黄褐色土 少、灰)
- 7: 10YR3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰)
- 8: 10YR3/2 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰)
- 9: 7.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰)
- 10: 2.5Y3/2 黒腐砂 (0.2cm 礫)
- 11: 2.5Y4/3 オリーブ腐砂
- 12: 10Y2/1 黒シルト質 (黄褐色土 中)
- 13: 2.5Y3/2 暗灰黒腐砂 (明黄・黄褐色土、灰)
- 14: 10YR3/2 黒腐砂 (明黄褐色土 中、明黄褐色土)
- 15: 5Y3/1 オリーブ腐砂 (黄褐色土 中、礫)
- 16: 5Y3/1 オリーブ腐砂 (明黄褐色土 中、礫)

土 26



- 1: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 少、灰)
- 2: 10YR3/1 黒腐砂 (明黄褐色土 中、灰)
- 3: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (明黄褐色土)

土 35



- 2.5Y4/3 オリーブ腐砂 (0.2cm 礫・多、灰、オリーブ土 少)

土 33・34



- 1: 5Y3/2 オリーブ黒腐砂 (明黄褐色土 少)
- 2: 2.5Y4/4 オリーブ黒腐砂 (明黄褐色土 少)
- 3: 2.5Y3/1 黒腐砂質シルト (明黄褐色土 少)
- 4: 5Y4/4 暗オリーブ腐砂 (灰、礫)
- 5: 5Y4/3 暗オリーブ腐砂シルト

土 36



- 10YR3/3 暗腐砂 (黄褐色土 少、灰・黄褐色土)

土 37



- 10YR3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中)

土 38



- 1: 2.5Y4/2 暗灰黒腐砂 (黄褐色土 少、黄褐色土)
- 2: 2.5Y3/1 黒腐砂質シルト (灰・5cm 礫)

土 39



- 10YR4/3 灰黒腐砂 (3cm 礫・黄褐色土)

土 41



- 10YR3/2 黒腐砂 (黄褐色土 中、明黄褐色土 少、灰)

土 42



- 10YR3/2 黒腐砂 (灰、明黄褐色土 少)

土 40



- 1: 2.5Y3/2 黒腐砂 (黄褐色土 中、黄褐色土 少、黄褐色土)
- 2: 礫 (3~10cm 礫・多、黄褐色土)
- 3: 10YR4/3 灰黒腐砂 (黄褐色土 中、灰)
- 4: 2.5Y3/1 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰)

土 43



- 10YR3/2 黒腐砂 (黄褐色土 中、灰)

土 44



- 10YR4/2 灰黒腐砂 (黄褐色土 中)

土 46



- 10YR4/3 灰黒腐砂 (黄褐色土 中、灰)

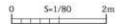


図 9 東区 I 検 遺構図

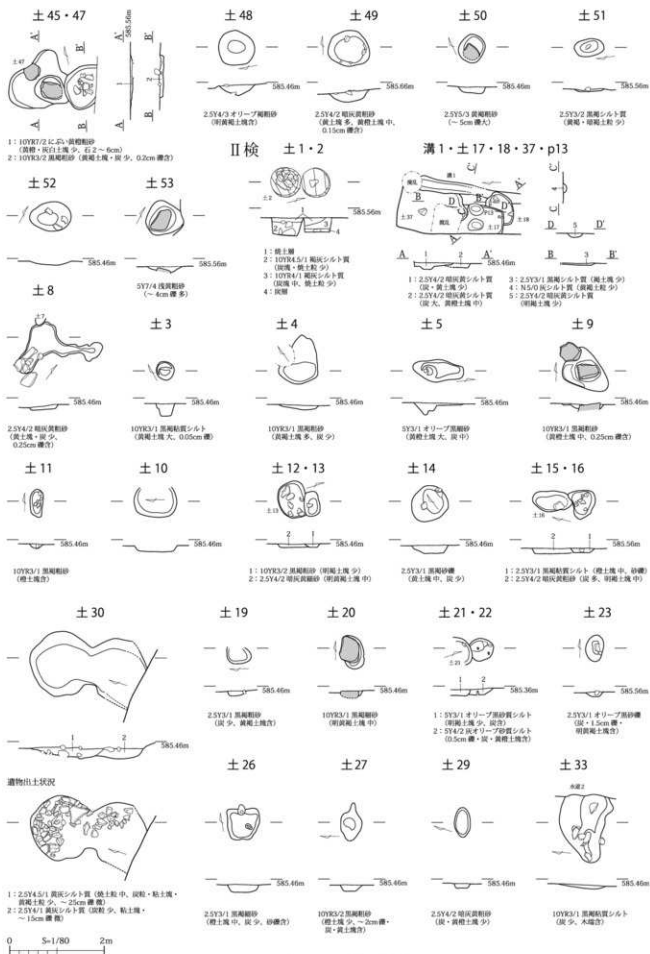
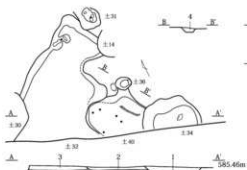


図 10 東区 I ~ II 検 遺構図

± 31・32・34・36・40



- 1: 2.5Y3/1 黒褐色砂 (明黄褐色土塊多、底中、0.8cm 雜沓)
- 2: 10YR3/1 黒粘砂 (1cm 雜沓・黄褐色土塊沓)
- 3: 2.5Y3/1 黒粘砂 (1cm 雜沓・黄褐色土塊沓)
- 4: 5Y4/2 灰砂層 (黄褐色土塊中、底沓)

± 35



- 10YR3/1 黒褐色砂 (灰・黄土塊沓)

± 38



- 5Y6/4 オリーブ黒粘質砂 (〜4cm 雜沓)

± 42



- 2.5Y3/1 黒褐色砂 (黄褐色土塊)

± 45



- 5Y3/1 オリーブ黒粘砂 (底沓)

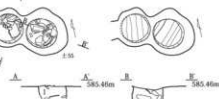
± 46



底出土状況

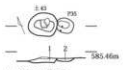
± 54・55

遺物・露出土状況



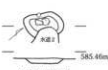
- 1: 2.5Y4.5/1 褐色シルト質 (灰砂・黄土塊沓)
- 2: 2.5Y4.5/1 褐色シルト質

± 43・P35



- 1: 10YR2/1 黒粘砂 (0.8cm 雜沓・木塊沓)
- 2: 2.5Y3/1 黒粘シルト質 (灰・明黄褐色土塊)

± 44

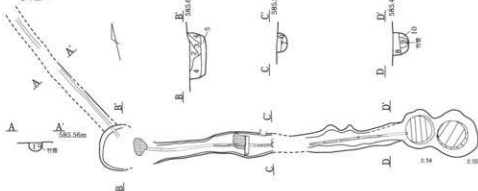


- 2.5Y3/1 黒褐色砂 (黄褐色土塊沓)



- 1: 10YR4.5/1 褐色シルト質 (黄褐色土塊・黄土塊沓、灰砂層)
- 2: 10YR2/1 黒粘シルト質 (黄褐色土塊・灰砂層、砂層沓)

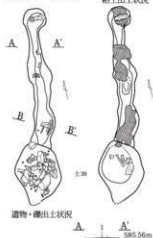
水道 1



- 1: 2.5Y5/1 黄粘シルト質 (黄褐色土塊中、灰土塊・〜4cm 雜沓)
- 2: 5Y4/1.5 灰シルト質 (木塊土塊沓・底砂層)
- 3: 5Y4/1.5 灰シルト質 (褐色土塊沓、灰砂・粘土塊層)
- 4: 5Y4/1 灰シルト質 (褐色土塊沓、灰砂・〜4cm 雜沓)
- 5: 5Y3.5/1 オリーブ黒粘シルト質 (黄褐色土塊・〜3cm 雜沓)

- 6: 5Y5/1 灰シルト質 (黄褐色土塊中、褐色土塊沓、灰砂層)
- 7: 5Y4/1 灰シルト質 (黄褐色土塊沓、黄褐色土塊・〜4cm 雜沓)
- 8: 7.5Y4/1 灰シルト質 (黄褐色土塊沓、灰砂・〜4cm 雜沓)
- 9: N4/O 灰粘土 (〜2cm 雜沓、青灰土塊層)
- 10: 7.5Y5.5/1 灰粘土 (灰黄褐色土塊沓、〜2cm 雜沓)

水道 2・± 39

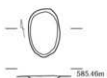


遺物・露出土状況

- 1: 5Y5/3 オリーブ黒シルト質 (褐色土塊中、灰砂層)
- 2: 5Y3/1 オリーブ黒粘シルト質 (黄褐色土塊中、黄褐色粘土塊沓)

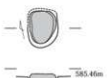
Ⅲ 検

± 1



- 2.5Y3/2 黒褐色砂 (オリーブ黄土塊沓)

± 2



± 3



- 5Y4/1 灰粘砂 (明黄褐色土塊沓、層 0.5〜1.4cm 雜沓)

± 6



± 12



- 7.5Y4/1 灰粘砂 (明黄褐色土塊層)

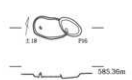
± 16



± 17



± 18・P16



± 19

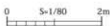
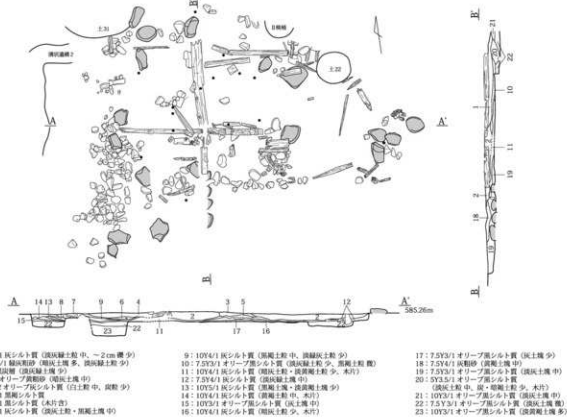


図 11 東区Ⅱ〜Ⅲ 検 遺構図

N50 ~ S5・E28 ~ E36 グリッド内遺物・礫・木材出土状況図



IV検

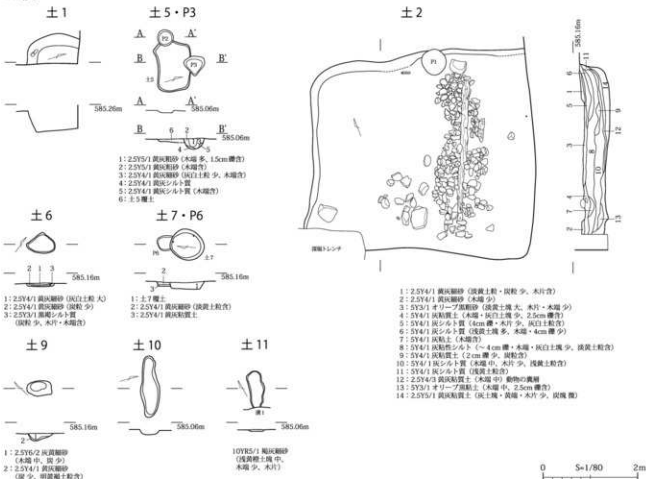


図12 東区III~IV検 遺構図

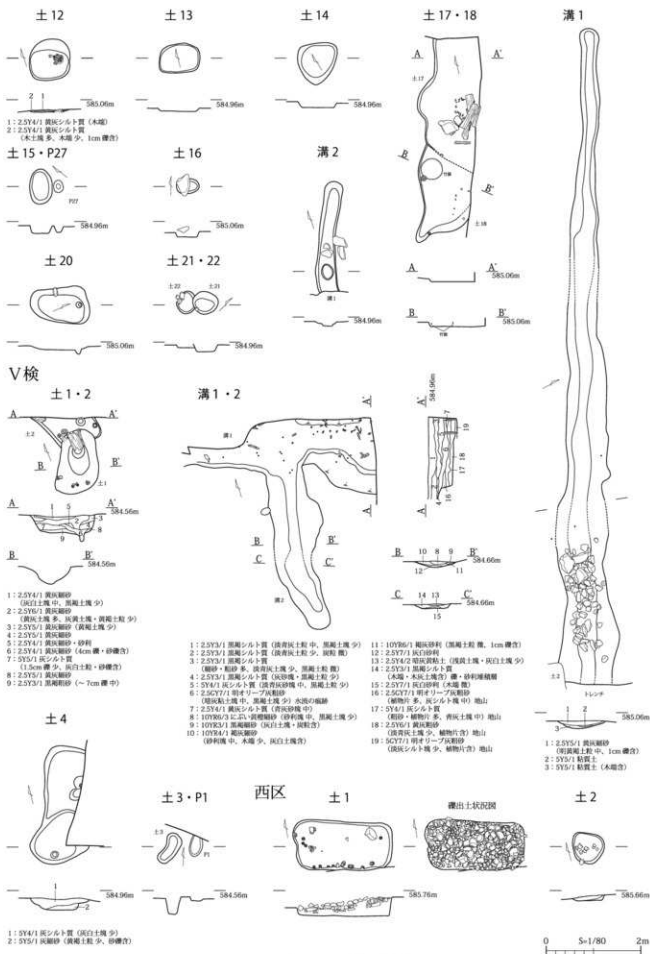


図 13 東区Ⅳ～Ⅴ検 遺構図

第3節 遺物

1 土器・陶磁器(表3、図14～23、写真図版7・8)

今回の調査では、西区総堀、土塁、整地層および、東区5面の検出面より、土器・陶磁器が出土した。このうち、図示可能な343点の実測図を提示した。種別内訳は、磁器100点、陶器149点、土器83点、瓦質土器3点、須恵器4点、土製品3点、骨製品1点である。以下に検出面ごとの概要を記述する。

なお、陶磁器の製作年代判定と判断基準は、肥前産は大橋康二氏の編年を参照した。瀬戸・美濃系は、藤沢良祐氏の編年を参照し、金子健一氏、中島茂氏にご指導いただいた。

(1) 西区総堀・土塁跡

総堀および土塁跡から出土した資料のうち43点を図示した。種別内訳は、磁器14点、陶器24点、土器5点である。産地別では、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、萬古焼、在地産がみられる。以下、産地別に概要を述べる。

肥前産は12点あり、全体の27.9%を占める。12点は全て磁器で、うち5点が碗である。皿2点は、いずれも17世紀後半～18世紀前半の型打ち成形によるものである。9の青磁染付鉢は、蛇の目凹型高台中央の「渦福」の銘および破断面の漆継痕より、18世紀後半に比定される。10の鉢には焼継痕がみられる。急須1点は幕末以降の所産である。

瀬戸・美濃産は13点あり、全体の30.2%を占める。器種は大半が碗で、種別内訳は、磁器1点、陶器12点である。磁器は3の碗で、高台に漆継の痕跡が残るが、高台脇にも漆が付着することから、漆を入れる容器として使用された可能性がある。陶器のうち、24～28の5点は揃いの端反碗で、19世紀の製品である。32の志野鉢が最も年代が古く、17世紀初頭に比定される。

京・信楽産は5点あり、全体の11.6%を占める。20～23の4点は18世紀中葉の小杉碗である。

その他の産地では、萬古焼と思われる急須の身と蓋が1対出土している。

土器は在地産とみられる皿5点を図示した。土器の皿は各検出面から出土しているが、41と42の皿は精製した土を用いた薄づくりの皿で、他の皿とはづくりが明らかに異なる。儀礼用の盃として使用された可能性があり、42の底裏には、「四」の墨書が確認できる。

陶磁器の製作年代は17世紀初頭～近代と幅広いが、18世紀後半～19世紀の製品が最も多く、近代まで下るものは少ない。磁器は肥前産が大半を占めている。以上のことから、総堀・土塁跡出土遺物の年代観は18世紀後半～幕末と考えられる。

(2) 西区整地層

出土した資料のうち15点を図示した。種別内訳は、磁器5点、陶器7点、瓦質土器1点、土器2点である。推定生産地は、肥前、瀬戸・美濃、在地産である。

このうち、肥前産は4点あり、種別内訳は磁器3点、陶器1点である。45は蛇の目凹型高台の鉢で18世紀後半に比定される。55の猪口はハリ支え技法による焼成とみられ、18世紀前半の所産といえる。

瀬戸・美濃産は5点あり、種別内訳は磁器1点、陶器4点である。磁器1点は44の端反碗である。46は18世紀後半～19世紀の瀬戸産揃鉢である。52は陶製灯明受皿で、全体に鉄釉が施され受部に油孔を持つ。58は仏飯具で底裏に「に者」の墨書が確認できる。

50は瓦質土器で、内面外周が使用により摩滅している。火消壺の蓋であろうか。土器は皿2点を図示、いずれも19世紀の製品とみられる。

以上のことから、陶磁器の製作年代は、概ね18世紀後半～幕末と考えられる。これは、総堀・土塁跡出土遺物の年代観と近く、東区では1検～II検にかけての年代観の中に収まる。また、被熱資料が多い点も特

徴といえ、土1出土の44、45、46の他、56と58にも被熱痕が確認できる。

(3) 東区第Ⅰ検出

Ⅰ検から出土した資料のうち139点を図示した。種別内訳は、磁器50点、陶器63点、土器24点、土製品2点である。推定生産地は、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、中国、在地産である。

肥前産は40点あり、全体の28.8%を占める。種別内訳は磁器35点、陶器5点である。磁器は17世紀～19世紀までの幅広い年代の製品がみられるが、過半数は18世紀後半以降の所産である。器種は碗や皿を主体として、散蓮華や段重、仏具類がある。72、123の碗、112の合子の蓋、132の蓋には焼継痕が確認できる。焼継痕がみられるのは19世紀の磁器製品に限られ、器種別にみると蓋物が主な修復対象であったと推察される。71、117、129は波佐見産のくらわんか碗である。このうち、117の見込み部にはコンヤク印判による五弁花が確認できる。137の底裏の銘「渦福」とハリ支え痕は、18世紀前半に多く見られる技法である。最も古い様相のものは、17世紀前半に比定される111、135の皿で、高台に砂目が付着する。陶器5点は、いずれも17世紀の製品である。108、155、173は緻密な土でつくられた京焼風肥前である。170は内面銅緑釉の見込み部を蛇の目状に刺いだ皿で、内野山北窯の製品とみられる。171は絵唐津の向付で17世紀前半に比定される。

瀬戸・美濃産は53点あり、全体の38.1%を占める。種別内訳は磁器11点、陶器42点である。磁器の碗は4点あり、うち3点が端反碗である。皿4点は全て型打皿で、うち3点は陽刻、1点は陰刻である。磁器の製作年代は、19世紀初頭の染付磁器開発以降に比定される。一方、陶器の製作年代は、16世紀末～近代までと幅が広い。碗は13点を図示した。158、159はせんじ湯呑碗で、159には漆継痕がみられる。152、153の総織部丸碗、157の鉄絵丸碗は17世紀前半に比定される。63の瀬戸黒、156の志野丸碗は大窯製品である。陶器の皿は14点を図示した。164は18世紀中葉の摺絵皿である。85、160、161の鉄絵皿、166、167の輪髷皿、169の総織部皿は17世紀前半に比定される。大窯製品は162の志野丸皿、168の折縁皿がある。97の志野向付は、見込みに鉄絵が描かれ、底裏に半環足が付く。91の播鉢は高台付きで、19世紀前半に比定される。その他、江戸後期に比定される餌猪口、仏花瓶、小形土瓶、行平鍋等がある。特殊品として、長石軸丸皿の破片を利用した円盤状の加工品、青織部の煙管がある。

京・信楽産は3点を図示した。94、95は同一個体と思われる京焼系の香炉で、上絵付が施されている。

149の青磁碗は中国龍泉窯のもので、13世紀の伝世品と考えられる。

87～90、93の調理具類は、胎土が瀬戸の土によく似ているが、器形は瀬戸製品の特徴と合致せず、産地不明とした。

土器は皿23点と目皿1点を図示した。土器の皿は、101、194のように口径が小さく器高が低いものと、103や193のように口径が大きく器高が高いものの概ね2つの法量が認められる。皿のうち、煤・タールが付着する個体は灯明皿として使用したものと考えられる。61の皿の口縁部には1箇所打ち欠きがあり、タールが付着していることから、灯芯を置くために意図的に打ち欠いたものと考えられる。195の皿は、底部1箇所、側面对角線上に2箇所の焼成後穿孔を持つ。土製品は、碁石形土製品と土人形がある。土人形は動物を模したものと考えられるが、脚部4本は全て欠損している。

陶磁器の製作年代は幅が広く、一部は16世紀末まで遡るが、瀬戸・美濃系の磁器を多く伴う段階であり、Ⅰ検の推定年代観は19世紀前半～明治時代と考えられる。

(4) 東区第Ⅱ検出

Ⅱ検から出土した資料のうち81点を図示した。種別内訳は、磁器19点、陶器29点、瓦質土器1点、土器31点、骨製品1点である。推定生産地は、肥前、瀬戸・美濃、中国、在地産である。

肥前産は14点あり、全体の17.3%を占める。種別内訳は磁器12点、陶器2点である。このうち、土

54・55の出土遺物4点は、江戸後期～幕末の製品と考えられる。一方で、211の猪口は18世紀前半のハリ支え技法による焼成である。216はコンニャク印判と手描きを組み合わせた染付碗で、17世紀末～18世紀前半に比定される。陶器2点はともに17世紀の唐津産と考えられる。

瀬戸・美濃産は28点あり、全体の34.6%を占める。種別内訳は磁器5点、陶器23点である。磁器5点は全て土54・55から出土した。いずれも幕末以降の製品で、うち2点には上絵付が施されている。陶器は17世紀の製品が主体である。205の総織部丸碗、209の天目碗、213の鉄絵丸碗、245の折縁皿、259の長石釉丸皿、267の志野織部の水注の注口等がある。233の肩衝茶入は16世紀末～17世紀初頭の所産であろうか。199の内壳皿、200の播鉢は16世紀末の大窯製品である。新しい様相のものは、土54・55の出土遺物に限定され、228の小瓶と237の有耳壺の蓋がある。248は大窯の天目碗で、外面腰部に墨書がみられるが、欠損のため判読することができない。214は型紙摺絵の鬘水入れで、底面に「八ノ一」と墨書きされている。

中国産1点は241の白磁の皿で、15世紀後半～16世紀前半に比定される。

その他に産地不明の陶器として、土54・55から爛徳利、土鍋、急須、薬味入れが出土している。231の急須の底裏に残された「土井…」の白文字は、土居尻の地名に由来するものであろうか。

土器は皿31点を図示した。土器の皿は、215、276のように口径が小さく器高が低いものと、271や278のように口径が大きく器高が高いものがあり、法量によって概ね2つの傾向に分類できる。皿のうち、煤・タールが付着する個体は灯明皿として使用したものと考えられる。273の皿の口縁部には、灯芯を置くためのものと思われる意図的な打ち欠きが1箇所ある。272の皿は、側面对角線上に2箇所の焼成後穿孔を持つ。他に瓦質土器の茶臼の下白部が出土しているが、産地や年代は不明である。

陶磁器の製作年代は、主に2つの時期に分けられる。第1群は、土54・55の出土遺物で、概ね幕末～近代の様相を呈する。第2群は、それ以外の遺物からなる一群で、16世紀末～18世紀の製品が含まれる。第1群の19世紀の製品は、I検の遺物が混入したものと考え、年代を推定する資料からは除外する。以上のことから、II検の推定年代観は、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。

(5) 東区III検出面

III検から出土した資料のうち51点を図示した。種別内訳は、磁器11点、陶器25点、瓦質土器1点、土器13点、土製品1点である。推定生産地は、肥前、瀬戸・美濃、中国、在産地である。

肥前産は12点あり、全体の23.5%を占める。種別内訳は磁器9点、陶器3点である。器種は碗や皿が主体である。磁器は17世紀後半～18世紀前半の製作年代幅を持つ個体が多い。陶器3点のうち、281と304は現川窯の打ち刷毛目の碗で、17世紀末～18世紀初頭に比定される。284は17世紀後半の京焼風肥前で、高台内に円刻と「清水」の刻印が確認できる。

瀬戸・美濃産は21点あり、全体の41.2%を占める。種別内訳は磁器1点、陶器20点である。磁器1点は19世紀の端反碗だが、陶器は17世紀の製品が主体である。282、283の灰釉丸碗、305の輪壳皿、323の小天目、326の鉄絵皿等がある。296は美濃産の御深井釉向付で、底裏には円錐状足が付き、淡緑色を呈する御深井釉が全面に施されている。また、陶器20点のうち7点が火窯製品と考えられ、286の稜皿、298の志野鉢、300の志野丸皿、307の天目碗、327の志野向付がある。最も年代が古いものは、324の内壳皿で、火窯第3段階に比定される。播鉢2点は17世紀後半～18世紀後半の瀬戸産と考えられる。

中国産1点は321で、明末期の所産と思われる青花である。

土器の皿12点は、器形の特徴によって大きく2種類に分けられる。一方は、口縁が緩やかに開く310や316等の皿である。他方は、見込み部外周を押さえて口縁部が強立ち上がる308や312等の皿である。また、311は器形や胎土が他の個体と異なり、在産地ではない可能性がある。288は精製した白土を用いた、

儀礼用の特別な皿とみられる。皿のうち、煤・タールが付着する個体は灯明皿として使用したものと考えられる。301は土師質の火鉢で、底部には推定で3箇所の脚部が付く。体部上方と腰部には突帯が巡り、突帯上部に四つ菱と菊の印花文が施されている。289は火鉢類と思われる瓦質土器である。外面にミガキがみられる他は装飾のない軟質瓦質の製品で、17世紀～18世紀初頭に比定される。314は用途不明の円盤状土器製品で、中心に穿孔を持つ。

陶磁器の主な製作年代は16世紀末～18世紀前半である。17世紀の製品が主体であるが、瀬戸・美濃の大窯製品も一定数確認できる。以上のことから、Ⅲ検の推定年代観は、17世紀前半～18世紀前半と考えられる。

(6) 東区第Ⅳ検出面

第Ⅳ検出面から出土した資料のうち8点を図示した。種別内訳は、磁器1点、陶器1点、土器6点である。磁器1点は明末期の青花の皿である。陶器1点は瀬戸産の片口鉢で17世紀後半～18世紀に比定される。土器の皿2点、内耳鍋2点はいずれも16世紀の製品である。内耳鍋の外面には使用痕とみられる煤が付着する。土師質摺鉢は15世紀の所産であろうか。334は横羽状条痕文を持つ土器片で、弥生時代中期中葉に比定される。

一部に近世の遺物も含まれるが、国産磁器や瀬戸・美濃の大窯製品を伴わず、主体となる出土遺物は16世紀の土器である。以上のことから、Ⅳ検の推定年代観は、16世紀と考えられる。

(7) 東区第Ⅴ検出面

V検から出土した資料のうち6点を図示した。種別内訳は、須恵器の杯が4点、黒色土器の杯が1点、土師器の破片が1点である。343には刻書が認められるが、摩滅して不明瞭である。

製作年代は、土の出土遺物が8世紀後半、溝の出土遺物が9世紀中葉～後半に比定される。以上のことから、V検の推定年代観は、9世紀後半と考えられる。

〈参考文献〉

- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇五』

2 瓦(表4～7、図24、写真図版8)

瓦は37点出土している。そのうち、瓦当文様と刻印を有する7点を図示した。内訳は軒丸瓦2点(1・2)、丸瓦1点(3)、軒平瓦3点(4～6)、平瓦1点(7)である。

1・2は連珠左巻三つ巴文が入った軒丸瓦で、いずれも瓦当面のみである。1は丸瓦部との接合部にクシ目が残る。3は丸瓦である。凸面に刻印を有し、「下」と記されていると推測される。4～6は軒平瓦で、いずれも瓦当面のみである。4は瓦当面の残存が少ないが、面全体の文様構成は葛唐草文であると推測される。5は唐草文を有するが、瓦当面中央部が残存しないため、面全体での文様構成は不明である。6は三葉文唐草文を有する。焼成時にできたと考えられるひび割れが瓦当面を横断している。7は凸面に刻印を有し、「口」と記されていると推測される。

〈参考文献〉

- 山崎信二 2008 『近世瓦の研究』同成社

期	地区	種別	種別	形式	法原 (mm)		技法・文様・用器の特長	胎土	釉薬	製作年代	指定時期	
					口径	高さ						
170	東	横山田	陶器	皿	(4.3)		内面に黒線、内面に黒線、見込部裏の口縁部が1線2方布、高付内帯の内面に点線(2線)	灰	灰緑・黒線釉	17c 後	肥前	
171	東	横山田	陶器	高杯	付付		見込部(11線)、頸部、底縁、内面に黒線で文様、見込に黒色付着物	赤褐色	灰緑	17c 初	肥前	
172	東	横山田	陶器	碗			見込部(11線)	灰	灰石緑	17c 初	肥前	
173	東	横山田	陶器	鉢	7.7		口縁部黒線、見込に黒線で文様、高付内帯内	灰	灰緑	17c 後	肥前	
174	東	横山田	陶器	鉢	(20.1)		口縁部黒線	灰	灰緑	3c 末	美濃	
175	東	横山田	陶器	鉢	(18.4)		口縁部黒線	白	灰緑	3c 末	美濃	
176	東	横山田	陶器	鉢	(27.2)		6.0c 内外に灰緑色文様、見込に黒線文、頸の内帯文、底縁の黒線釉	黒白	灰緑・黒線釉	17c 中	肥前	
177	東	横山田	陶器	高杯	(14.8)	4.4	2.5c 内外に黒線	白	灰緑	18c 初～19c 初	肥前	
178	東	横山田	陶器	小皿	3.6		内外に黒線、見込文様不明、縁線あり	灰白緑色	紫付・灰緑	18c 初～19c 中	肥前	
179	東	横山田	陶器	椀	2.0		口ワケの内帯、外帯に灰石緑・黒線釉掛け付、首縁部、内面黒線、次第の両面に点線	黒白	灰石緑・黒線釉	17c 初	美濃	
180	東	横山田	陶器	甕	丸口蓋		0.85c 内外に黒	不明	灰緑	不明	不明	
181	東	横山田	陶器	甕	丸口蓋	5.4	4.0	2.3c 内外に黒線、縁部裏の首縁2方布か	不明	灰緑	不明	不明
182	東	横山田	陶器	山形鉢		5.5	内外黒線の口縁部黒線掛け付、内面灰緑、底縁黒線4周の巾巾線に点線(1線のみ)、全周縁部を黒色縁線取り	灰	黒線・灰緑	18c 後	美濃	
183	東	横山田	陶器	行平皿	(18.7)		底縁黒線、口下ワケ縁部に灰付	白	灰緑	3c 末	美濃	
184	東	横山田	陶器	女仕立湯			1.1c 内帯(4.7)・外帯(1.2) 内外黒線、内面黒線	黒白	灰石緑	17c 初	美濃	
185	東	横山田	陶器	陶製貯留			口蓋・胴蓋・厚底、具内縁丸形口口具新設して蓋はききもしては縁に黒線	白	灰石緑	17c 初	美濃	
186	東	横山田	土器	皿	(10.5)	4.9	2.8c 内外に黒、口ワケの内帯、1線部内に点線文、内帯内面に点線付	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
187	東	横山田	土器	皿	(10.4)	5.3	2.7c 内外に黒、口ワケの内帯、1線部内に点線文、口下ワケの内帯、1線部内に点線文、口下ワケの内帯、1線部内に点線文、口下ワケの内帯、1線部内に点線文	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
188	東	横山田	土器	皿	(10.4)	6.3	2.5c 内外に黒	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
189	東	横山田	土器	皿	(10.8)	5.4	2.9c 内外に黒、内帯に黒付着	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
190	東	横山田	土器	皿	(10.1)	6.3	2.5c 内外に黒、口ワケの内帯、内帯内面に点線文、1線部にタテ線付	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
191	東	横山田	土器	皿	(10.4)	5.7	2.8c 内外に黒、内帯に黒付着	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
192	東	横山田	土器	皿	(8.8)	6.4	2.3c 内外に黒	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
193	東	横山田	土器	皿	(10.2)	6.5	2.3c 内外に黒	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
194	東	横山田	土器	皿	(8.8)	5.3	2.0c 内外に黒	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
195	東	横山田	土器	皿	9.9	6.4	3.5c 内外に黒、底部1方布・胴部2方布に外帯・内帯に縁線施す	褐色	—	不明	在地産か	
196	東	横山田	土器	丸蓋	丸蓋		口蓋・胴蓋・厚底、具内縁丸形口口具新設して蓋はききもしては縁に黒線	褐色	—	不明	不明	
197	東	横山田	土器	丸蓋	丸蓋		口蓋・胴蓋・厚底、具内縁丸形口口具新設して蓋はききもしては縁に黒線	褐色	—	不明	不明	
198	東	水産部	陶器	磁器	(7.5)	(4.6)	3.2c 内外に黒、口ワケの内帯、1線部内に点線文、口下ワケの内帯、1線部内に点線文、口下ワケの内帯、1線部内に点線文	白	紫付	18c 初～19c 初	美濃	
199	東	水産部	陶器	磁器	(9.0)	(4.9)	2.1c 内外に黒、内帯に黒付着	白	灰緑	16c 末	美濃	
200	東	水産部	陶器	磁器	(10.0)		口蓋13本1単位	白	緑釉	16c 末	美濃	
201	東	土佐	土器	皿	9.2	5.1	2.2c 内外に黒、口ワケの内帯、1線部全周に黒・タテ線付	褐色	—	19c 中	在地産か	
202	東	土佐	土器	皿	9.6	5.7	2.2c 内外に黒、口ワケの内帯、1線部一部に黒・タテ線付	褐色	—	19c 中	在地産か	
203	東	土佐	土器	皿	9.4	6.0	2.2c 内外に黒、口ワケの内帯、内帯全周に黒・タテ線付	黒～灰緑	—	19c 中	在地産か	
204	東	土佐	土器	皿	(9.0)	(5.7)	1.9c 内外に黒	褐色	灰緑	17c 初	美濃	
205	東	土佐	土器	皿	9.3	6.4	3.5c 内外に黒、底部1方布・胴部2方布に外帯・内帯に縁線施す	灰緑	黒線釉	17c 前	美濃	
206	東	土佐	土器	皿	(9.8)	6.3	3.0c 内外に黒	褐色～灰緑	—	不明	在地産か	
207	東	土佐	土器	碗			1線部内外に黒、外帯黒線、首縁部、口縁部	灰	灰緑・灰石緑	17c 前	肥前	
208	東	土佐	土器	皿	(10.4)	(5.8)	3.3c 内外に黒、底縁に黒付着	暗内帯	—	不明	在地産か	
209	東	土佐	土器	皿	(10.0)		内外に黒	白	灰緑	17c 中	美濃	
210	東	土佐	土器	磁器	(10.2)		内外に黒文	白	紫付	不明	美濃	
211	東	土佐	土器	磁器	(7.6)	(5.4)	5.7c 内外に黒、内帯に黒付着、高付の内1線部内面に黒、高付の内帯に黒付着	白	紫付	18c 前	肥前	
212	東	土佐	土器	陶器	(9.0)		内外に黒	灰緑	灰緑	17c 末	美濃	
213	東	土佐	土器	陶器	(11.3)		内外に黒	白	灰石緑	17c 初	美濃	
214	東	土佐	土器	陶器	丸水入れ		内外に黒、外帯に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	灰褐色	黄緑釉	17c 後～18c 前	美濃	
215	東	土佐	土器	皿	8.1	5.7	1.9c 内外に黒	灰緑	—	19c 中	在地産か	
216	東	土佐	土器	磁器	(10.1)		内外にコンニャク印のち手書きで可変文	白	紫付	17c 末～18c 前	在地産か	
217	東	土佐	土器	皿	9.6	6.8	2.5c 内外に黒	褐色	—	19c 中	在地産か	
218	東	土佐	土器	皿	10.1	6.6	2.6c 内外に黒、口ワケの内帯、1線部一部に黒付着	褐色	—	19c 中	在地産か	
219	東	土佐	土器	皿	10.0	6.6	2.7c 内外に黒	褐色	—	19c 中	在地産か	
220	東	土佐	土器	水筒	(11.0)		内面黒線、縁部欠損	灰緑	灰緑	17c 末	肥前	
221	東	土佐	土器	磁器	(10.7)	3.9	6.0c 内外に黒で文様・口花文(消失のため不明)	白	透明釉	17c 末～18c 前	肥前	
222	東	土佐	土器	磁器	小鉢	6.1		内外に黒(1線)で付着文・不明	白	透明釉	19c 初～近代	美濃
223	東	土佐	土器	磁器	(9.0)	(3.2)	5.1c 内外に黒、外帯に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	白	紫付	19c 初	美濃	
224	東	土佐	土器	磁器	(9.2)	3.8	5.4c 内外に黒、外帯に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	白	透明釉	19c 初	美濃	
225	東	土佐	土器	磁器	紅皿	4.8	(1.7)	1.8c 内外に黒文、底縁黒線	白	紫付	19c 中	美濃
226	東	土佐	土器	磁器	皿	8.6	4.1	2.3c 内外に黒、見込縁部と口縁部、高付内帯	白	紫付	19c 初～近代	美濃
227	東	土佐	土器	磁器	(7.6)	(3.9)	4.4c 内外に黒線に黒線、内帯1線部黒線、底縁部黒線	白	紫付	19c 末～19c 末	肥前	
228	東	土佐	土器	磁器	小皿	2.0	2.6	3.6c 内外に黒、外帯に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	灰	灰緑	18c 初～19c 初	肥前
229	東	土佐	土器	陶器	丸水入れ	3.7	2.9	内外に黒	灰	灰緑	不明	不明
230	東	土佐	土器	陶器	丸水入れ	(15.1)	4.9	内外に黒	灰	灰緑	不明	不明
231	東	土佐	土器	土器	高古	(5.0)		内外に黒	褐色	灰緑	19c 中	美濃
232	東	土佐	土器	陶器	磁器貯留	6.3	10.3	内外に黒、底縁に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	褐色	灰緑	不明	不明
233	東	土佐	土器	陶器	貯留	(5.2)		内外に黒	褐色	灰緑	16c 末～17c 初	美濃
234	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	白	紫付	19c 初～近代	美濃
235	東	土佐	土器	磁器	小鉢	6.2	2.9	4.5c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	白	紫付	19c 初	美濃
236	東	土佐	土器	磁器	小鉢	6.6	(3.0)	4.3c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	白	紫付	19c 初	美濃
237	東	土佐	土器	磁器	紅皿	4.8		1.8c 内外に黒文、底縁黒線	黒白	灰緑	19c 末	美濃
238	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
239	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
240	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
241	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
242	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
243	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
244	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
245	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
246	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
247	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
248	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
249	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
250	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
251	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
252	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
253	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
254	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明
255	東	土佐	土器	磁器	小鉢	15.0	2.3	2.8c 内外に黒線、見込に黒線(縁部)で文様、底縁に黒線(八ノ一)も、口蓋は1線	—	—	不明	不明

期	地区	種別	種別	形式	記録 (cm)		技法・文様・用器の種類	胎土	胎土	器型製作年代	指定地域
					口径	高さ					
256	東 II	グッド	土器	皿	(12.0)		ロウロ成器、内外面に厚付け	黒	—	4期	在野点か
257	東 II	グッド	土器	皿	(10.7)	66.9	ロウロ成器、内面に磁かす厚付け	淡灰黒	—	4期	在野点か
258	東 II	グッド	土器	皿	(10.7)	6.5	2.9ロウロ成器	黒	—	4期	在野点か
259	東 II	グッド	陶器	皿	(10.0)	66.2	2.5高円口縁、長石釉丸底	白	長石釉	17c中	黒川・美濃
260	東 II	グッド	土器	皿	(10.1)	77.0	2.9ロウロ成器	黒	—	4期	在野点か
261	東 II	グッド	瓦器	蓋(白下付)	11.0		4.3高円口縁丸底、白面に6分画、溝4本	黒	黒灰釉	4期	不明
262	東 II	グッド	磁器	皿	60.0	63.8	6.0高円口縁・連弁文、胎内に赤内文、見込に紫褐色文	白	白磁	17c末～18c	黒川
263	東 II	焼山田	磁器	鉢	(13.0)		厚付け、六角鉢、外面に紫褐色文、内面に黒竹文・紅文	白	白磁	18c後	黒川
264	東 II	焼山田	陶器	皿	(11.0)	5.9	2.4高円口縁平方角、白磁成器	白	厚付け	17c前か	黒川・美濃
265	東 II	焼山田	土器	皿		69.0		白	長石釉	17c前	黒川
266	東 II	焼山田	陶器	皿	68.0	4.0	4.4	白	黒釉	17c	黒川・美濃
267	東 II	焼山田	陶器	赤土下付口			鉄粒で磁焼、志野磁器、白口磁器	白	長石釉	17c初	美濃
268	東 II	焼山田	土器	皿	10.2	5.9	2.8ロウロ成器	黒	—	4期	在野点か
269	東 II	焼山田	土器	皿	(10.0)		ロウロ成器、内外面に厚付け	黒	—	4期	在野点か
270	東 II	焼山田	土器	皿	69.7	66.2	2.3ロウロ成器	黒	—	4期	在野点か
271	東 II	焼山田	土器	皿	9.7	6.2	2.9高円口縁、ロウロ成器、1個器全面に厚・タテ付着	淡黒	—	4期	在野点か
272	東 II	焼山田	土器	皿	10.5	6.1	3.4	黒	—	4期	不明
273	東 II	焼山田	土器	皿	9.6	6.2	2.8高円口縁、ロウロ成器、1個器に白土を塗り着	黒	—	4期	在野点か
274	東 II	焼山田	土器	皿	9.1	6.3	2.4ロウロ成器、内面に付着物あり	淡黒～黒	—	4期	在野点か
275	東 II	焼山田	土器	皿	9.7	5.0	3.0ロウロ成器	黒	—	4期	在野点か
276	東 II	焼山田	土器	皿	68.8	65.0	2.0ロウロ成器	黒	—	4期	在野点か
277	東 II	焼山田	土器	皿	10.5	5.9	2.8高円口縁、ロウロ成器、内面に厚・タテ付着	黒	—	4期	在野点か
278	東 II	焼山田	土器	皿	10.2	6.0	3.0ロウロ成器、内面に付着物あり	黒	—	4期	在野点か
279	東 II	焼山田	土器	小鉢	65.1	62.7	3.9高円口縁、見込に文様彫り残存	白	白磁	18c～19c	美濃
280	東 II	焼山田	土器	皿	10.0	6.0	内面に厚・タテ付着	白	白磁	17c前	美濃
281	東 II	焼山田	陶器	皿	11.0	(4.2)	5.6高円口縁の白磁による打手形、黒川	黒	黒釉	17c末～18c初	美濃
282	東 II	焼山田	陶器	皿	10.7	4.4	7.4長丸鉢	白	灰釉	17c後	黒川・美濃
283	東 II	焼山田	陶器	皿	(10.8)		長丸鉢	白	灰釉	17c後	黒川・美濃
284	東 II	焼山田	陶器	鉢(白)		4.0	1.5高円口縁、見込に施陶山水文、高円内に内付と刻印「清水」、背付に「日本」	黒	黒釉	17c後	美濃
285	東 II	焼山田	土器	皿	68.3	66.0	1.5高円口縁、1個器全面に磁粒を白土を塗り着	淡黒	白磁	17c後	黒川
286	東 II	焼山田	土器	皿	10.4	5.7	2.3高円口縁、底面に赤土を塗り着	白	長石釉	16c末	美濃
287	東 II	焼山田	土器	皿	68.7	65.4	2.7ロウロ成器、内外面に厚付け	淡黒	—	4期	在野点か
288	東 II	焼山田	土器	皿	(11.2)	66.1	2.0高円口縁、ロウロ成器、磁器成器土	淡灰黒～黒	—	16c	在野点か
289	東 II	焼山田	土器	皿	(11.6)		内面に厚・タテ付着	黒	—	17c～18c初	不明
290	東 II	焼山田	土器	皿	69.0	63.0	4.9高円口縁に赤褐色文、底面に磁粒	白	白磁	18c前	美濃
291	東 II	焼山田	土器	皿	69.0	63.0	4.9高円口縁に赤褐色文、底面に磁粒	白	白磁	17c後～18c前	美濃
292	東 II	焼山田	土器	皿	69.0	63.0	4.9高円口縁に赤褐色文、底面に磁粒	白	白磁	17c末～18c前	美濃
293	東 II	焼山田	土器	皿	(13.0)	(7.1)	4.0高円口縁の白磁、内面に紫褐色文	白	白磁	17c末～18c前	美濃
294	東 II	焼山田	土器	皿	(10.8)	(5.4)	2.5高円口縁に白磁で厚付け	黒	黒釉	17c後～18c前	白鳥
295	東 II	焼山田	土器	皿	68.6		1個器全面に厚・タテ付着	淡黒	—	4期	在野点か
296	東 II	焼山田	土器	皿	(7.8)	(4.5)	1.5高円口縁、見込に紫褐色文、高円に刻印、裏面見込	淡黒	灰釉	17c初	美濃
297	東 II	焼山田	土器	皿	13.0	6.0	厚付け、内面に磁粒5本、底面に「日本」の文字と磁粒3本	淡灰	新緑丹釉	17c中～後	美濃
298	東 II	焼山田	土器	皿	10.3		外表面に厚・タテ付着	淡黒	黒釉	17c後～18c後	黒川
299	東 II	焼山田	土器	皿	(12.0)		土器	淡灰	長石釉	16c末～17c初	黒川・美濃
300	東 II	焼山田	土器	皿	(14.2)	(8.2)	3.2	白	長石釉	16c末～17c初	美濃
301	東 II	焼山田	土器	皿	(8.3)	(3.0)	15.9高円口縁に赤褐色文、底面に磁粒、高円に「日本」の文字と磁粒3本、底面に磁粒	黒	黒釉	16c～18c	在野点か
302	東 II	焼山田	土器	皿	68.1	63.1	1.5高円口縁、見込に紫褐色文、底面に磁粒	白	白磁	17c後	不明
303	東 II	焼山田	土器	皿	68.0	7.2	3.0高円口縁、見込に紫褐色文、底面に磁粒	黒	—	4期	在野点か
304	東 II	焼山田	土器	皿	(11.0)	(4.8)	7.4高円口縁の白磁による打手形、黒川	黒	黒釉	17c末～18c初	美濃
305	東 II	焼山田	陶器	皿	(11.3)		外面に「日本」の字、内面に厚付け、黒川	白	灰釉	17c中	黒川・美濃
306	東 II	焼山田	陶器	鉢	(11.8)		内面に厚付け、白磁で厚付け	白	黒釉	17c後～18c後	黒川
307	東 II	焼山田	陶器	鉢	(12.0)		土器、漆黒成器あり	白	黒釉	17c初	美濃
308	東 II	焼山田	土器	皿	68.1	61.0	2.5高円口縁、ロウロ成器、1個器全面に厚・タテ付着	淡灰黒	—	18c	在野点か
309	東 II	焼山田	土器	皿	9.0	5.0	2.8ロウロ成器、内外面に厚付け	淡黒	—	18c	在野点か
310	東 II	焼山田	土器	皿	(10.4)	5.3	3.1ロウロ成器、外面に厚付け	黒	—	18c	在野点か
311	東 II	焼山田	土器	皿	9.3	7.0	2.5ロウロ成器、1個器全面に厚付け、裏面に磁粒	淡灰黒	—	18c	不明
312	東 II	焼山田	土器	皿	9.9	7.1	2.2ロウロ成器、付着物あり	黒	—	18c	在野点か
313	東 II	焼山田	土器	皿	9.9	6.6	2.7ロウロ成器	黒	—	18c	在野点か
314	東 II	焼山田	土器	皿(厚付け)			縦文、厚・タテ付着、縦文、中心に厚・タテ付着	黒	—	4期	不明
315	東 II	焼山田	土器	皿	(12.0)	(7.8)	2.4ロウロ成器	淡灰黒～黒	—	18c	在野点か
316	東 II	焼山田	土器	皿	(11.2)	6.2	2.6ロウロ成器	黒	—	18c	在野点か
317	東 II	焼山田	土器	皿	10.4	66.8	2.2ロウロ成器、内外面に厚付け	黒	—	18c	在野点か
318	東 II	焼山田	陶器	鉢	(10.0)	(4.0)	5.0高円口縁、胎内に2重輪、見込に1重輪、内面に文様、裏面に厚付け	白	白磁	16c前	黒川・美濃
319	東 II	焼山田	土器	皿	68.0		内面に厚・タテ付着	白	白磁	17c後	美濃
320	東 II	焼山田	土器	皿	(11.0)		内面に厚・タテ付着	白	白磁	4期	不明
321	東 II	焼山田	陶器	百花	69.3	(5.7)	2.5高円口縁、胎内に1重輪、見込に1重輪、胎内に文様、高円内に磁かす文様	白	白磁	17c前か	中国
322	東 II	焼山田	陶器	蓋物			厚付け、外縁丸、外面に厚・タテ付着、文様、1重輪あり	白	白磁	9c	美濃
323	東 II	焼山田	陶器	鉢	66.2	(2.8)	3.2高円口縁、厚付け、小口付	淡灰白	白磁	17c前	黒川・美濃
324	東 II	焼山田	陶器	皿	(10.0)	(5.5)	2.3高円口縁、内外面に厚付け	白	灰釉	16c後	黒川・美濃
325	東 II	焼山田	土器	皿	68.7	(4.7)	1.8高円口縁、内外面に厚付け	白	長石釉	17c前	美濃
326	東 II	焼山田	陶器	皿	(11.5)	(7.7)	2.7高円口縁に紫褐色文、見込に「日本」の字、裏面に磁粒	白	長石釉	17c中	黒川・美濃
327	東 II	焼山田	陶器	鉢	(14.3)		土器、見込に磁粒、磁焼	淡灰	長石釉	17c初	美濃
328	東 II	焼山田	陶器	鉢	(18.4)		土器	白	灰釉	18c後	黒川
329	東 II	焼山田	陶器	鉢	(5.0)		外表面に厚付け	淡灰	灰釉	17c末～18c初	美濃
330	東 II	焼山田	土器	皿	(11.0)		厚付け、外表面に厚付け	淡灰	灰釉	17c後～18c後	黒川
331	東 IV	土坑 1	土器	皿	69.5	(5.0)	2.1ロウロ成器、胎内に厚・タテ付着	淡黒～黒	—	16c	在野点か
332	東 IV	土坑 2	土器	皿			内面に文様、高円に厚付け	白	白磁	17c前か	中国
333	東 IV	土坑 2	土器	皿			裏面に厚・タテ付着	淡黒	—	15c	在野点か
334	東 IV	土坑 7	土器	鉢			裏面に厚・タテ付着	淡黒	—	15c	在野点か
335	東 IV	土坑 12	土器	鉢	(83.0)		外表面に厚付け、内外面に厚付け	黒	—	16c	在野点か
336	東 IV	焼山田	土器	皿	69.7	66.5	2.1ロウロ成器、厚付け、外表面に厚付け	淡黒～黒	—	16c	在野点か
337	東 IV	焼山田	土器	皿	(53.0)	(27.0)	15.9高円口縁、外表面に厚付け	淡黒	—	16c	在野点か
338	東 IV	土坑 2	土器	鉢	(13.4)		土器	黒	—	6c末	不明
339	東 IV	土坑 2	土器	鉢	(7.3)		底面に赤土を塗り着	淡灰	—	6c後	不明
340	東 IV	土坑 1	土器	鉢	(8.5)		内面に厚・タテ付着、底面に赤土を塗り着	淡黒～黒	—	6c中	在野点か
341	東 IV	土坑 1	土器	鉢	(13.2)	(5.9)	3.2高円口縁、厚付け	淡灰	—	9c中～後	在野点か
342	東 IV	土坑 1	土器	鉢	(13.2)	(5.2)	3.8高円口縁、厚付け	淡灰～黒	—	9c後	在野点か
343	東 IV	土坑 1	土器	鉢			胎内に厚・タテ付着	黒	—	9c前か	在野点か

※ () 内数字は測定半径を表す。

西区 瓮窑

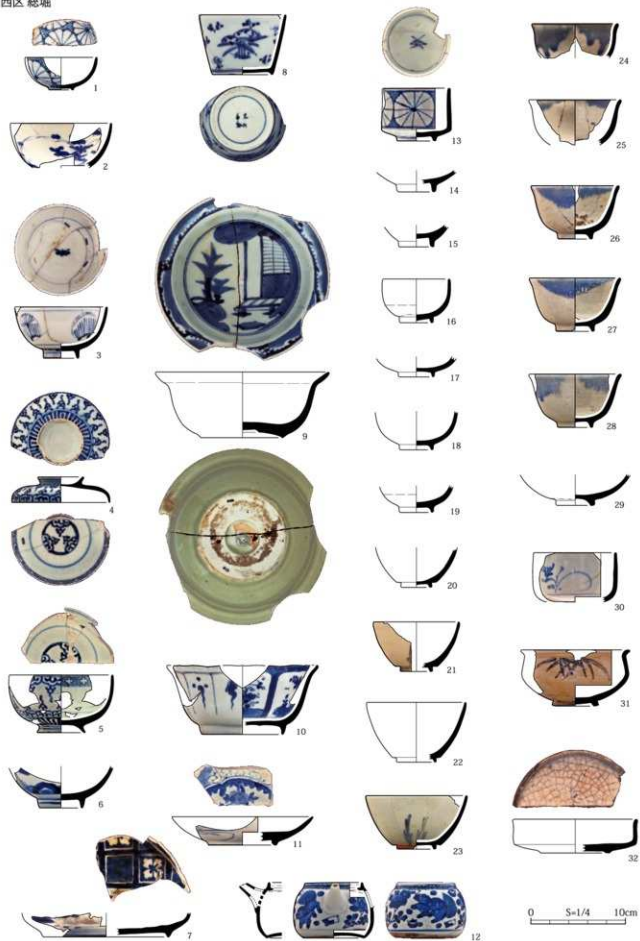
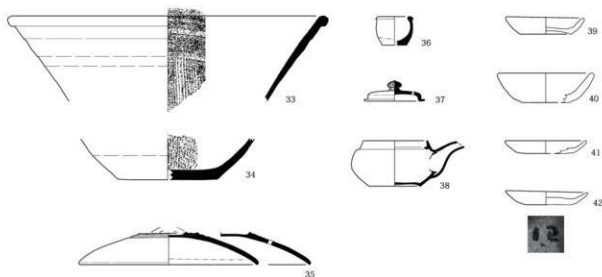
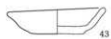


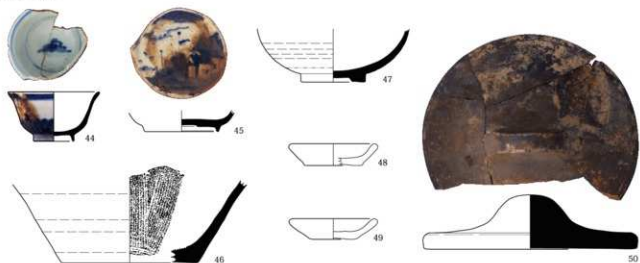
图 14 土器·陶磁器 (1)



西区土壘



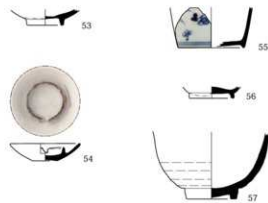
西区土坑1



西区 竪穴状遺構1



西区 検出面



西区 トレンチ

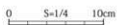
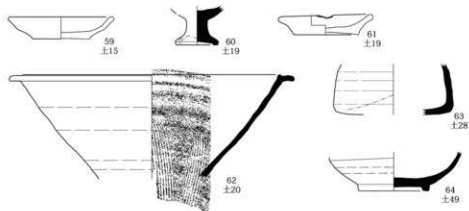
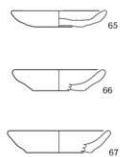


図15 土器・陶磁器(2)

東区 | 検土坑



東区 | 検建物



東区 | 検グリッド

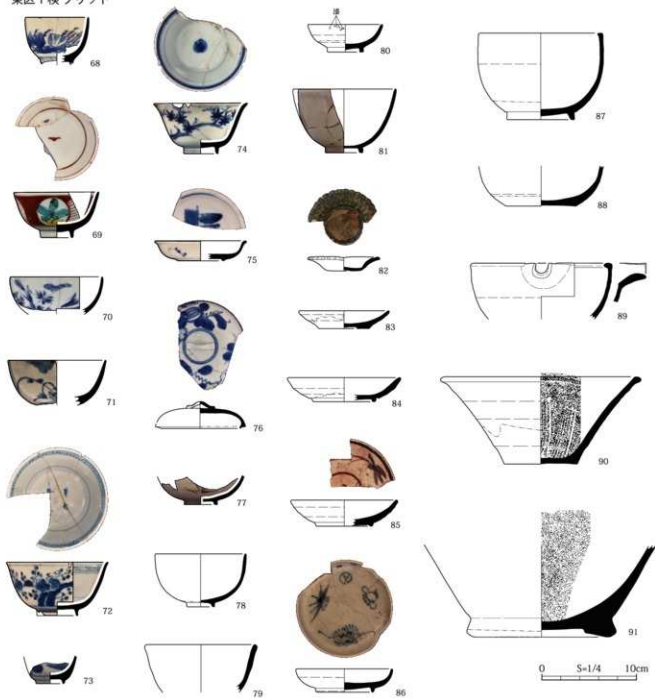


図 16 土器・陶磁器 (3)

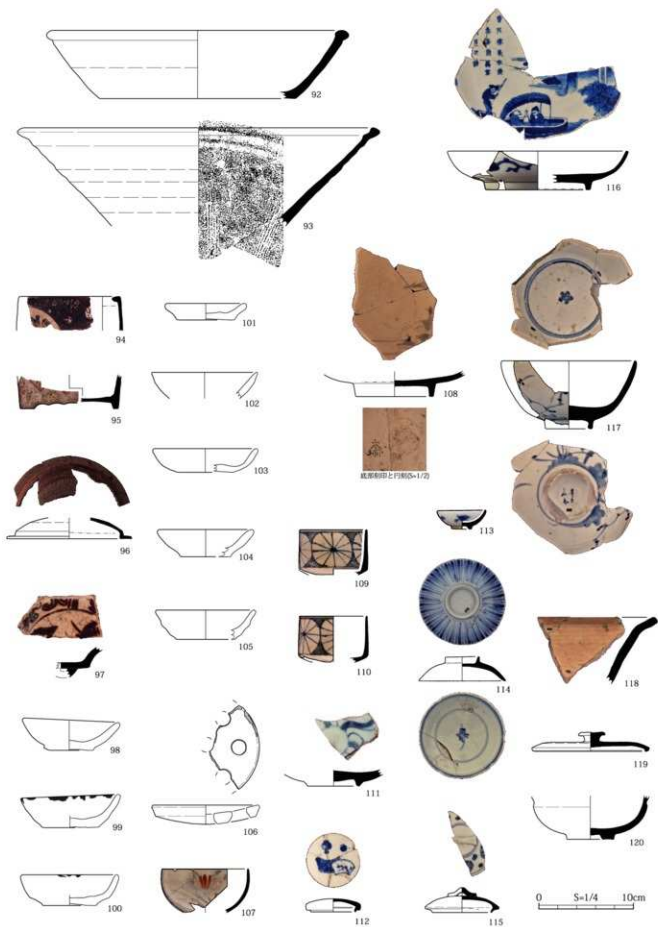


图17 土器・陶磁器(4)

東区 | 検出面

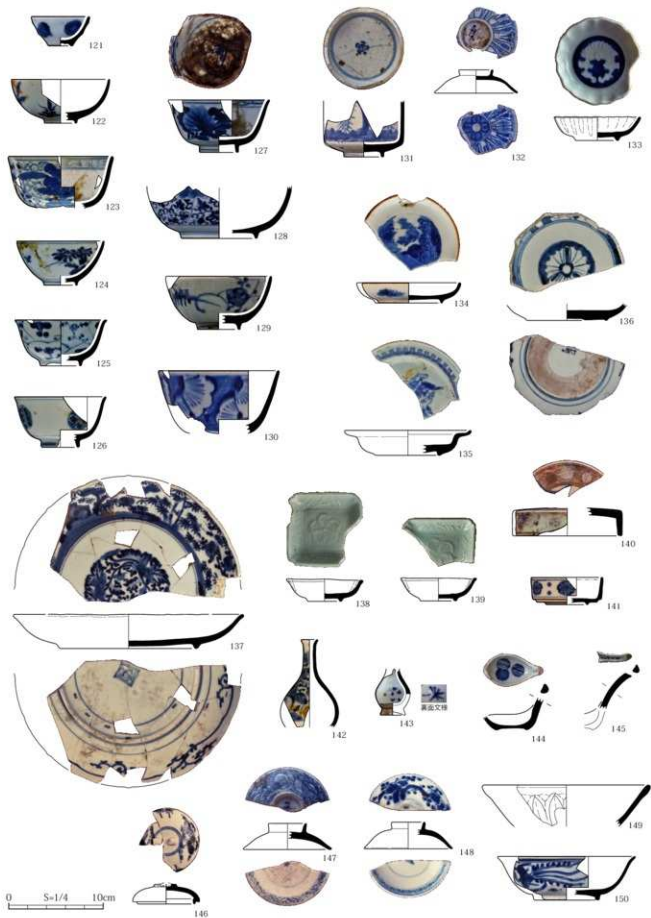


図 18 土器・陶磁器 (5)

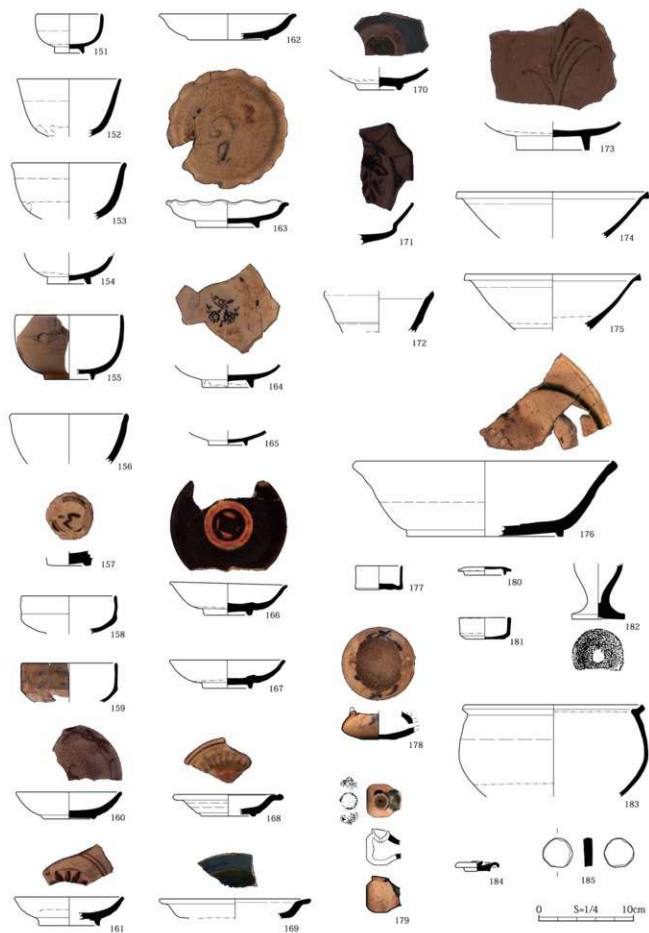
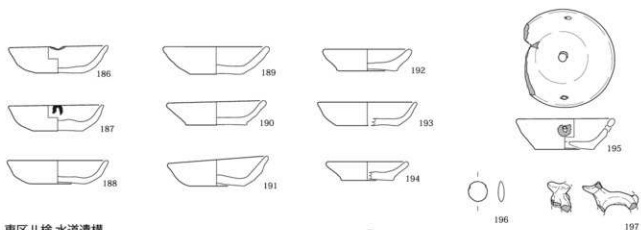
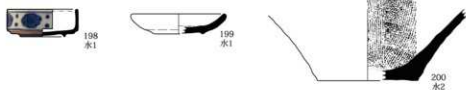


图 19 土器·陶磁器 (6)



東区II検水道遺構



東区II検土坑

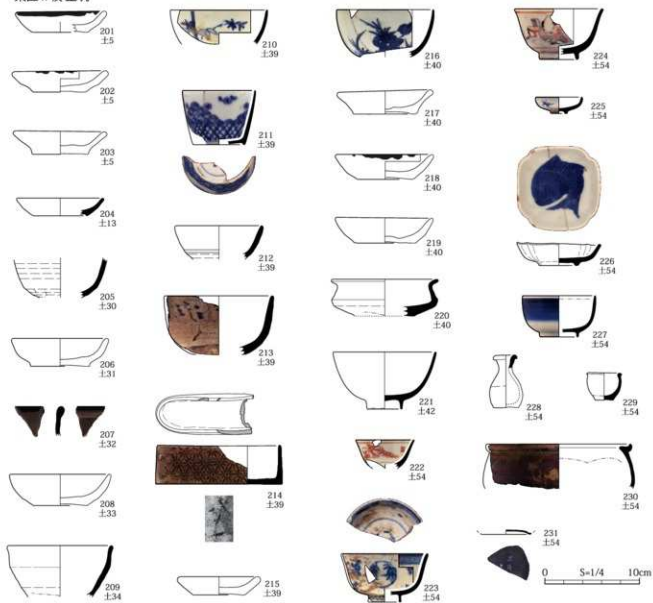


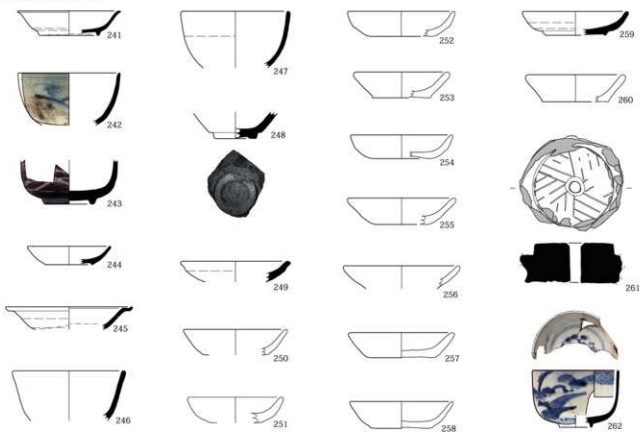
図20 土器・陶磁器(7)



東区II検ピット



東区II検グリッド



東区II検 検出面

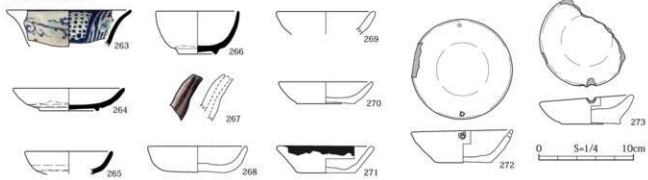
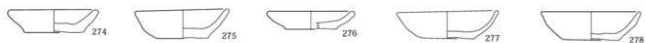


図21 土器・陶磁器 (8)



東区川検土坑

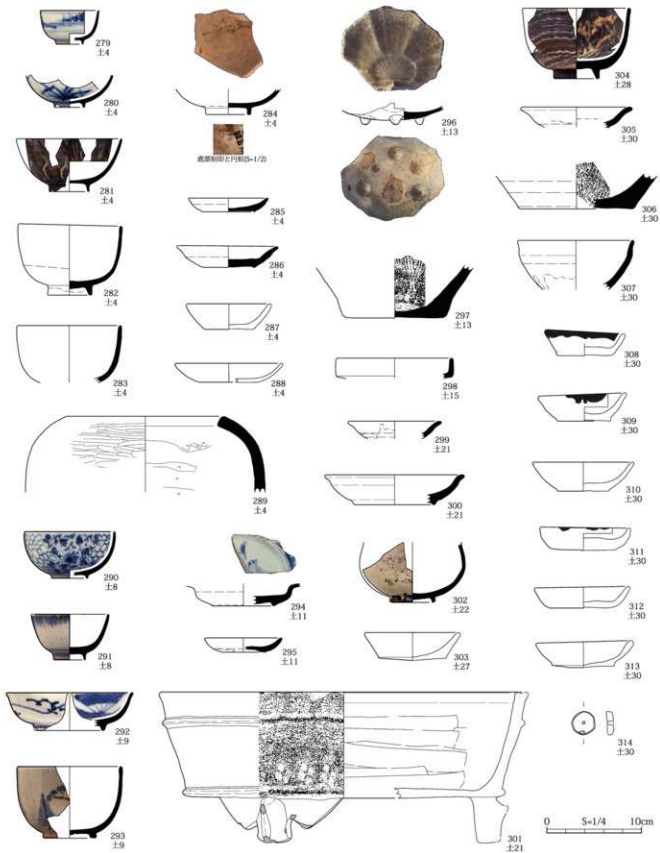
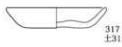
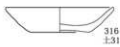
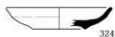


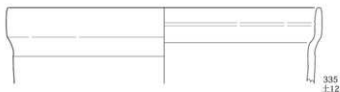
图 22 土器・陶磁器 (9)



東区Ⅲ検 検出面



東区Ⅳ検 土坑



東区Ⅴ検 土坑

東区Ⅴ検 溝1

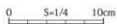


図 23 土器・陶磁器 (10)

第4表 軒丸瓦観察表

例No.	注記番号	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	瓦当面厚 (cm)	径 (cm)	重量 (g)	家紋	珠文の数	丸瓦部内面調整	特徴・その他
1	1191	東区IV棟 土2			3.0	15.6	534	連珠左巻三つ巴文	20か	不明	瓦当剥落部分に瓦当接合時のクシ目文あり
2	0515	西区 土1				15.8	74	連珠左巻三つ巴文	不明	不明	一部副化あり

※ () 内数値は推定値を表す

第5表 丸瓦観察表

例No.	注記番号	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	内面調整	外面調整	特徴・その他
3	0297	西区 総堀	31.5	14.3	1.9	140	栞目正庭→栞目正庭→ヨコナデ→移状タタキ	ヨコナデ→タテナデ	外面に刻書あり、「下」か。内面と外面の一部に付着物あり

第6表 軒平瓦観察表

例No.	注記番号	出土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	文様	特徴・その他
4	0796	東区I棟 N1E33				36	高寺草文か	
5	0759	東区I棟 横出面				76	唐草文	
6	1092	東区II棟 土4			2.1	564	三葉文唐草文	瓦当面を横断するひび割れあり

第7表 平瓦観察表

例No.	注記番号	出土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴・その他
7	0284	西区 総堀	29.0	25.4	2.0	1912	外面に刻書あり、「口」か

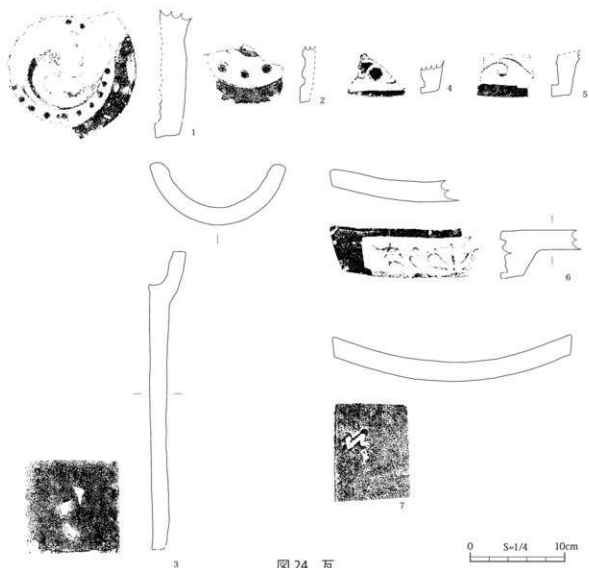


図24 瓦

3 木製品 (表 8・9、図 25～27、写真図版 9)

出土木製品は総数 1,995 点を数える。ここでは箸状木製品と杭を除いた木製品 325 点のうち、遺存状態の良好な遺物 39 点を図示し、分類ごとに詳細を述べる。なお、塗漆された木製品については、「(7) 漆製品」にて一括して報告する。他木製品の出土状況については、表 8 を参照されたい。

(1) 服飾具

下駄 (1・2) 1 は銀杏歯の連歯下駄である。前後歯の間は鑿で削った痕が明瞭に表れ、歯元には鋸痕が数条みられる。台部は長円形で、台表に残る指頭・指腹圧痕の様子から、左足に用いられていたと推測する。2 は台裏の棧に穿たれたホゾ孔に別材の歯を差し込んだ差歯下駄である。ホゾ孔は台表まで突き抜けるため、露出下駄に分類される。歯は前後とも伴わない。台部は長円形で、横断面は船底形である。横緒孔の半部より下を折損するが、指頭指腹圧痕が明瞭なため、左足用だとわかる。

筭 (3) 円形の頭部を有する筭である。頭部周辺の断面は方形だが、下端にいくにつれて丸棒状になる。頭部付近に径 1.5～2mm の丸穴が 3 箇所列られており、裝飾素材を象嵌あるいは接着していた可能性がある。

横櫛 (4) 鬢を掻き付ける際に使用する白木の鬢掻きで、結節に分類される。左右の歯の長さを変えるために一方がやや細くなり、歯元は親歯に向かって曲線を描く。歯は片歯で、厚さ 2mm 程の歯挽き鋸で一吋間に 14 本の歯数で挽かれ、丹念に鍵がけされる。

(2) 遊戯具

羽子板 (5・6) 5・6 ともに下方角は二手切りの縁取りを持つ。『図説江戸考古学研究事典』には、羽子板の下方角の特徴として「古いものカットは一手切りで、江戸時代は二手切り」とあるが、6 が出土した検出面は 16 世紀代と推定される。広島県・草戸千軒町遺跡では、室町時代後半の層から二手切りの羽子板が出土していることから、江戸時代以前であっても稀にみられるようである。5 は表裏に赤色顔料の付着が見られることから、彩色されていたと思われる。木地の痩せにより羽子の打痕は判別し難いが、柄には握りの圧痕が観察できることから、羽子をつく実用的なものであったと考えられる。6 は上半部が刃物によって切断されるため、二次加工をしようとした可能性がある。刷毛の柄に似た形状で、毛を装着する部位には段を設けているが、毛を結び留める孔はなく、完成まで至っていない、あるいは毛を膠や漆で固めて使用したと考えられる。

独楽 (7) 砲弾型で、外面を粗く面取りする。平滑に削った上面には心棒を差し込む径 7mm の穴が認められるが、心棒は残存しない。また、地面に接する先端部を欠損する。千代田区・溜池遺跡では椀皮を巻いた独楽の出土例があるが、7 は胴の上部径が僅かに小さく、鉄分の付着の様子から、同様に椀皮のようなものが巻かれていた可能性が高い。

(3) 日用品

栓 (8) 握部が左右に張り出す形状をしており、断面は扁平である。栓部

表 8 出土木製品内訳

器具名称	計 35 点
服飾具	下駄
調理加工具	応丁柄
食事具	丸箸
容器	椀 / 椀蓋 / 鉢 曲物 / 指物
	不明
木簡	板状製品
	付札
建築部材	柱
	椀
用途不明品	13
遊戯具類	計 9 点
服飾具	横櫛
食事具	箸
容器	椀
	曲物
	不明
建築部材	椀
用途不明品	1
遊戯具類	計 157 点
服飾具	下駄 / 草履下駄
	横櫛 / 簪
遊戯具	羽子板 / 独楽
日用品	栓
調理加工具	筭 / 箸杖
	柄杓 (柄)
	製竹
食事具	折箸
	丸膳 / 丸鉢
造営具	綱杓
紡織具	紡錘車
工具	刀柄
漆工用具	漆刷毛
	漆液容器
祭祀具	遣申
容器	椀 / 椀蓋 / 皿
	曲物 / 曲物 / 指物
	結合補助具
	不明
木簡	筒札
	板状製品
調理	不明
建築部材	椀
用途不明品	44
遊戯具類	計 91 点
服飾具	下駄
遊戯具	羽子板
日用品	栓
食事具	椀
容器	椀
	曲物 / 指物 / 指物
	不明
祭祀具	遣申
	人形 / 武器形
	呪符か
	折箸
	御塔婆・板御塔婆
木簡	習書木簡
調理	器具製脚部材
建築部材	椀
	杖小
用途不明品	24
遊戯具類	計 19 点
容器	不明
建築部材	礎板
用途不明品	17
他	計 14 点
服飾具	下駄
遊戯具	羽子板
容器	椀
	指物
建築部材	椀
	不明
用途不明品	3

[]内は漆製品

は円筒状に削り出し、使用に際する圧痕が全体にみられる。

(4) 調理加工具・食事具

匙 (9) 柄を欠損する。椀部内側は滑らかに削り出され、外側は刀子で粗く面取り整形される。

堅杵 (10) 握部に突起がなく、搦部との境界は曖昧である。先端部は使用による摩滅がみられる。

狭匕 (11) 筥部は片刃で、半月状に作り出す。搦鉢で搦った味噌などを練ったり掻き取るのに使われる。

(5) 紡織具

紡錘車 (12・13) いずれも紡錘車の紡輪である。中心に穿孔をもち、円盤状を呈する。軸(紡莖)は残存しない。12の表面には、同一方向に流れる細かな条痕が無数にみられる。外縁最大径は57mm、穿孔径は3mmを測る。13は厚手で、側面を粗く面取りする。外縁最大径は44mm、穿孔径は3mmを測る。

(6) 漆工用具

漆刷毛 (14) 塗漆用の漆刷毛の柄で、毛を差し込むために全体の2/3程度まで裂かれる。毛を綴じた棧には、漆で固着した紐状の留め具が僅かに残存する。全体に漆が付着しており、特に刷毛先には細粒子を含む生漆が付着することから、主に漆下地を施す際に使用されたものと思われる。

漆液容器 (15) 椀を漆液容器として転用したものである。通常、木地の厚い椀は年月を経るとともに歪みが生じやすいが、15は極めて薄挽きで、丁寧な下地処理が施される。非常に堅牢で、歪みはほとんど認められない。塗りは外面が黒漆塗り、内面が赤色漆塗りの黒内朱である。本来であれば上等品として市場に出回るはずであったろうが、最終の上塗り後の漆膜固化時にチヂミが生じてしまい、やむなく漆液容器として転用したと考えられる。チヂミは特に塗りの難しい高台内や高台際にもみられ、黒漆を厚く塗ったために生じたと思われる。塗漆工程で失敗している点、黒漆の容器として転用されている点から、塗師が使用した可能性が高い。胴上部には赤色漆による漆絵で、粗雑な「丸に鶴」紋が3単位あるが、失敗品に代えて描いていることから試し描きの可能性がある。内面には黒漆を塗って丁寧に掻き取った痕の他、固化した漆紙(蓋紙)が残存する。底面には径15mmの丸い穿孔が穿たれており、漆液容器として使用したのち、竹筒などを通して漏斗としてさらに転用した可能性がある。

(7) 漆製品

挽物 (16～20) いずれも横木地で、器物全体に下地処理を施す。16の椀は全体に器厚が厚く、高台は外湾しながら開く。下地は簡素で、黒漆による下塗りののち、総朱で仕上げている。高台内には黒漆による漆絵で文字が記される。一文字目は判読不能だが、二文字目は「野」と読める。17の椀は底部が平坦で腰部まで張り出し、口縁に向けてやや湾曲しながら立ち上がる。器厚は腰部が厚く、対して口縁・底部・高台は薄く挽かれる。塗りは黒内朱だが、漆膜の大半が剥落し、下地面が露呈する。胴上部には、流水紋に五弁小花を散らした金箔の箔絵が施される。18は腰高の椀で、胴部はゆるやかに湾曲する。高台は垂直に下りたのち、口縁部でやや外湾する。高台内の削りは浅く厚みがある。塗りは黒内朱で、胴部には赤色漆で大きく漆絵が描かれるが、下地が脆くほとんど残らない。

19は総黒の椀蓋で、腰部に平坦な面取りと明瞭な稜線を持つ。胴部は垂直に下り、口唇に向けて急速に収束する。高台は低く、ハの字状に直線的に開く。

20は鉢で、内外面ともに黒漆による下塗りののち、上塗りは高台内を除く全てを赤色漆で仕上げる。器厚は全体に均一で、下地・塗漆ともに丁寧に堅牢な造りだが、経年劣化によって上塗りの赤色漆が点々と剥落する。

横櫛 (21) 芯持ちの板材から造られた摺漆の解櫛で、峰が緩やかに湾曲し、木口が垂直に下りる利体型である。歯は片歯で、一寸間の歯数は11本と、解櫛の中でも歯間の荒い押荒であるが、欠損が多い。

曲物 (22～24) 22は摺漆の曲物底板である。側板をのせるために上面周縁を切り欠いており、断面形

状は凸形を呈する。側板との接着には漆が用いられるが、側板は僅かに残存するのみである。23は黒漆塗の丸胴で、裏面に彫られた溝には脚が押し込まれ、漆で固定される。側板は欠損するが、裏面周縁には側板との境界に下地漆（紙の粉などの別材と練り合わせてパテ状にした漆）を充填することで、角をなめらかに整えた痕跡がみられる。24は黒漆塗の丸盆底板である。表面周縁には、23と同様に下地漆が残存する。裏面には別材の脚が接着されていたと思われるが、漆とともに剥落・欠損する。

(8) 祭祀具・葬具

人形(25～27) 人を象った形代である。25は短冊状の薄板を整形したもので、頭部は主頭状に切り落とし、肩は切り欠きによる撫で肩、足は切り落としによって作り出す。左足と右肩を欠損する。顔は墨描きによって眉あるいは髪・目・輪郭のようなものが表現される。古代の人形にみられる形状だが、胴部表裏に墨書が記される例は県内でも珍しい。25は人の正面全身像を平面表現したもののだが、対して26・27は角材を削り出して整形した、中世によくみられる立体人形である。26は、両目と口をV字状に削り取ることで顔を表現する。頭部は輪郭に沿って前側面を削り込むが、肩の表現は曖昧である。27は全周削り込みによって括れをつくることで、頭部と胴部の境が明確に表される。胴部下端を尖らせていることから、地面に突き刺して使用したと考えられる。

斎串(28～30) 28は上半部を縦方向に断裂させ、下端を鉛筆状に尖らせた棒状の斎串である。御幣紙などを挟んだ状態で地面に突き刺すなどして使用したと考えられる。29・30は短冊状の板の下端を尖らせた斎串で、30は頭部を主頭状に加工する。

武器形(31・32) 31は槍形である。莖の断面は角を面取りした方形、穂の断面は片面を平坦に削った蒲鉾形で、先端に向かって薄く整形される。32は刀形である。鐔や把頭などの表現はなく、柄との境は曖昧である。刀身は峰から刃先に向けて薄く削ることで鶏卵形の断面を呈する。

呪符(33) 上端・左辺折り切り、右辺削りによって整形される。下端は刃物によって二方向から斜めに切り落とすことで尖らせる。表面一文字目には「部」の略字である「ア」が墨書され、裏面には五芒星とみられる記号を一筆書で記す。地面に突き刺して利用した呪符であったと推測する。

板塔婆(34) 頭部を主頭状に加工し、左右両辺削り、下部を欠損する。裏面は割り裂きである。墨書は断片的で判読し難いが、裏面四文字目あたりには「風」あるいは「頁」と読める墨痕が確認できる。「板塔婆には経文がみられない」(山根 1983)が、34には漢字が記されることから、板塔婆と思われる。

折敷(35) 角を切り欠かない平折敷の底板である。左半部を折損するが、周縁には糸状の綴皮で側板と結合するための丸い小孔が穿たれる。無数の刃物痕がみられるため、俎として転用した可能性がある。

(9) 木簡(36～39)

習書木簡(36) 二片接統の薄板に墨書したものである。習書木簡として二次利用されたものだろうか。裏面には「我此此」と、似た字を書き連ねており、四文字目も残画から「此」の字が続くと推定する。漢字の使用が定着している中世末頃の遺構からの習書木簡出土は稀である。

荷札(37) 二片接統の短冊状の木製品である。上端はやや湾曲するように整形され、左右両辺削り、下端切断、下部右辺を欠損する。墨書は両面に残るが、裏面は部分的に削られ、文字の多くが抹消する。

付札(38・39) 38は上端切り落とし、左右両辺削りで、下端は折損する。上端中央に紐を通すための丸い穿孔(径7mm)を持つ。下端右辺の欠損により文字の一部を失う。39は方形の付札で、上下両端切り落とし、両辺を削る。荷物に打ち付けるための釘孔(径2mm)を上端中央に持つ。全体に丁寧な加工で、墨書が明瞭に残る。総堀の埋土内より出土しているが、裏面には算用数字が記されることから、総堀の埋戻しが行われた時期前後に混入したと考えられる。

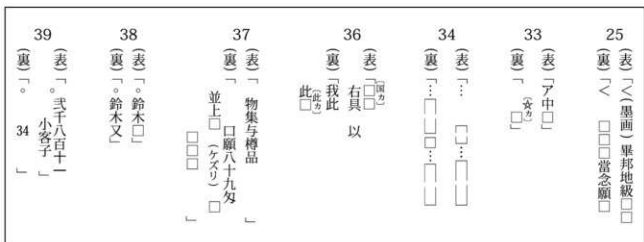


図 25 墨書製品釈文一覧

(参考・引用文献)

江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1989 草戸千軒町遺跡—第 42・43 次発掘調査概要—

山県元 1983 「中世の信仰」『季刊考古学』第 2 号

表 9 木製品一覧表

ID	発掘区	種別	遺構	種別			手法	法量 (cm)			破損状況	備考		
				分類	素材	職分		長さ	幅	厚				
W-3	38	西	一	総架	木製	付札	板材	榎目	(9.5)	2.6	0.6	ほぼ完好	表裏両面、上部中央に丸穿孔(φ 7mm)、下部欠損	
W-6	39	西	一	総架	木製	付札	板材	榎目	6.0	4.6	0.7	完好	表裏両面、上部に附け(φ 2mm)	
W-7	19	西	一	総架	容器(漆製品)	椀蓋	雑物	横木地	榎目	不明	高台 4.4 (3.9)	ほぼ完好	下部欠損、縦割	
W-12	20	西	一	総架	容器(漆製品)	鉢	雑物	横木地	榎目	不明	高台付組 (10.4)	(2.9)	ほぼ完好	下部欠損、下部：割傷 / 上部：赤色塗(高台内側塗)
W-17	23	西	一	総架	食事具(漆製品)	丸蓋	曲物	板材	榎目	<26.0	(5.9)	3.4	1/4 欠	表裏両面塗、縁部漆塗り、割傷欠損
W-5	4	東	Ⅱ	土 54	飯盛り具	椀	板材	榎目	(12.7)	2.7	0.6	ほぼ完好	縦割、白木製、軸・轆・轆平方に欠損、2 分割	
W-12	37	東	Ⅱ	土 4	木製	蓋札	板材	榎目	17.6	4.7	1.1	不明	表裏両面、表面より下部に部分的に墨塗り、2 分割	
W-13	2	東	Ⅱ	土 4	飯盛り具	漆印下駄	角材	二方板	(15.4)	6.9	2.9	ほぼ完好	内部：黒内丹 / 縁部黒塗り、下部：漆黒欠損	
W-14	3	東	Ⅱ	土 4	飯盛り具	笄	板材	榎目	(12.1)	1.4	0.4	ほぼ完好	内側の漆塗、表面に丸孔 3 箇所、下部漆欠損	
W-15	24	東	Ⅱ	土 4	食事具(漆製品)	丸蓋	曲物	板材	榎目	—	(22.5)	0.9	1/4 欠	表裏両面塗、縁部・轆欠損
W-43	16	東	Ⅱ	土 8	容器(漆製品)	椀	雑物	横木地	榎目	不明	(6.6)	(5.5)	口縁欠損	下部欠損、下部：割傷 / 上部：縦木(長さ 11.7)、高台内に黒塗で縁割(文字)
W-44	1	東	Ⅱ	土 8	飯盛り具	漆印下駄	角材	二方板	22.9	9.5	6.6	ほぼ完好	内部：黒内丹、縦割、穿孔(φ 1mm)4 箇所、縁部縦割	
W-45	17	東	Ⅱ	土 8	容器(漆製品)	椀	雑物	横木地	榎目	—	(5.6)	(7.3)	口縁欠損	下部欠損、縁に穿孔(φ 2 ~ 3mm)3 箇所
W-47	12	東	Ⅱ	漆印面	紡織具	紡織車	板材	榎目	—	5.7	0.6	ほぼ完好	紡織車の紡織、表面半数、中心に穿孔(φ 3mm)、2 分割	
W-49	22	東	Ⅱ	漆印面	紡織具(漆製品)	織板	曲物	板材	榎目	—	15.3	1.4	ほぼ完好	側面、表面内面、縦割付子に欠損、2 分割
W-50	11	東	Ⅱ	漆印面	調理加工具	笄	板材	榎目	24.1	3.2	0.6	ほぼ完好	縁部先端使用による摩滅	
W-51	8	東	Ⅱ	漆印面	日用品	杵	榎材	削り出し	(7.5)	4.3	2.9	ほぼ完好	正面半数、先端使用による摩滅	
W-60	14	東	Ⅱ	土 20	漆印面	漆刷毛	板材	榎目	(9.5)	3.8	0.8	ほぼ完好	漆印面、縁に穿孔(φ 2 ~ 3mm)3 箇所	
W-74	21	東	Ⅱ	グリッド	飯盛り具(漆製品)	椀	板材	(芯持ち)	榎目	(3.3)	(6.2)	1.2	1/2 欠	縦割、漆塗、表面大半を欠損
W-83	5	東	Ⅱ	グリッド	漆刷毛	羽子板	板材	榎目	(27.4)	8.8	1.1	ほぼ完好	赤色顔料付。下部、縁は使用による摩滅	
W-84	7	東	Ⅱ	グリッド	漆刷毛	笄	板材	削り出し	—	2.7	(3.5)	ほぼ完好	先端使用による摩滅	
W-85	15	東	Ⅱ	グリッド	漆印面	漆刷毛	雑物	横木地	榎目	13.2	6.8	4.1	ほぼ完好	利用、下部欠損、内部丸、縁上部に赤色塗で縁割 3 箇所、高台内・高台際に付子 1 箇所、縦割に穿孔(φ 15mm)
W-117	10	東	Ⅱ	グリッド	調理加工具	笄	榎材	削り出し	38.3	2.5	—	完好	先端使用による摩滅	
W-138	13	東	Ⅱ	グリッド	紡織具	紡織車	板材	榎目	—	4.4	0.8	ほぼ完好	紡織車の紡織、縁部半数を欠損、中心に穿孔(φ 3mm)	
W-165	28	東	Ⅱ	土 20	祭祀具	漆印	榎材	削り出し	(32.7)	1.0	0.9	ほぼ完好	上半部前方に断面、下部を欠失させる	
W-25	35	東	Ⅱ	土 2	祭祀具	漆印	曲物	板材	(29.7)	(9.0)	(0.7)	不明	神祇の平形、縁に丸孔、左右半・縦割欠損	
W-27	29	東	Ⅱ	土 2	祭祀具	漆印	板材	榎目	(23.5)	(2.0)	(0.7)	一部欠損	神祇の板の下部を欠失させる	
W-28	30	東	Ⅱ	土 2	祭祀具	漆印	板材	榎目	24.2	1.6	0.7	完好	神祇の板の下部を欠失させる、漆黒土塗り	
W-33	32	東	Ⅱ	土 2	祭祀具	漆印	板材	榎目	31.4	2.8	0.8	不明	刀身断面漆黒神形	
W-34	36	東	Ⅱ	土 2	木製	附音木筒	板材	榎目	(15.0)	(8.8)	(0.1)	不明	表裏両面、2 分割	
W-43	34	東	Ⅱ	土 7	香具	板形漆分	板材	榎目	(32.6-33.6-7)	2.0	0.2	不明	表裏両面、漆黒土塗り	
W-44	25	東	Ⅱ	土 7	祭祀具	人形	板材	榎目	(15.8)	2.4	0.2	不明	表裏両面、漆黒土塗りの香具、漆黒土塗り / 目付欠失・足(削り出し)の彫あり	
W-47	9	東	Ⅱ	土 18	食事具	匙	角材	二方板	(9.9)	4.0	(0.3)	一部欠損	欠損	
W-54	18	東	Ⅱ	土 1	容器(漆製品)	椀	雑物	横木地	榎目	—	7.2	8.2	口縁欠損	縦割、下部欠損、内部丸、縁部に赤色塗で縁割
W-55	26	東	Ⅱ	土 1	祭祀具	人形	角材	二方板	(15.6)	2.4	2.1	一部欠損	全体丸形、顔の表現あり	
W-70	6	東	Ⅱ	漆印面	漆刷毛	羽子板	板材	榎目	(16.1)	(7.4)	(2.1)	ほぼ完好	下部、縁部(二次加工)	
W-75	31	東	Ⅱ	漆印面	祭祀具	漆印	榎材	削り出し	24.9	1.1	0.8	完好	縁部断面漆黒神形	
W-80	33	東	Ⅱ	漆印面	祭祀具	板形漆分	板材	榎目	12.1	(2.1)	0.2	一部欠損	裏面半数、下部欠失	
W-89	27	東	Ⅱ	敷地面	祭祀具	人形	角材	二方板	15.2	2.7	2.2	完好	全体丸形、顔部下部欠失	

○ () 内部塗は残存、◇ 内部塗は想定塗をそれぞれ表す。

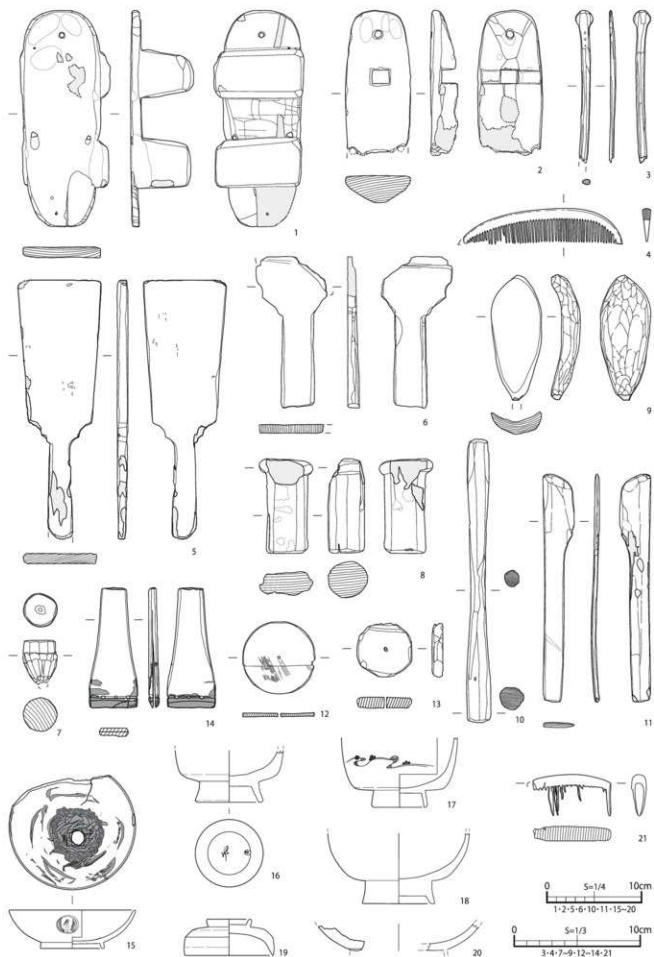


图 26 木製品 (1)

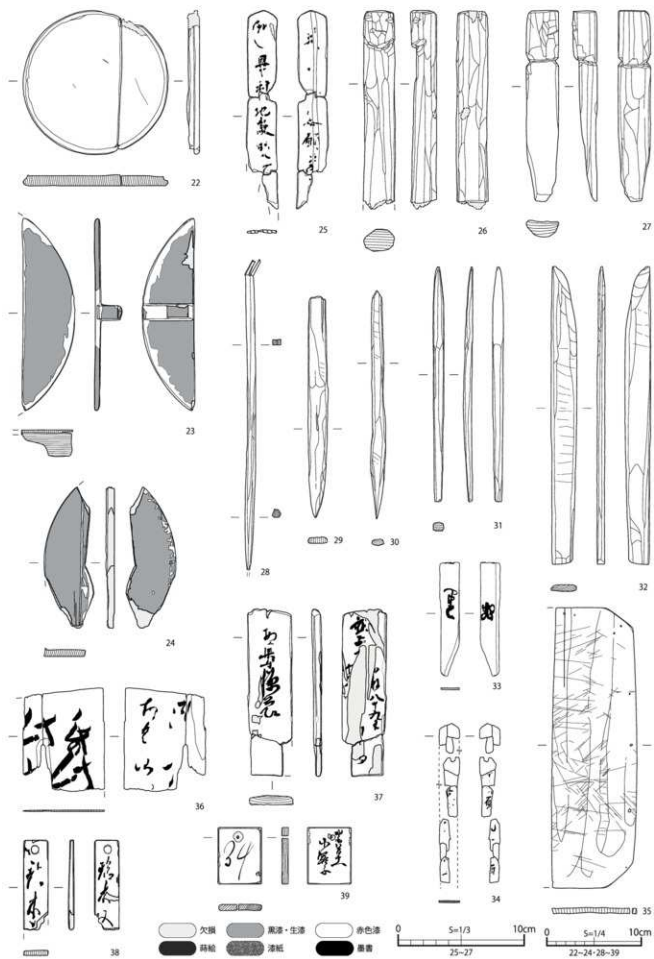


图 27 木製品 (2)

4 箸状木製品 (表 10～15、図 28～30)

木材を加工した製品のうち、本調査で最も出土点数の多いものが箸状木製品である。完形品は 323 点を数え、一端・両端欠損品を合わせると総点数は 1,670 点に及ぶ。本稿で扱う「箸状木製品」とは、棒状に加工した痕跡のある木製品を指し、穿孔・ホゾなど、箸とは明らかに異なる加工が認められるものや、薄板を加工した斎串、他製品の部材については除外する。なお、箸を火付け木として転用した例や、斎串や箸との判別が困難なものが多岐みられたが、これらも箸状木製品として扱うこととした。

形状の分類については、『御殿川流域遺跡群 I』のモデル (図 28) を参考にしている。「A・B は、両端を削り尖らせてあるもので、A はその削り口がどこから始まっているのか不明であり、削り方に丸みのあるもの、B は削り口が明瞭で削り方がシャープになっているもの」、「C は片側の先端だけ尖らせてあるもの」、「D は片側を尖らせているものの全体的に先端に向かって細くなっていくもの」、「E は両端とも切っ

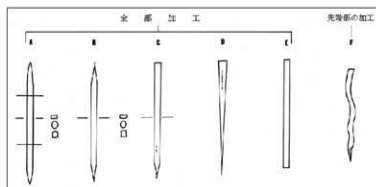


図 28 箸状木製品別モデル (注 1 一部改変)

表 10 遺構別一覧

区/検	遺構	A	B	C	D	E	F	G	出土点数		
									計	[内残存有]	
西	総堀	1	0	0	0	0	0	15	16	[1]	
東/Ⅱ	水道 1	1	0	0	0	0	0	17	18	[1]	
	土 54	0	0	1	0	0	0	0	1	[1]	
東/Ⅲ	土 4	50	9	17	0	4	11	336	427	[28]	
	土 8	1	0	0	0	0	0	1	2	[1]	
	土 20	13	4	6	0	1	3	53	80	[4]	
	土 21	21	5	14	4	0	3	149	196	[6]	
	土 23	0	0	0	0	0	0	25	25	[1]	
	土 24	0	0	0	0	0	0	1	1	[1]	
	土 27	2	1	0	0	0	0	34	37	[1]	
	土 29	0	0	0	0	0	0	1	1	[0]	
	土 31	0	1	0	0	0	0	15	16	[0]	
	NSO-SS/ E28E36	75	8	24	0	9	15	395	526	[23]	
検出面	12	1	3	0	0	0	32	48	[3]		
東/Ⅳ	土 1	0	0	0	0	0	0	1	1	[0]	
	土 2	8	2	11	2	0	2	69	94	[5]	
	土 7	1	0	0	0	0	0	4	5	[1]	
	土 18	6	0	0	1	3	0	15	25	[0]	
	P3	0	0	0	0	0	0	1	1	[0]	
	P5	0	0	0	0	0	0	2	2	[0]	
	P12	0	0	0	0	0	0	2	2	[0]	
	溝 1	1	1	2	0	4	1	22	31	[0]	
	検出面	10	3	3	0	0	1	28	45	[1]	
	東/V	溝 1	0	0	0	0	2	9	11	[2]	
東壁		0	0	0	0	0	1	1	[0]		
裾張 tr		4	0	0	2	1	0	30	37	[2]	
北壁 tr		3	0	0	1	1	0	16	21	[0]	
計		209	35	81	10	23	38	1,274	1,670	[82]	
								A～F計	396	検出割合	4.9%

てあり、尖りがないもの」、「F は片方の先端が尖っているものが多いが、全体の加工の度合いが低く、ほとんど先端だけを削っているもの」、「折れて出土したのででの分類に入るのか分からないものを G」[注 1]としている。断面は、平・四角・丸の他に、丸よりも面取り加工の度合いが低い「多角」を追加し、4 つの形状に分類した。

本調査地の箸状木製品は、そのほとんどがⅢ検から出土しているが、御殿川流域遺跡群では中世から近世初頭までの堆積層からの出土を中心とする。出土量のピークに時期差はあるが、製作方法は共通するため、以下、御殿川流域遺跡群の例との比較も交えながら、本調査地より出土した箸状木製品の詳細について述べていく。

まず、遺構ごとの出土量を表 10 に表した。概観すると、総堀 16 点 (1.0%)、Ⅱ検 19 点 (1.1%)、Ⅲ検 1,359 点 (81.4%)、Ⅳ検 206 点 (12.3%)、Ⅴ検 11 点 (0.7%)、その他より 59 点 (3.5%) 確認している。Ⅲ検からの出土量が多い点は遺構数にも起因するが、木製品出土量の傾向と大差ない。タイプについては、欠損により形状不明の G を除く 6 タイプのうち、A が 209 点 (52.8%)、B が 35 点 (8.8%)、C が 81 点 (20.5%)、D が 10 点 (2.5%)、E が 23 点 (5.8%)、F が 38 点 (9.6%) となる。御殿川流域遺跡群では、最も出土数の多い A が 27.2%、

次いでBが18.5%、Cは最も少なく4.4%にとどまるが、本調査地ではAのみで調査地全体の半数を超え、Cは2番目に多く、Bは1割に満たない程度で、タイプ別の出土量に大きな偏りがみられる。

続いて完形品の法量を表11にまとめた。タイプごとの完形品は、Aが148点、Bが29点、Cが76点、Dが10点、Eが23点、Fが37点の総点数323点である。Aは最長329mm、最短67mm、平均は258.1mmで最も長く、96.6%が220mm以上である。Bは最長294mm、最短130mm、平均236.5mmで、220～280mmがやや多い。Cは最長296mm、最短79mm、平均190.8mmである。長さにとまりがなくバラエティーに富むが、170～250mmがやや目立つ。Dは最長185mm、最短109mm、平均129.2mmで最も短い。150mm以上は1点のみで、他は全て110～140mmに収まる。Eは最長329mm、最短121mm、平均223.0mmである。Fは最長294mm、最短67mm、平均155.9mmである。E・F共に長さにとまりはみられないが、Fは169mm以下がやや多い。

各タイプの法量の平均値を図29に示した。本調査地は平均値が200.6mmで、最長Aと最短Dの差は128.97mmである。御殿川流域遺跡群は平均値が176.8mmと、本調査地よりも23.8mm短く、最長Bの191.1mmと最短Dの158.7mmの差は32.4mmである。本調査地の折れ線は大きく傾き、タイプによって法量に大きな差がみられるが、一方で御殿川流域遺跡群はほぼ直線的で、平均値に集まる。しかし、タイプごとの長短の傾向は似ており、両端を尖らせたA・Bは長大で、片側のみ尖らせるDと様々な形状を含むFは短い傾向にあるという点は両者とも共通する。

次に、A～Fの材の加工法と断面形状に着目して分類してみた。割り裂きは板材を割り裂いて棒状にしたもので、その後、材の胴部を削って表面調整をしたものが削り出しである。表12をみると、割り裂きは61点、削り出しは335点で、大半を削り出しが占めていることがわかる。断面形状は、平が111点(28.0%)、四角が114点(28.8%)で同程度出土する。多角は146点(36.9%)で最も多いが、丸はわずか25点(6.3%)にとどまり、他の断面形状とは顕著な差が認められた。材の加工法別に断面形状を観察すると、まず、割り裂きの出土量は平・四角が同程度で88.6%を占めており、全体に加工度合いが低いようである。削り出しでは多角が最も多く、割り裂きではわずか1点のみであった丸が24点出土している。

断面形状をA～Fのタイプ別にみると(表13)、まず、Aは多角が88点と最も多く、A～Fの総点数の22.2%を占める。丸はB・

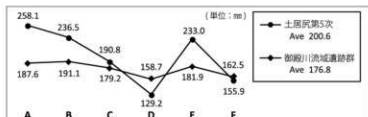


図29 タイプ別法量平均値

表11 完形品法量一覧

長さ(mm)	出土点数					
	A	B	C	D	E	F
300以上	5	0	1	0	3	0
290～	10	1	0	0	0	2
280～	16	4	1	0	0	1
270～	15	2	3	0	3	1
260～	24	5	2	0	3	1
250～	27	5	7	0	3	0
240～	33	1	2	0	1	1
230～	6	2	2	0	0	0
220～	7	3	7	0	1	1
210～	1	0	4	0	0	1
200～	0	2	12	0	1	2
190～	0	0	6	1	2	0
180～	1	1	4	0	0	2
170～	0	0	4	0	0	0
160～	1	1	3	0	0	4
150～	0	1	2	0	1	1
140～	1	0	3	2	2	3
130～	0	1	0	2	2	2
120～	0	0	2	2	1	6
110～	0	0	6	3	0	3
100～	0	0	3	0	0	0
100未満	1	0	2	0	0	6
計	148	29	76	10	23	37
平均(mm)	258.1	236.5	190.8	129.2	223.0	155.9

表12 加工法別断面形状一覧

	出土点数				
	平	四角	多角	丸	計
割り裂き	25	29	6	1	61
削り出し	86	85	140	24	335
計	111	114	146	25	396

表13 タイプ別断面形状一覧

	出土点数				
	平	四角	多角	丸	計[内割り裂き]
A	38	62	88	21	209 [9]
B	11	7	14	3	35 [2]
C	30	22	28	1	81 [16]
D	7	2	1	0	10 [0]
E	4	9	10	0	23 [8]
F	21	12	5	0	38 [26]
計	111	114	146	25	396 [61]

Cではわずか、D～Fでは出土しない一方、Aでは21点出土しており、Aに集中していることがわかる。Bは平と多角がやや多い。両端を尖らせるA・Bは、共に割り裂きの割合が低く、全体に丁寧な削りの加工をしたものが多い。丸に至っては削りの稜線がほとんど残らないものが多いため、磨きをかけている可能性がある。Cは丸を除く断面形状に大きな差異は認められず、割り裂きは16点(19.8%)である。Dは平に集中し、割り裂きはない。片側のみ尖らせるC・Dは歪な形状のものも多く、特にCは全体の加工の度合いが低いようである。Eは四角・多角が多く、割り裂きは8点(34.8%)とやや多い。Fは平・四角が大半で、割り裂きは26点(68.4%)とA～Fの中で最も多く、法量・幅共に統一性がなく不揃いで歪な形状を持つ。

最後に、ここまで述べてきた箸状木製品の形態と出土地点の検討から、使用方法を復元できるか考えてみたい。まず、表10から遺構別の出土量をみると、Ⅲ検土4・グリッド(NSO-S5/E28-E36)は調査地全体の57.1%と突出しており、焼痕のあるものについても62.2%を占めている。タイプについては、Aが最も多く半数以上を占め、Dは出土しない。加工法は、胴部の表面調整や尖りの加工が丁寧なものが多い削り出しで、尚且つ丸の断面形状を持つものが大半である。遺構の性格をみると、土4は食器や食器の他、櫛・笄・簪などの服飾具の出土が目立つことから、日常使いの生活用品をまとめて廃棄したゴミ穴と考えられる。グリッド(NSO-S5/E28-E36)についても同様に生活用品が多く、恐らく建物の跡地にゴミを廃棄したと思われ、日常で使用していた箸を廃棄した可能性が高い。16世紀代に該当するⅣ検では土2・溝1での出土が目立ち、調査地全体では7.5%、Ⅳ検では60.7%を占める。タイプについてみると、土2ではCが、溝1ではEが優位となり、Aを主とするⅢ検とは異なる様相をみせる。加工法は、全体に加工の度合いが低い割り裂きが多く、粗い尖り加工のものが多い。土2・溝1は、いずれも斎串や形、折敷といった木製祭祀具が相伴しており、何らかの祭祀を執り行なう場としての様相をみせることから、その場限りの使用を目的として簡易的に作られた祭祀用の箸あるいは斎串であった可能性が窺える。

次に、焼痕を持つ箸状木製品についてみていく。表14はA～Fのタイプを断面形状別に表したものである。欠損品を含むA～Fの総点数396点のうち、31点(7.8%)が焼痕を持つ。タイプ別にみると、Aは5点(16.1%)、Bは1点(3.2%)、Cは5点(16.1%)、Dは1点(3.2%)、Eは出土せず、Fは19点(61.3%)で最も多い。断面形状は、平と四角が26点と全体の83.9%を占め、丸はわずか1点のみである。表15では、さらに材の加工法で区分してみた。焼痕を持つ割り裂きは19点、削り出しは12点で、割り裂きが若干優位な程度である。しかしタイプ・断面形状に注目すると、削り出しではタイプ・断面形状による特徴はみられない一方、割り裂きではFの平・四角に集中(全体の73.7%)しており、形態によって使い分けがされていたことが窺える。焼痕を持つ箸状木製品を観察すると、いずれも火をつけて間もなく消されたようで、恐らく火を移したり、明かりを灯す、あるいは祭祀の場で使用されたことが想定される。加工の度合いから、Fは火付け木用として用意されたもので、削り出しは丁寧な加工のものが多いことから、不要になった箸などを火付け木として転用したと推定される。

(参考・引用文献)

[注1] 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 「第4節 祭祀具」『御殿川流域遺跡群Ⅰ』

表14 断面形状別一覧(焼痕有)
出土点数

	平	四角	多角	丸	計
A	1	2	1	1	5
B	1	0	0	0	1
C	1	3	1	0	5
D	0	1	0	0	1
E	0	0	0	0	0
F	8	9	2	0	19
計	11	15	4	1	31

表15 加工法別一覧(焼痕有)
(割り裂き) 出土点数

	平	四角	多角	丸	計	内転用
A	0	2	1	1	4	[4]
B	0	0	0	0	0	[0]
C	0	2	1	0	3	[3]
D	0	1	0	0	1	[1]
E	0	0	0	0	0	[0]
F	3	0	1	0	4	[1]
計	3	5	3	1	12	[9]

(削り出し) 出土点数

	平	四角	多角	丸	計	内転用
A	1	0	0	0	1	[1]
B	1	0	0	0	1	[1]
C	1	1	0	0	2	[2]
D	0	0	0	0	0	[0]
E	0	0	0	0	0	[0]
F	6	8	1	0	15	[0]
計	9	9	1	0	19	[4]

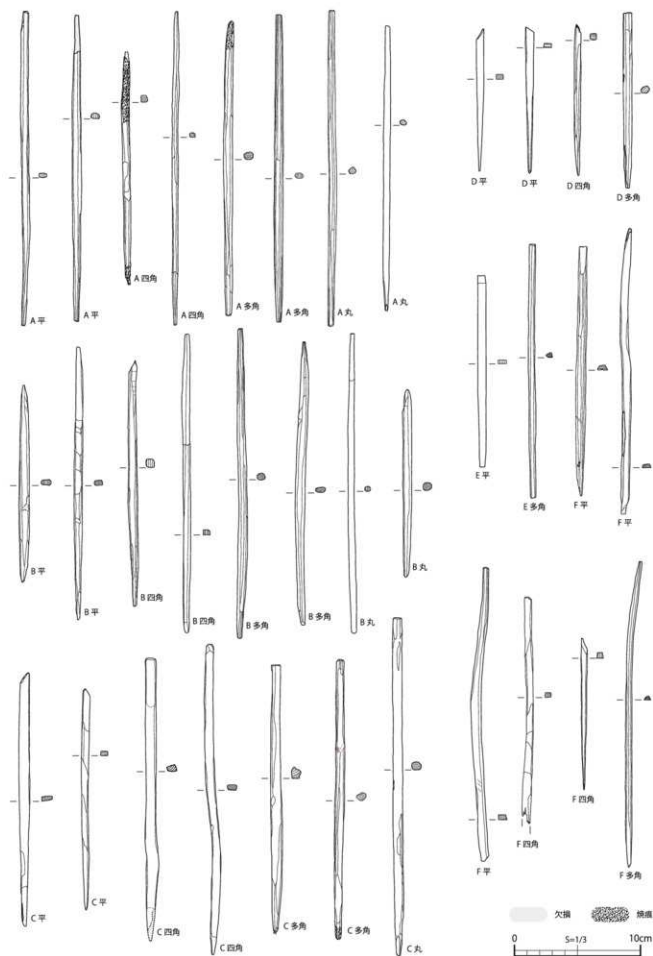


图30 箭状木製品

5 石器・石製品 (表 16、図 31、写真図版 10)

合計 60 点の石器・石製品が出土した。そのうち遺存状態の良いものを中心に 8 点を図示し、概要を述べる。それ以外のものは一覧表を参照された。

硯 (1～3) 3 点図示した。石材は、粘板岩製 (1・2) と頁岩製 (3) が認められ、いずれも内・外面の平面形は長方形を呈す。1 は、海部から陸部にかけての縁部分に墨の付着が確認できる。2 は、割れ面も含め全体的に被熱により赤色化している。陸部に直径 2.1mm、深さ 1mm の小さい穿孔が観察された。

砥石 (4～6) 砥石の合計で 21 点出土しており、全体の 3 割程度を占める。それぞれ石質から仕上げ砥、中砥、荒砥に分類した。4 は仕上げ砥で、裏面と左側面にノミ加工痕が認められた。5 は、「ゴザ目」と呼ばれる櫛目状のタガネ痕を持つ仕上げ方法から砥沢産の砥石と考えられる。これまでの調査や絵図・文献から、松本城下町に砥沢砥石を扱う砥石問屋があったとされる。6 の断面形は扁平長方形を呈し、右側面には接着のためと考えられる漆が残存している。

磨石 (7) 棒状の自然礫で、片方の先端に使用痕と考えられる磨面が観察される。サイズや形状、使用痕の位置から、乳棒として使用されたものと推測される。

温石 (8) 蛇紋岩製で、長軸に半割れし、半分程度欠損している。最大径 8.0mm の孔が上部に認められる。孔の断面形状から、片側からの穿孔と考えられる。また、未貫通の穿孔が表面中央にも認められる。蛇紋岩は、空間的隙間の多さから熱伝導率が低く、一度温めたら冷めにくいという特性を持つため、温石として用いられることが多い石材である。

表 16 石器・石製品一覧表

図 No.	名称	区	出土 遺構	石材	長(口径 cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	破損状況	備考
1	硯	西	廻廊	粘板岩	(11.83)	(3.36)	(1.19)	(70.0)	2/3 欠	平面:長方形。断面:長方形。海部・陸部の一部に墨付着
2	硯	西	廻廊	粘板岩	(9.64)	(3.84)	(1.06)	(48.4)	1/2 欠	平面:長方形。被熱。陸部に穿孔 1 方(φ 0.21cm・木貫通深さ 0.10cm)
3	砥石か	西	廻廊	頁岩	(6.23)	(2.82)	(2.50)	(80.0)	3/4 欠	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 1。仕上げ砥
4	石筆	西	廻廊	滑石	(3.40)	0.62	0.49	(2.2)	1/4 欠	平面:長方形。断面:櫛目形
5	砥石	西	T1	頁岩	(3.58)	(1.84)	(0.41)	(4.8)	破片	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 2。仕上げ砥。縁染研磨痕あり
6	白石	西	建土	安山岩	(14.20)		(13.38)	(6800.0)	2/3 欠	粉砕き白の下付。溝 6 分面
7	砥石	東 I	廻廊	頁岩	(7.89)	(3.75)	2.23	(98.0)	1/4 欠	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 3。仕上げ砥。ノミ加工痕あり
8	砥石	東 I	土 49	頁岩	(7.58)	(3.76)	0.80	(20.2)	2/3 欠	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 3。仕上げ砥
9	砥石	東 I	土 54	砂岩	(3.92)	4.87	3.06	(99.1)	3/4 欠	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 5。中砥。被熱
10	硯	東 I	検出面	頁岩	(13.46)	(5.31)	1.15	(116.6)	1/2 欠	平面:長方形。断面:長方形
11	砥石	東 I	検出面	頁岩	16.87	5.64	2.79	480.0	完形	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 3。中砥。砥沢産砥石
12	凹石	東 I	検出面	安山岩	8.92	8.98	5.92	652.0	完形	平面:円形。断面:長方形。凹み 2 面(φ 5.65cm・深さ 1.86cm / φ 4.94cm・深さ 0.85cm)。断面整形有り
13	砥石	東 I	検出面	頁岩	(4.91)	(1.69)	0.86	(9.1)	1/4 欠	平面:長方形。断面:扁平長方形。砥面数 2。仕上げ砥。縁染研磨痕あり
14	破片	東 I	検出面	黒曜石	2.48	0.90	0.38	0.6	完形	
15	砥石	東 I	検出面	粘板岩	2.23	(2.00)	(0.57)	(2.5)	1/3 欠	平面:円形。断面:扁平長方形。黒石
16	砥石	東 I	検出面	粘板岩	2.10	2.10	0.44	3.2	完形	平面:円形。断面:扁平長方形。黒石
17	砥石	東 I	検出面	頁岩	4.55	(1.42)	(1.42)	(11.2)	破片	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 1。仕上げ砥。縁から転用か
18	温石	東 I	検出面	蛇紋岩	7.35	(3.49)	1.77	(94.5)	1/2 欠	平面:長方形。断面:長方形。穿孔 2 方(φ 0.80cm・片側穿孔孔 / φ 0.38cm・木貫通深さ 0.28cm)
19	砥石	東 I	検出面	凝灰岩	(10.41)	(7.28)	(3.77)	(414.0)	1/3 欠	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 3。中砥
20	砥石	東 I	検出面	頁岩	(8.86)	3.90	1.44	(61.2)	1/3 欠	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 1。荒砥
21	砥石	東 I	検出面	粘板岩	(9.51)	(2.12)	(1.17)	(24.8)	1/4 欠	平面:不明。砥面数 1。中砥。ノミ加工痕あり
22	砥石	東 I	検出面	粘板岩	2.23	2.23	0.60	4.6	完形	平面:円形。断面:扁平長方形。黒石
23	砥石	東 I	検出面	粘板岩	2.30	(2.23)	(0.31)	(2.2)	1/2 欠	平面:円形。断面:扁平長方形。黒石。被熱
24	砥石	東 I	検出面	粘板岩	(2.14)	(1.82)	(0.30)	(0.9)	1/4 欠	平面:円形。断面:櫛目形。黒石
25	砥石	東 II	水道遺構 1	凝灰岩	(3.10)	3.62	1.79	(28.0)	2/3 欠	平面:長方形。断面:長方形。砥面数 4。仕上げ砥
26	砥石	東 II	水道遺構 2	粘板岩	2.21	1.89	0.48	3.1	完形	平面:櫛目形。断面:扁平長方形。黒石
27	砥石	東 II	水道遺構 2	頁岩	(6.18)	5.03	(1.16)	(37.5)	1/2 欠	平面:長方形。断面:扁平長方形。被熱
28	砥石	東 II	土 24	粘板岩	2.20	2.19	0.31	2.9	完形	平面:円形。断面:扁平長方形。黒石
29	破片	東 II	土 30	チャート	3.30	3.25	1.72	15.8	完形	
30	破片	東 II	土 32	チャート	3.40	2.72	0.90	6.4	完形	
31	砥石	東 II	土 34	凝灰岩	(3.48)	1.66	0.59	(4.1)	1/3 欠	平面:長方形。断面:扁平長方形。砥面数 2。仕上げ砥
32	砥石	東 II	土 38	粘板岩	2.14	1.70	0.56	3.1	完形	平面:不整形櫛目形。断面:扁平長方形。黒石
33	砥石	東 II	土 39	石英	4.18	3.31	1.49	35.3	完形	

ID No.	種別	区	検出地	遺構	石材	長/口幅 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考	
34	基石	Ⅱ	Ⅱ	土 54	粘板岩	2.20	2.20	0.46	(3.4)	1/4 欠	平面：円形、断面：扁平な楕円形、片面中央部に穿孔 (φ 0.13m・深さ 0.06m)、黒石	
35	石板	Ⅱ	Ⅱ	土 54	粘板岩	(5.79)	(5.52)	0.38	(25.7)	3/4 欠	平面：方形か、表面にマズ目状・裏面に仕切り線状の凹痕あり	
36	凹石	Ⅱ	Ⅱ	検出地	花崗岩か	(10.50)	10.36	7.62	(1054.0)	1/4 欠	平面：円形、断面：楕円形、凹み 1 面 (φ 5.62m・深さ 1.76m)、焼熟	
37	基石	Ⅱ	Ⅱ	検出地	粘板岩	2.19	1.86	0.50	3.2	完形	平面：不整楕円形、断面：不整楕円形、黒石	
38	基石	Ⅱ	Ⅱ	検出地	粘板岩	2.28	(2.11)	0.23	(1.5)	1/2 欠	平面：円形、断面：扁平な楕円形、焼熟により全面赤色化	
39	砥石	Ⅱ	Ⅱ	検出地	頁岩	(5.07)	4.23	(1.12)	(33.5)	1/2 欠	平面：長方形、断面：扁平な長方形、砥面数 1、中砥、極楽研磨痕あり、約断して 3 片に分離	
40	凹石	Ⅱ	Ⅱ	検出地	花崗岩か	(8.47)	(6.84)	4.58	(351.0)	1/2 欠	平面：楕円形、断面：扁平な楕円形、凹み 1 面 (φ 3.89m・深さ 0.56m)	
41	銅片	Ⅱ	Ⅱ	検出地	石炭	1.99	1.53	0.46	1.5	完形	火打石か	
42	砥石	Ⅱ	Ⅱ	検出地	凝灰岩	(11.83)	6.88	(4.41)	(522.0)	1/2 欠	平面：長方形、砥面数 1、完成	
43	6	砥石	Ⅱ	Ⅱ	検出地	頁岩	(6.71)	(3.06)	0.60	(16.1)	1/3 欠	平面：長方形、断面：扁平な長方形、砥面数 2、中砥、漆による接着面あり
44	砥石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	検出地	頁岩	(8.21)	3.23	0.90	(3.8)	1/4 欠	平面：長方形、断面：扁平な長方形、砥面数 2、仕上げ、2 片に分離
45	砥石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	検出地	頁岩	(5.16)	3.61	0.59	(17.1)	1/3 欠	平面：長方形、断面：長方形、砥面数 1、仕上げ、焼熟
46	7	棒状製品	Ⅱ	Ⅱ	検出地	頁岩	9.18	2.26	2.35	71.1	完形	片側先端に使用痕、摺棒として使用か
47	砥石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	土 13	凝灰岩	(7.78)	2.80	(8.88)	(24.3)	1/4 欠	平面：長方形、断面：扁平な長方形、砥面数 2、仕上げ
48	基石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	グリッド	粘板岩	2.07	1.92	0.51	3.4	完形	平面：不整円形、断面：不整楕円形、黒石
49	棒状製品	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	グリッド	安山岩か	3.00	2.79	0.89	10.5	完形	平面：円形、断面：楕円形、自検より同型の金属円筒が出土している
50	火打石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	土 91	石炭	3.20	2.84	2.13	16.9	完形	1 線辺使用
51	基石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	検出地	粘板岩	2.48	1.71	0.49	3.3	完形	平面：不整楕円形、断面：楕円形、黒石
52	基石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	検出地	粘板岩	2.33	1.83	0.56	3.8	完形	平面：楕円形、断面：楕円形、黒石
53	基石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	検出地	粘板岩	2.09	1.61	0.46	2.1	完形	平面：不整楕円形、断面：不整楕円形、黒石
54	基石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	検出地	頁岩	2.30	1.79	0.56	3.6	完形	平面：不整楕円形、断面：楕円形、黒石
55	砥石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	検出地	頁岩	(3.81)	3.22	(3.30)	(4.7)	2/3 欠	平面：長方形、砥面数 1、仕上げ、2 片に分離
56	石槌	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	土 11	黒曜石	2.82	1.91	1.39	6.5	完形	
57	火打石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	チャート	5.84	3.60	2.18	42.9	完形	2 線辺使用	
58	基石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	土 1	凝灰岩	2.01	1.66	0.52	2.0	完形	平面：不整楕円形、断面：楕円形、白石
59	火打石	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	土 1	石炭	2.97	1.54	1.82	10.5	完形	1 線辺使用か
60	銅片	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	土 30	チャート	2.64	1.41	0.64	2.7	完形	火打石の破片か

※ () 内数値は現存額を表す。

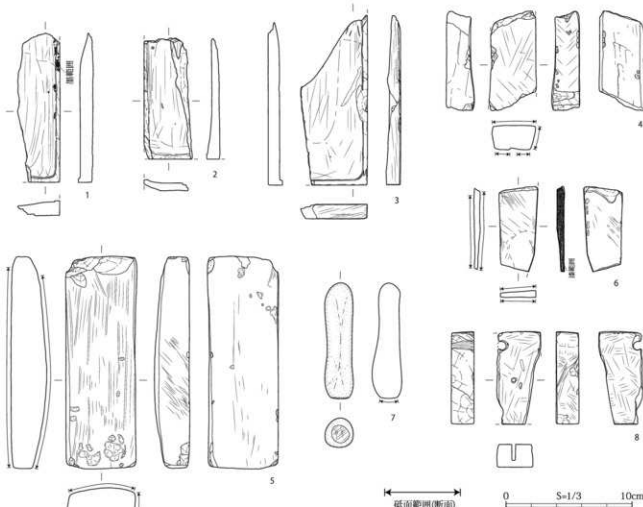


図 31 石器・石製品

6 金属製品 (表 17、図 32、写真図版 10)

309 点が出土している。材質別の内訳は鉄製品 180、銅製品 66、鉛製品 2、銭貨 51、鉄滓 10 点である。器種別内訳は、鉄製品が釘 120・刀子 6・火箸 1・鍋 2・不明 51 点、銅製品が煙管 22・刀装具 9 (切羽 1・目貫 1・小柄 6・斧 1)・簪 1・鈴 1・分銅 1・襖引手 1・銅線 4・不明 27 点、鉛製品が鉛玉 1・不明 1 点である。地点別では、西区から 24 点 (総堀内 6 点・その他 18 点)、東区から 285 点 (Ⅰ検 149・Ⅱ検 108・Ⅲ検 19・Ⅳ検 7・Ⅴ検 1・排土 1) が出土している。

出土遺物はすべて識別番号(ID)を付し、ルーペ併用の肉眼観察を行って一覧表を作成した。紙幅の関係で、遺構から出土したものの、稀少なもの、特徴的なものを中心に、実測図・拓本 36 点と写真 13 点を掲載している。以下、金属製品のうち特徴的な遺物を中心に述べるが、個々の遺物は ID 番号で記載している。

鉛玉 1 は総堀から出土したもので、火縄銃の弾丸と推定される。刀子は図示していないが、6 点のうち 2 点は小柄の茎部と考えられるものである。刀装具はすべて検出面からの出土である。このうち小柄は 6 点出土し、うち 5 点には茎部が残存していた。26 は中央に「丸に立ち沢瀉紋」が彫られているが、一般的な沢瀉紋では中央葉の左右にある花序が 5 花であるのに対し 3 花になっている。230 は、魚子地に 2 本の矢が高彫され金鍍金が施された優品である。簪 284 は、飾部に帆掛け船を精緻に毛彫りし、足に接続する部分には T 字形の櫛を彫りこんでいる。分銅 285 は竿秤の分銅で、2 面の刻印のうち 1 面は「天下一」とある。襖引手 286 は、横長で波間に浮かぶ水鳥の姿が地金の裏面から打ち出しされ、波の細部は表面から仕上げられている。

銭貨は、寛永通宝 26・中国銭 20 (唐銭 1 種 4・北宋銭 9 種 13・南宋銭 1・明銭 1・不明 1)・雁首銭 3・不明 2 点があり、遺構から出土した 19 点を図示している。このうち寛永通宝では、49 が足字銭 (下野国足尾銭)、196 が四文銭 (波銭) である。また、Ⅱ 検の P35 から中国銭 8 点 (唐銭 3 (すべて開元通宝)・北宋銭 4・明銭 1 (洪武通宝)) が重なった状態で出土した他、Ⅳ 検の土 7 からは寛永通宝 3 点が出土している。

表 17 金属製品一覧表

検	写真	ID	区	検出面	出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	金属 類別	備考	
1	1	1	西区	総堀 No.439		鉛玉	12.9	12.8	12.2	12.2	鉛	実形	
2	181	東区	Ⅱ 検	水通遺構 1C トレンチ		煙管	49.2	15.7	13.4	5.4	銅	全鍍金。実形	
3	192	東区	Ⅱ 検	土 32		煙管	75.0	30.0	14.7	6.1	銅	口内部分欠	
4	283	東区	Ⅲ 検	土 4 No.1		煙管	53.6	10.6	10.2	8.7	銅	全鍍金。火蝕欠	
5	307	東区	Ⅳ 検	土 2		煙管	59.0	8.2	8.2	4.6	銅	全鍍金。実形	
6	2	59	東区	Ⅰ 検	検出面	刀装具	切羽	38.3	23.0	1.0	3.3	銅	上部部欠
3	159	東区	Ⅰ 検	検出面 N2E24		刀装具	目貫	40.4	11.3	4.0	4.7	銅	全鍍金。破損状況不明
7	25	東区	Ⅰ 検	検出面 No.11		刀装具	小柄	78.2	12.6	4.6	15.3	銅・鉄	茎部残存。実形
8	4	26	東区	Ⅰ 検	検出面 No.12	刀装具	小柄	94.3	15.1	4.5	16.1	銅	丸に立ち沢瀉紋。実形
9	27	東区	Ⅰ 検	検出面 No.16	刀装具	小柄	98.0	13.7	5.5	22.6	銅	茎部残存。実形	
10	5	108	東区	Ⅲ 検	検出面 S5E27	刀装具	小柄	97.1	15.2	5.8	22.2	銅	葉部欠。実形。葉部欠。実形
11	6	200	東区	Ⅲ 検	検出面 S8E28	刀装具	小柄	115.1	14.5	4.7	33.8	銅	葉部欠。彫刻の一部欠。実形
12	6	230	東区	Ⅲ 検	検出面 S5E24	刀装具	小柄	97.0	14.5	5.5	26.5	銅	高彫文字。全鍍金。葉部残存。実形
13	7	292	東区	Ⅲ 検	検出面 No.84	刀装具	斧	160.5	11.7	1.8	16.8	銅	銅製穿孔。ほぼ実形 (表面の一部が剥落)
14	8	284	東区	Ⅲ 検	土 13	簪	169.5	30.3	0.8	5.7	銅	銅製文様。実形	
15	9	285	東区	Ⅲ 検	土 13	分銅	33.0	13.5	13.1	41.4	銅	鑄造の面 (片面は「天下一」)。実形	
16	10	286	東区	Ⅲ 検	土 13	襖引手	94.3	96.3	18.5	15.7	銅	全鍍金。水鳥彫刻 (打ち出し)。実形 (葉部)	
11	251	東区	Ⅲ 検	検出面 No.81	鈴	不明	27.7	22.1	13.1	2.2	銅	下半部分が折れている。ほぼ実形か	
17	180	東区	Ⅲ 検	水通遺構 1C		銅貨	65.9	39.5	3.4	7.5	銅	鈔銭。再鑄削面。実形	
19	36	東区	Ⅰ 検	土 15	銭貨	聖徳元宝	24.9	24.6	1.5	2.6	銅	実形	
19	36	東区	Ⅰ 検	土 15	銭貨	元亨通宝	23.1	23.1	0.9	1.7	銅	字面が非常に薄く、字面 2 箇所欠	
20	38	東区	Ⅰ 検	土 17	銭貨	寛永通宝	23.8	23.6	1.2	2.7	銅	実形	
21	12	49	東区	Ⅰ 検	土 21	銭貨	寛永通宝	23.1	23.1	1.0	1.8	銅	足字銭 (下野国足尾銭)。実形
22	183	東区	Ⅲ 検	土 8	銭貨	寛永通宝	23.2	23.1	1.1	2.3	銅	実形	
23	187	東区	Ⅲ 検	土 26	銭貨	寛永通宝	23.0	22.9	0.8	1.9	銅	実形	
24	190	東区	Ⅲ 検	土 54	銭貨	寛永通宝	27.9	27.7	1.3	3.2	銅	裏面高彫。ほぼ実形。国縁わずかに欠	
25	198	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	西武通宝	22.4	22.0	1.4	2.5	銅	実形	
26	190	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	開元通宝	23.7	23.5	1.4	3.0	銅	実形	
27	200	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	開元通宝	23.5	22.7	1.4	2.8	銅	ほぼ実形。国縁わずかに欠	
28	201	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	開元通宝	24.2	24.1	0.9	1.9	銅	実形	
29	202	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	政和通宝	25.3	25.2	1.4	2.3	銅	実形	
30	203	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	景福元宝	24.5	24.4	1.0	1.7	銅	ほぼ実形。国縁わずかに欠	
31	204	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	寛永通宝	24.1	23.5	1.2	2.6	銅	ほぼ実形。国縁わずかに欠	
32	205	東区	Ⅲ 検	P35 No.2	銭貨	聖徳元宝	24.1	24.1	1.3	2.2	銅	ほぼ実形。国縁わずかに欠	
33	288	東区	Ⅲ 検	土 28	銭貨	寛永通宝	24.5	24.3	1.1	2.8	銅	実形	
34	301	東区	Ⅳ 検	土 7 No.1	銭貨	寛永通宝	24.4	24.4	1.3	3.6	銅	実形	
35	302	東区	Ⅳ 検	土 7	銭貨	寛永通宝	22.6	22.5	1.2	1.8	銅	粗悪品。実形	
36	309	東区	Ⅳ 検	土 7 No.2	銭貨	寛永通宝	24.5	24.4	1.4	3.9	銅	金糸を穿つ物貫が付着。実形	

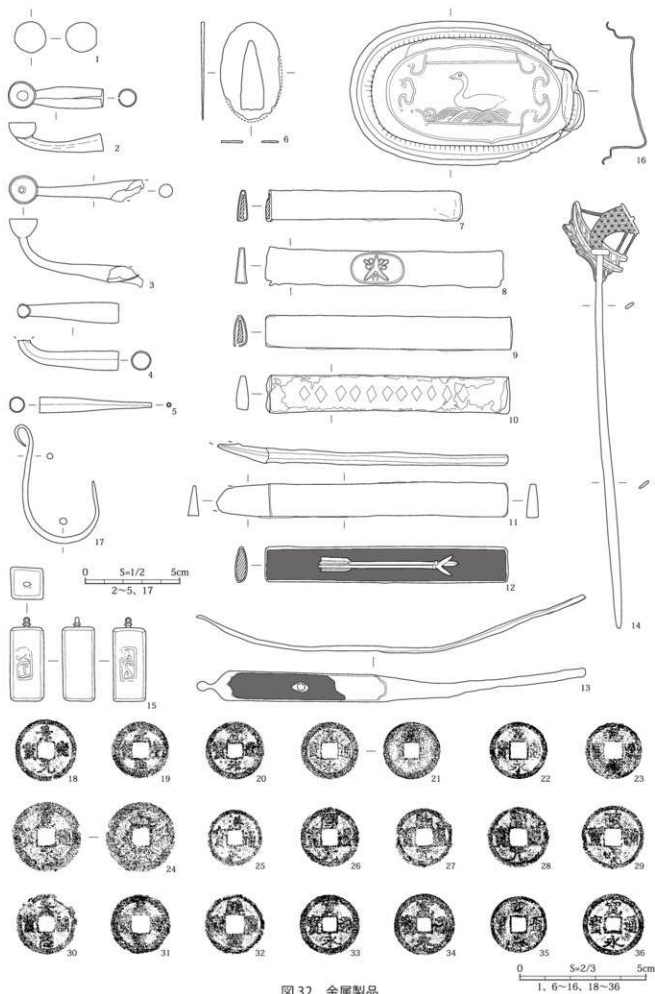


图 32 金属製品

7 自然遺物 (表 18～22)

今回の調査で、動物遺存体 57 点と植物遺存体 308 点、計 365 点の自然遺物が出土した。肉眼観察で同定を実施した。

(1) 動物遺存体

哺乳類の出土骨同定数 (NISP) は 33 個体を数える。出土試料は主に獣骨であり、不明を除いて 5 種があると同定された。鳥類・魚類で同定できたのはそれぞれニワトリとマダイのみであった。貝類は、大きく二枚貝と巻き貝に分けて表に出土点数を提示した。出土した貝類のうち 7 割程度を海生種が占める。

(2) 植物遺存体

6 種同定できた。検出面の時期ごとに出土量については、表 22 を参照されたい。特にⅢ検でのオニクルミとモモの種子の出土量が群を抜いて多くみられた。

表 18 哺乳類骨出土地別一覧表

		肩甲骨			肋骨			尺骨			大腸骨			腓骨			距骨			脛骨			中足骨			指		不明	NISP 同定 種本数	MNI 最小 個体数
		L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	尺骨	指	不明	不明	不明						
シカ	東区 1 検			1	1									1													4	1		
	東区 2 検			1																						1	2	1		
	東区 3 検					1	1								1												4	1		
シカ	東区 1 検																									2	2	1		
	東区 2 検																									2	2	1		
イノシシ	東区 1 検						1						1														2	1		
	東区 2 検																									1	1	1		
ウマ	東区 1 検																							1	2	2	4	1		
	東区 2 検																									1	1	1		
イヌ	東区 1 検																										1	1		
	東区 2 検																										1	1		
サル	東区 1 検							1																			1	1		
	東区 2 検																										1	1		
不明	東区 1 検																										6	6	-	
	東区 2 検																										2	2	-	
	東区 3 検																										2	2	-	
	東区 4 検																										1	1	-	

表 19 鳥類・魚類骨出土地別一覧表

調査区 / 検出面	鳥類				魚類			
	ニワトリ		不明		マダイ		不明	
	個数	部位	個数	部位	個数	部位	個数	部位
東区第 1 検出面	1	尺骨						
東区第 2 検出面			2	不明				
東区第 3 検出面	3	足脛中足骨 1 腕骨			1	舌骨	3	不明
東区第 4 検出面	1	足脛中足骨						

表 20 二枚貝出土地別一覧表

調査区 / 検出面	ハマグリ		シジミ		アワビ	
	個数	重量	個数	重量	個数	重量
西区総堀	1	3.8				
東区第 1 検出面	1	0.5	1	2.2		
東区第 2 検出面	2	3.4	1	0.4		
東区第 3 検出面					2	7.5

表 21 巻き貝出土地別一覧表

調査区 / 検出面	サザエ		サルボウ		アカニシ		マイマイ		不明	
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
東区第 3 検出面					1	12.2	1	2.7		
東区第 4 検出面	1	3.1	1	3.7					1	0.1

表 22 種子一覧表

調査区 / 検出面	オニクルミ		モモ		ウメ		マツ		サクラ		アズキ		不明		
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	
東区 1 検出	1	2.7													
西区総堀	1	2.2	1	1.7	1	0.6									
東区総堀	3	3	5	6.7			2	3.9							
東区第 1 検出面	2	3.7	1	3			1	3.8	1	0.4					
東区第 2 検出面	1	0.5	3	3	1	0.1			1	0.2					
東区第 3 検出面	138	229.4	66	136			4	13.3	1	0.5	8	2	3	1.9	
東区第 4 検出面	33	62.7	14	26.9	1	0.2								2	0.8
東区第 5 検出面	3	4.1	7	5.7			1	1.4						3	0.3

第4節 化学分析

1 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子

(1) はじめに

松本城三の丸跡土居尻から出土した試料4点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表23のとおりである。試料は、東区の検出面Vの土坑1と溝1から出土した木材各2点の、計4点である。土坑1の試料No.2は最終形成年輪が残存していたが、土坑1の試料No.1、溝1の試料No.3と4は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

表24に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2 σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。

土坑1の試料No.1（PLD-42492）は、662-706 cal AD（44.48%）および726-773 cal AD（50.97%）で、7世紀後半～8世紀後半の暦年代を示した。試料No.2（PLD-42493）は、659-706 cal AD（47.41%）、726-

732 cal AD (1.52%)、736-773 cal AD (46.52%) で、7 世紀中頃～8 世紀後半の暦年代を示した。どちらも飛鳥時代～奈良時代に相当する。

溝 1 の試料 No.3 (PLD-42494) は、1036-1166 cal AD (95.45%) の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。試料 No.4 (PLD-42495) は、1055-1057 cal AD (0.38%) および 1158-1226 cal AD (95.07%) の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。

木材は、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。試料 No.2 (PLD-42493) は、最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、木材が伐採もしくは枯死した年代を示していると考えられる。他の 3 点は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

表 23 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-42492	調査区: 東横山田: V 遺構: 土坑 1 試料 No.1	種類: 生材 (カエデ属) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 樹種: 不明 状態: wet 依頼注意: ケイソン CG0.1% 含液	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (電極: 1.2 mol/L 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 電極: 1.2 mol/L)
PLD-42493	調査区: 東横山田: V 遺構: 土坑 1 遺物 No.2 試料 No.2	種類: 生材 (カエデ属) 試料の性状: 最終形成年輪 樹種: 杭 状態: wet 依頼注意: ケイソン CG0.1% 含液	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (電極: 1.2 mol/L 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 電極: 1.2 mol/L)
PLD-42494	調査区: 東横山田: V 遺構: 溝 1 遺物 No.43 試料 No.3	種類: 生材 (クワ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 樹種: 杭 状態: wet 依頼注意: ケイソン CG0.1% 含液	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (電極: 1.2 mol/L 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 電極: 1.2 mol/L)
PLD-42495	調査区: 東横山田: V 遺構: 溝 1 遺物 No.48 試料 No.4	種類: 生材 (スズ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 樹種: 杭 状態: wet 依頼注意: ケイソン CG0.1% 含液	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (電極: 1.0 mol/L, 電極: 1.2 mol/L)

表 24 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

測定番号	δ^{13C} (‰)	暦年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-42492 試料 No.1	-23.80 ± 0.18	1302 ± 19	1300 ± 20	669-687 cal AD (22.86%) 699-701 cal AD (44.48%) 742-772 cal AD (50.97%) (43.20%)	飛鳥 ～奈良
PLD-42493 試料 No.2 遺物 No.2	-30.62 ± 0.22	1309 ± 21	1310 ± 20	665-686 cal AD (28.52%) 742-762 cal AD (1.52%) 764-772 cal AD (11.10%)	飛鳥 ～奈良
PLD-42494 試料 No.3	-26.05 ± 0.20	927 ± 20	925 ± 20	1047-1083 cal AD (26.59%) 1095-1103 cal AD (16.4%) 1125-1141 cal AD (13.91%) 1147-1160 cal AD (11.83%)	平安 中期～ 後期
PLD-42495 試料 No.4 遺物 No.48	-23.63 ± 0.21	863 ± 20	865 ± 20	1175-1195 cal AD (34.35%) 1199-1219 cal AD (53.92%)	平安 中期～ 鎌倉

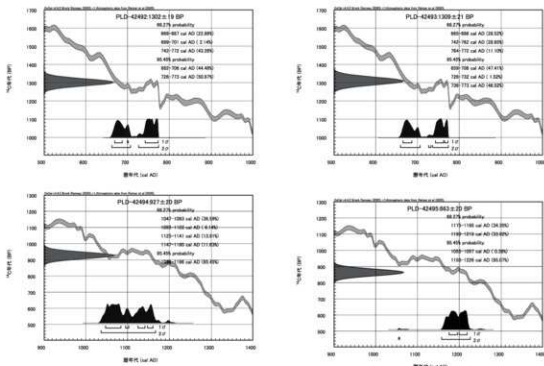


図 33 暦年代校正結果

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kulik, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

2 松本城三の丸跡土居尻出土木材の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

松本城三の丸跡土居尻から出土した木材 4 点について樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている (放射性炭素年代測定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、被害地区の検出面Vで、土坑 1 から出土した不明木製品と杭材、溝 1 から出土した杭材 2 点の、合計 4 点である。調査所見による遺構の時期は不明であるが、年代測定の結果、土坑 1 の試料は 2 点とも飛鳥時代～奈良時代、溝 1 の試料は平安時代中期～鎌倉時代に収まる暦年代を示した (放射性炭素年代測定の項参照)。

これらの試料から、剃刀を用いて 3 断面 (横断面・接線断面・放射断面) の切片を採取し、ガムクロールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。

(3) 結果

樹種同定の結果、針葉樹のモミ属とスギ、広葉樹のクリとカエデ属の 4 分類群が確認された。結果を表 25 に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載する。

ア モミ属 *Abies* マツ科 (No.1)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 1 ~ 4 個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約 5 種がある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

イ スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 (No.4)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

ウ クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 (No.3)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材であ

る。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

エ カエデ属 *Acer* ムクロジ科 (No.2)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において、木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様が見られる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。木材組織からはチドリノキやカジカエデ以外は識別困難なため、この2種を除いたカエデ属とする。材は全体的に緻密で、韌性がある。

(4) 考察

土坑1の不明木製品はモミ属、杭はカエデ属であった。溝1の杭は、クリとスギであった。不明木製品に使用されていたモミ属は、軽軟で加工容易な材である。また、杭材に使用される木材は、材質にこだわりなく、周辺に生育していた樹木が利用される傾向がある(伊東・山田編, 2012)。クリの材は重硬、カエデ属の材は比較的軽硬、スギは軽軟な材であり、松本城三の丸跡土居層出土の杭材も、遺跡周辺に生育していた樹木が伐採利用されたと推測される。

表25 樹種同定結果一覧

No.	整理カード番号	地区	検出面	遺構	取上げNo.	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	EV1	東	V	土坑1	1	不明	モミ属	不明	PLD-42492
2	杭1	東	V	土坑1	2	杭	カエデ属	丸木	PLD-42493
3	杭-15	東	V	溝1	43	杭	クリ	割材	PLD-42494
4	杭-18	東	V	溝1	48	杭	スギ	角材	PLD-42495

(参考・引用文献)

- 平井信二 (1996) 木の百科 394p 朝倉書店
 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌 238p 海青社
 伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース— 449p 海青社

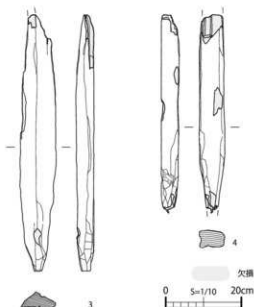


図34 科学分析用木製品

表26 科学分析用木製品一覧表

No.	手法	法量 (cm)			破損状況	備考
		長	幅/径	厚		
1	板材/板目	(48.0)	18.7	5.8	1/4欠	側面に表面調整の工具痕、両端欠損。一部炭化。著しく劣化、木目方向に2分割
2	芯持ち	(80.0)以上	(9.0)	—	不明	先端のみ2方向から突らせる、8分割
3	みかん割り	(67.8)	8.9	4.4	ほぼ完形	両端を突らせる。全体に工具痕、下端欠損
4	方形割り	(52.4)	(6.7)	(4.6)	不明	下端を突らせる。劣化著しく加工痕不明瞭、上部折損、下端欠損。圧痕複数

※ () 内数値は現存額を表す。

第Ⅳ章 調査のまとめ

本調査によって、さまざまな時期の生活面から多くの遺構を確認し多量の遺物が出土した。主な成果や今後の課題について以下のとおりにとまとめた。

調査地の西半は、絵図との照合により総堀の立ち上がり部分と土塁に位置するとされていたが、調査の結果はほぼ絵図と一致することが判明した。平成18・20年度の西総堀での確認調査により、総堀法面や土塁の構造が確認されていたが、今回の調査でも同様の成果が得られた。総堀法面と土塁法面の境界のテラスから長さ約10.8mに渡り杭列が検出された。残存状況の良さから、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所からの助言をいただきながら、杭の詳細な観察・記録を行った。その結果、出土した杭には4種類の割杭と転用材が確認でき、その分布状況に種別ごとのまとまりを認めることができた。このことから、それぞれの杭の形状には、異なった目的や機能を有していることがみえてきた。

東区Ⅳ検は、16世紀代に帰属する出土遺物と土塁形成以前の層位面であることから、16世紀末頃の小笠原貞慶による三の丸の整備開始以前の時期であると考えられる。検出された遺構は、上層の近世とは密度や遺構配置の様相等が異なり、主な遺構として小規模な建造物基礎と溝跡、特殊な大形土坑が検出された。陶磁器の出土は東区Ⅰ～Ⅲ検に比べ少ない一方、目立って祭祀具と分類される木製品がこれらの遺構から出土している。このような出土状況から、一般的な集落の一端ではなく、祭祀的な空間が広がっている可能性がうかがえた。本調査地から北東に50m程離れた土居尻第11次調査（令和元年度調査）では15世紀後半から16世紀初頭の溝状遺構から大量の柿葎が出土していることもあり、今後の課題として、調査地一帯の調査成果を合わせて検討する必要がある。

東区Ⅴ検で検出された遺構は、少量ではあるが8世紀後半～9世紀後半に帰属する遺物が伴ったことで、三の丸内で初めて平安時代の遺構が確認された。周辺では以前から縄文時代～古墳時代、中世の遺物が散見されている。調査地東には大名町遺跡、南東には土居尻遺跡が位置しており、近年調査した、大名町第2次調査（平成30年度調査）では、9世紀の黒色土器の杯と須恵器の杯を確認しているため、今回の調査成果と周辺で実施された一連の調査成果を総合的に評価し、周辺の遺跡を再整理する必要性が生じた。

また、箸状木製品が1,670点と大量に出土したことから、その特徴を理解するために形状別の分類を試み、考察を行った。分類方法は先行事例に倣い実施した。その結果、中世と近世において出土状況や形状に一定の差を見ることができた。17世紀前半～18世紀前半の東区Ⅲ検では、ゴミ穴や建物基礎部を中心に数百点の箸状木製品が廃棄されていることが特徴として挙げられる。そして、16世紀代の東区Ⅳ検では、祭祀具である人形や齋串等との共件が多くみられたため、その多くが祭祀目的で使用された齋串であった可能性が高い。さらに、加工方法による出土傾向の違いも確認できた。なお、市内で箸状木製品が多量に出土した事例として、四賀地区の殿村遺跡が挙げられる。中世の寺院跡と推定される同遺跡では、これまで1,200点以上の箸状木製品（出土状況等から齋串状木製品として取扱い）が出土していることから、東区Ⅳ検との比較検討の対象となり得る。今後、周辺での出土事例と合わせて分析することが求められる。

今回実施した第5次調査は、松本城南・西外堀整備事業および内環状北線整備事業に伴う最初の発掘調査であり、現在も調査は続いている。全調査完了時には、膨大な量の出土遺物や記録物が見込まれるが、これらを総合的に分析することで、三の丸周辺について新しい知見の獲得につながると期待される。

最後に、本調査の実施と本書の刊行にあたり、ご協力をいただいた地元町会をはじめとする関係者、関係機関各位、作業に携わった皆様に深甚なる謝意を表し結びとしたい。

写真図版 1



西区杭列全景（東から）



西区杭列・遺物出土状況（北東から）



西区杭列断ち割り状況①（東から）



西区杭列断ち割り状況②（東から）



西区武家地側全景（南から）



東区1検全景（西から）



東区1検建1（東から）



東区1検土38（東から）



東区1検土41・43（西から）



東区1検土48（北から）



東区Ⅱ検全景（北西から）



東区Ⅱ検水道 1（南東から）



東区Ⅱ検水道 2（北から）



東区Ⅱ検土 1・2（東から）



東区Ⅱ検土 40（北から）



東区Ⅲ検全景（東から）



東区Ⅲ検土 4（北から）



東区Ⅲ検土 16（南から）



東区Ⅲ検土 20（北から）



東区Ⅲ検土 31（西から）



東区IV検全景（東から）



東区IV検土2 胴木・礫出土状況（北から）



東区IV検土2 馬糞出土状況（北から）



東区IV検溝1 礫出土状況（東から）



東区V検全景（西から）



東区V検溝 1（西から）



東区V検溝 1・2（東から）



東区V検土 2 木材出土状況（南から）



東区V検土 2 柱材出土状況（南から）



西区総堀・土塁跡 磁器



西区総堀・土塁跡 陶器・土器



西区整地層 陶磁器・土器



東区I検 磁器



東区I検 陶器



東区I検 土器



東区II検 磁器



東区II検 陶器



東区Ⅱ検 土器



東区Ⅲ検 磁器



東区Ⅲ検 陶器



東区Ⅲ検 土器



東区Ⅳ検 陶磁器・土器



東区Ⅴ検 土器



東区Ⅰ検 青織部煙管



瓦

写真図版 9



服飾具



遊戯具



日用品・調理加工具・食器具



漆工用具



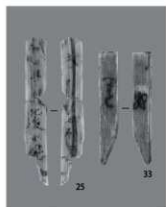
漆製品



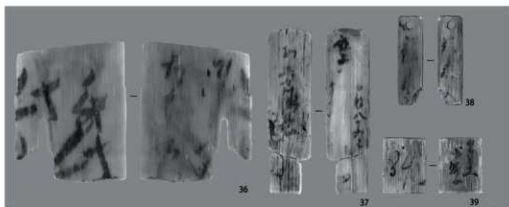
祭祀具



人形 (S=1/3)



祭祀具 (S=1/4) 赤外



木簡 (S=1/4) 赤外



石製品 (S=1/2)



金属製品 (1～7・11 : S=2/3、8 : 70%、9 : 等倍、10 : 60%、12・13 : S=1/2)

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし まつもとじょうさんのまるあと ぞいじりだい5じはくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 松本城三の丸跡 土居尻第5次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.246							
編著者名	栗津原準也、伊藤蔵之介、大西理美、関沢聡、原田健司、壬生量子、山本紀之							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	令和4年(2022)3月31日(令和3年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
松本城三の丸跡土居尻	長野県松本市大手2丁目8-18	20202	494	36度14分12秒	137度58分02秒	2014.4.23 ～ 2014.11.20	のべ1,177㎡ (1～V検 の合計)	松本城南・西外堀 整備事業および内 環状北線整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松本城三の丸跡土居尻	屋敷跡 (武家地) 総堀・土塁	戦国 ～ 近代	西区(18c後～幕末) 総堀、杭列、土塁基礎部 東区 I検(19c前～明治時代) 建物跡2軒、土坑52基、 ビット36基、礎土範囲3箇所 II検(17c後～18c前) 水道遺構2条、溝状遺構1条、 土坑42基、ビット35基 III検(17c前～18c前) 溝状遺構3条、土坑24基、 ビット20基 IV検(16c) 溝状遺構2条、土坑12基、 ビット26基 V検(9c後半) 溝状遺構2基、土坑5、 ビット3基		土器 灯明皿、内耳鍋他 陶磁器 肥前産、瀬戸・美濃産、 京都産、輸入磁器他 木製品 箸状木製品、漆器、 漆工用具、下駄他 石製品 砥石、硯、硯石他 金属製品 簀、小斬、煙管、 銭貨他			
要約	調査地は、武家地であった松本城三の丸内の土居尻という地区に位置する。西区では、絵図に描かれているとおり西総堀の三の丸跡法面と土塁基礎部を検出し、その境界のテラスに打ち込まれた杭列が見つかった。東区は武家屋敷地内であり、I～III検で17世紀前半～幕末までの多くの遺構・遺物を確認した。16世紀代に帰属するIV検では、人形や畜串等の木製祭祀具が多く出土しており、松本城期以前に祭祀的空間が広がっていたことが判明した。また、V検からは、三の丸跡範囲で初めて平安時代の遺構を確認することができた。							

松本市文化財調査報告 No.246
 長野県松本市
 松本城三の丸跡 土居尻
 ー第5次発掘調査報告書ー

発行日 令和4年3月31日
 発行者 松本市教育委員会
 〒390-8620
 長野県松本市丸の内3番7号
 印刷 精美堂印刷株式会社